経済学史学会編

経済学史学会30年史

経済学史学会

経済学史学会編

経済学史学会三〇年史

経済学史学会

まえがき

経済学史学会は一九五〇年四月に早稲田大学で最初の大会を開いていらい、三〇年をへた。この一世代とも呼ばれる期間の経過を機会に、学会の歴史を記録しておくことは、有意義でもあり、必要でもあろう。かつて創立一〇周年に編集された学会史が『日本における経済学史研究十年の歩み』と題されたように、学会三〇年の歴史は戦後日本の経済学史、経済・社会思想史研究の歩みを如実に表現するだろうからである。

今回の『経済学史学会三〇年史』は、一〇年史以後に加入した会員がすでに多くを占めている事実や、学会史としての望ましい性格にもてらして、対象を一〇年史以降に限定せず、三〇年全体にわたることとした。一〇年史以後、『経済学史学会会員名簿』や『経済学史学会年報』の定期的刊行等の諸発展もあり、『十年の歩み』と『三〇年史』とでは当然に編集方式に相違がある。刊行方式についても、日本学術会議の財政的援助をえて刊行された『十年の歩み』とはことなる条件のもとで、『年報』分載、出版社による市販、学会予算での独自刊行など三〇年史編集委員会の諸案が検討され、幹事会は最後者が適切であるとの結論に達した。

一九七八年に出口勇蔵、小林昇、水田洋、杉原四郎の歴代代表幹事と、そのまえ数期にわたり堀代表幹事のもとで事務局を担当した田中敏弘との五人からなる編集委員会が幹事会内に組織され、以後二年間の周到な作業の結果、ここにみられるような『三〇年史』を結実に導いた。本文は出口勇蔵、資料篇は田中敏弘が主として担当し、他の三委員がこれに協力した。予算の制約のもとで、可能な最大限の内容をもることに成功した委員各位の労は多とされなければならない。

『三〇年史』とは別に、『年報』第一七号の紙幅の約一割が「経済学史学会の三〇年を語る」と題する座談会の記録にあてられた。参加者は全編集委員と堀経夫、および堀代表幹事のもとで田中敏弘とともに事務局を分担した久保芳和との七人

である。これも広義の『三〇年史』の一部をなすものとして、あわせて参照されることが望ましい。『十年の歩み』にも『三〇年史』にも補完的な役割をはたしうる諸点を、座談会特有のヴィヴィッドな文脈で――最初期の回顧の上で参加者に故久保田初代代表幹事を欠かざるをえなかったことが惜しまれるが――伝えているからである。

創立三〇年記念としては、このほか成城大学での第四四回大会が三〇周年記念大会と呼ばれ、かつて恒例だった懇親会と経済学古典の展示がおこなわれる。これらは当番校の負担を考慮して割愛されるに至って久しい慣行ではあるが、成城大学の好意をえてとくに企画されることとなったものである。

また三〇周年記念出版も計画され、そのための委員会が三〇年史編集委員会と同時に幹事会内に組織された。まだ成案に達してはいないが、『日本の経済学』（仮題）を主題として、近い将来に実現の運びとなることが見込まれている。さらに、あたかも三〇周年を記念するかのように、二〇余年らいの懸案だった東北部会が本年六月に発足しえたことも附言されてよいであろう。

『十年の歩み』は創立当初一二三名だった会員が一〇周年には約五〇〇名に増加したとしているが、三〇周年の現在、会員数はさらに増大して約七〇〇名にのぼる。しかもその間に経済理論学会、社会思想史学会、日本一八世紀学会など、本学会とそれぞれの面で平行関係にある諸学会が組織されたことを考慮にいれるとき、この着実な増大は銘記されてよい。『三〇年史』の諸内容は、疑いもなく、本学会のそのような過去の発展の足どりを反映しているであろうし、また将来の発展への展望をも示唆しているであろう。

一九八〇年八月三一日

代表幹事　杉山忠平

目次

まえがき

第一部　経済学史学会の三〇年

第一章　序　言……二

第二章　創設の時……三

第三章　整備の時……一〇

第四章　充実の時……一六

第五章　新装の時……一九

第二部　資　料

Ⅰ　会　則……二六

1　学会創立時の会則……二六

2　現在の会則……二七

Ⅱ　役員および事務局……二九

Ⅲ　会員数の変動……三四

Ⅳ　学会費と学会会計……三六

V 大会研究報告……三八
VI 大会共通論題リスト……五五
VII 公開講演会……五五
VIII 外国人による特別講演……五六
IX 経済学古典書展示会……五七
X 経済学古典調査……五八
XI 学会刊行物……五八
XII 『年報』における学界展望（論文）リスト……六〇
XIII 声明書・訴え・要望書……六二
XIV 国際学会派遣……六四
XV 部会活動……六五
1 関東部会……六五
関東部会の経験……六五
関東部会研究報告……六六
2 関西部会……七〇
関西部会の回顧と展望……七〇
関西部会研究報告……七二

3　西南部会……八〇
西南部会のあゆみ……八〇
西南部会研究報告……八二
4　東北部会……九〇
東北部会の発足……九〇
資料篇あとがき……九一
人名索引

第一部　経済学史学会の三〇年

第一章　序　言

経済学史学会は昭和二五年（一九五〇）年四月に創設された。したがって本年の春に創立三〇周年を迎えたのである。

本学会の歴史を語る大切な文献は、昭和三六（一九六一）年五月に学会が編集出版した『日本における経済学史研究十年の歩み――経済学史学会十年史』――編集に当ったのは、久保田明光・堀経夫・大道安次郎・山川義雄・松田寛・久保芳和の六名で、本文は主として大道の筆になる――である。断るまでもなくこれは創立一〇周年記念の出版物であって、日本学術会議から出版費の補助を受けて公刊することができたものである。いま三〇年の歴史を編もうとすると、ここに記載されているところに多くを負わなくてはならない。この文献に接しえない多くの人々のために、本書の内容を適宜に紹介しつつ、敍述することにしたい。

本学会三〇年の歴史はいくつかの時期に分けて考えることができる。ここでは次の画期を採りたいと思う。

第一期　昭和二五（一九五〇）年から三一（一九五六）年まで――創設の時

第二期　昭和三一年から三九年（一九六四）年まで――整備の時

第三期　昭和三九年から四七（一九七二）年まで――充実の時

第四期　昭和四七年から五五（一九八〇）年まで――新装の時

この画期は現在からみた場合にある程度の意味があるとしてとられたものである。今後はまたこれと違う画期の仕方もあるであろう。なおこの画期の区切りについて一言しておきたい。本学会は、秋の大会が終了するとその年度の活動は一応とじられる。ことに幹事改選の年度には、十一月中旬以後つぎの年の三月までは、会計整理のこともあって、そのあいだには、

事務の引継ぎが明確には行えない事情がある。だから画期の場合には区切りの幅が大きくならざるを得ぬというのが、従来の実情であった。しかし最近では、役員と事務局の交替は選挙の翌年四月に行われることになっており、画期は学年末を区切りとして出来るようになっている。

では、上の四つの時に分けて、本学会の三〇年の歴史を語ることにしよう。

第二章　創設の時

（昭和二五年より三一年まで）

わが国の経済学界においては明治二九（一八九六）年四月に「社会政策学会」がはじめて設立されたことは、人の知るところである。しかしこんな古い一般的な話は省き、経済学史の研究と関係の多かった学会について述べると、昭和九（一九三四）年に「日本経済学会」という名の学会が設けられた。しかしながらその学会の活動は、日本が帝国主義戦争にのめり込むにつれて活発ではなくなり、遂には有名無実のものになってしまった。

一方、経済学史の研究には、我が国では伝統的な厚みがあった。高橋誠一郎の重商主義研究、福田徳三と河上肇との論争を通じてみられる学史研究の成果は、世人の注目をひいた。戦争の深まりにつれて、経済学の研究が、一部では、時局便乗の形で行われたのは止むをえなかったにしても、科学的良心を失わなかった研究が古典の研究に進路を取り、それを通して少しでも現実批判の姿勢を維持しようとしたので、いきおい相対的には学史・思想史の研究が盛んになっていったといえる。

また、第三に、戦時に経済学振興会が刊行した経済学の古典の翻訳シリーズ、『国富論』の邦訳書の文庫形式での刊行、

統計学古典選集の刊行などの事実も見おとすことはできない。

終戦を迎えたすぐ後で、日本人の社会的自由が一挙に認められたのに伴なって、研究活動の自由が、日常生活の欠乏と離れられぬ状況の下で、われわれに訪れた。不自由な中から刊行された「世界古典文庫」は外国の文学や哲学の典籍とともに、経済学や社会思想の書物をよみ易い形で提供したので、それらを貪るように読んだ人たちも多かった。このことは、戦時に禁止されていたマルクス経済学への復帰の強い勢と重なって、思想史的ないし学史的研究への関心をますます募らせるものであった。

研究の自由の復活はやがて専門学会の形成へと導かざるを得ず、経済学の分野では、昭和二四（一九四九）年の秋には「理論経済学会」が生まれ、研究集会も発足した。そこで発表された研究報告には学史的研究のものもあったのであって、久保田明光と堀経夫とは学史研究を専攻する学会の設立について相談するところがあった。

両教授は同学の士、すなわち高橋誠一郎、舞出長五郎、大塚金之助、坂本弥三郎にはたらきかけて賛成をえ、新しい学会を結成することに成功した。そしてこのことの裏には、我国の大学で戦前は経済学史が経済原論または経済史の担当者がかたわら講義するということが多かったのに、戦後はこの科目の講義が専攻の研究者によって行われるようになっていたという事情があったことを無視しえない。

久保田と堀は上にかかげた四氏とともに「発企人」となり、彼等の名をつらねた次の勧誘状を昭和二五（一九五〇）年一月に関係方面に送った。その主な部分を引いてみると――

「（前略）今般私共相謀り、経済学史の研究の為めにお互いに協力して切磋琢磨する機会をもちたいと考えまして、茲に経済学史学会を創設いたすことになりました。御承知のように、この分野におけるわが国の研究にも欧米のそれに比べて、必ずしも劣らぬものを見ることが出来る様になって参りましたが、この機会に同学の方々と協力して、更に一層その水準を高めたいと念願いたしておる次第であります。（下略）」

この勧誘状にたいして関心を寄せ、入会を希望する人たちは約一〇〇名であった。

昭和二五（一九五〇）年四月二一日、発企人たちは久保田の作った原案を中心に会則を作成した。この準備のあと、第一回の会員総会及び大会の案内状が入会希望者に送られ、四月二二、二三日の両日に、早稲田大学政治経済学部の校舎において、本学会の第一回の会員総会および大会が開催されたのである。この集会は参加する者四二人であったが、その次第は学会の研究集会の将来を予知させる意味をもっていたから、少しく詳しく述べることにしたい。

第一日（二二日）は午前一〇時から会員総会があった。堀が開会の辞をのべ、高橋を座長にすえ、久保田が発企人を代表して挨拶と経過報告を行ったあとで、会則案が審議、決定されたのである。

その会則の全文は第二部の資料Ⅰのはじめにあるが、その中の特色を摘記しておこう。まず学会の目的として「経済学史、経済思想史の研究」とあるが、この規定について少し考える。経済学史は名称の上では明瞭であるけれども、経済学には歴史あり理論あり政策ありという訳だから、その内容は必ずしも明確ではない。経済学の背骨というべき理論に目を据えてその歴史を考えると経済学説史となるが、その理論の背後に人間や社会や歴史の観方をおいて考えようとすると、経済学説史の範囲を越える。この点を考慮して会則には、経済思想史の科目名を経済学史の下に添えたのであろう。そしてまた実際に、本学会の設立に加わった人たちは固有の意味での経済学史家だけでなく、経済生活を一つの中心とはするものの社会生活の思想の歴史をたずねる人たちもいたのである。

役員には幹事と常任幹事と代表幹事とがある。この名称は学会の慣行にしたがうなら、理事・常任理事・会長というところであるが、それらを採らずにこの名を用いたのは、発企人の終戦後の社会感覚に由来するといえよう。

第三に、事業として掲げるもののうち、全国大会のほかに地方部会の開催のことがある。全国大会は年一回を定めとするが、臨時大会を開くことをさまたげない。そして実際には、創設ののち一三年間は、毎年二回の大会を催していたのであった。地方部会は近くに住む会員が相会して討論をする機会が容易に得られるようにするために考え出されたのであって、そ

の期待はやがて実を結び、三つの地方部会が研究活動を盛んにしており、更に今年になって第四の東北部会が設けられることになったこと、後に述べる通りである。そのほかの事業、たとえば公開講演会・内外の経済学諸学会との連絡・機関誌の発行などは、学会の発展とともにそれぞれ実現の途についている。

このようにみてくると、中味については若干の変更のあったこと後に見る通りだが、この会則は本学会の向かうところを明察して定められたものであったということができる。なお、学会の会費は年二〇〇円であった。

会則の審議のあとに役員が選挙されたが、結局、発企人に一任せられ、発企人が作った原案は、昼食後の総会で承認された。役員の顔ぶれは資料Ⅱのはじめにある通りになって、総会では高橋発企人を顧問に推薦することが承認された。結局、本学会はオリジナル・メンバーを計一二三名として発足したのであった。

戦後の日本の学会の連合体は、昭和二五（一九五〇）年一月二二日に東京で日本経済学会連合の名で成立していたが、その時に本学会が連合のオリジナル・メンバーとして加入することが承認されていた。本学会は正式に成立する前に連合体の中で市民権を得ていたのであり、これは久保田会員の努力の賜物であった。

さて、研究報告会には、資料Ⅴでわかるように、隅谷三喜男、玉野井芳郎、堀発企人、杉山清、越村信三郎、白杉庄一郎が研究報告を行った。そのあと、会員懇親会が催され、その出席者は二三名であった。

会務を司る事務局は、代表幹事と関係のふかい学校に置くということで、最初は早稲田大学におかれることになった。

あらましこのような経過をたどって創られた本学会は、はじめの五ケ年間、すなわち昭和三〇（一九五五）年の秋の大会が終るあたりまでを第一の時期とし、これを創設の時と呼ぶことができよう。その間、大会および総会は、一年に春と秋との二度づつ催され、その場所は一方が関東地方であれば他方はそれより西の地という風に、会員の参加の便を考慮して選ばれた。即ち、早稲田大学・京都大学・東京大学・関西学院大学というようなのがその順序であった。（資料Ⅴを参照）

これらの大会における研究報告ははじめは全部自由論題をかかげて行われた。けれども第四回大会（昭和二六年一一月、関西学院大学）においてはじめて、共通論題が取り上げられ、主として当番校の会員の事前の努力によって、半日は共通論題をめぐっての研究が発表されることになり、それ以後は大会に共通論題をとり上げることが多くなったのである。（共通論題のテーマは資料Ⅵをみよ）

学会の性質上、古典図書にたいする会員の関心は深い。この関心に応えようとして、当番校の関係者は大会参加者のために図書展示を行うことがあった。日本における経済学の古典の豊かさは目ぼしい事実であるから、その展示会は内容ゆたかな眼福を会員に与えたのである。（資料Ⅸはその展示会の内容を明かにしている）

この時期に会員は目立って増えた。一二三名の会員をもって出発した本学会は最初の二年間にはさほどの会員の増加はなかったけれども（四二パーセント増）、三年目からは増勢をつよめ、第一期の終る昭和三一（一九五六）年の秋には三六四名になった。オリジナル・メンバーの三倍になったということである。

会員の増加は役員の充実となって現われなくてはならない。

会則第十二条によって二年の任期をもつ幹事は重任しうることになっていて、最初の改選期には前幹事は投票の手続きなしに重任した。しかし第二回目の改選期（昭和二九年五月）には会則通りに選挙すべきだという意見が強く、幹事は総会における会員の直接選挙によって決定することになり、その数も七名から二〇名とし、別に会計監査のための役員として、二名の監事を加えることにしたのである。横浜におけるこの改革によって役員の選出に一般会員の意向がよりよく反映され、実質的に青壮の年齢の会員が役員に送りこまれることになり、役員の充実が実現したとみることができる。（資料Ⅱをみよ）

会則に地方部会というものが規定されていた。ところが第五回（昭和二七年五月、慶応大学）の総会の席で、地方部会設置を求める動議が提出せられ、つぎの大会（同年一一月、神戸大学）の総会で、とりあえず関東部会と関西部会を開設することが正式に承認されたのである。

関東部会についていうと、内容からいって部会集会ともいうべき研究集会がそれまでに三度、東京で行われており、三〇名ないし四〇名の出席者を集めており、正式に承認された二七年には、一二月に久保田明光と松田寛との報告が行われた。それ以後、一年に三回ないし五回、世話役の持ちまわりで、集会がもたれた。けれども、昭和三一（一九五六）年以後になって、開催度数も出席者数もようやく減少する傾向になった。

他方、関西部会はどうかというと、ここでいう関西とは名古屋以西のことで、西は岡山と愛媛以外の四国地区をいうのであるが、関東部会と同じく、昭和二七（一九五二）年一二月に第一回の例会がもたれ、それ以後、毎年一月か二月に一度、そして六月、九月というように、合計三度、研究集会を開いた。事務局ははじめは相当長期にわたって関西学院大学が受けもっていた。その後は運営方法を定めて活動は定期的で旺盛なのであるが、その内容は第二期の叙述にゆずる。

以上のほか、西南部会の活動も昭和三一（一九五六）年一月から始まった。西南地区というのは本州では広島以西、四国では愛媛、そして九州の一円を指すが、最初の集会が九州大学でもたれて以来、毎年二回集会を催し、その後には独自の活動様式をもつに至るのである。

公開講演会の開催も会則に謳われているが、本学会がはじめて行なったのは、昭和二八（一九五三）年一〇月一〇日であり、それはマルクス生誕一三五年、死後七〇年を記念して、東京大学においてであった。ついで昭和三一（一九五六）年一一月の第一四回大会（同志社大学）において、J・S・ミルの生誕百五十年を記念して、杉原四郎・堀経夫・出口勇蔵・大道安次郎の四会員が、また昭和三三（一九五八）年一一月にはケネー経済表二百年を記念して、理論経済学会との共催の下に、渡辺建会員と柴田敬氏とが同志社大学の演壇に立った。

つぎに本学会の事業の一つ「わが邦における経済学古典文献調査及び研究」について述べたい。わが国における古典文献の豊かな存在は古典展示において明瞭であることは上に語ったけれども、所蔵機関のあいだに望ましい連携がないために、研究者が文献に近づく便宜が必らずしも十分に与えられていなかったから、不便をかこつ声も尠くなかった。研究者はまず

わが国に存在する古典の実態を知らなくてはならない。そのような訳で、第四回大会（昭和二六年一一月、関西学院大学）において、その実態調査を本学会の事業の一つとして取上げることが審議された。そして久保田・堀両幹事の原案にもとづいてこの事業に乗り出すことを、その時の総会において決議し委員会がつくられた。

この調査事業の詳細は資料Xにゆずって、要点を述べると、調査の範囲は一六世紀から限界革命（一八七〇年代）までに公刊された図書であって、それらの詳細な図書カードを作ることがここでこころざされたのである。第一次の調査としては、一五の大学をえらび、それぞれから一名または二名の研究分担者を出して行うことにした。そして必要な費用は文部省の科学研究費を受けて調達することが期せられ、代表幹事の名で申請の結果、昭和二七（一九五二）年から三ケ年の継続事業として認められ、初年度には三五万円が交付されることになったのである。

古典図書に関連するが、本学会は経済学史上の古典の復刻にも手を染めた。会員が入手困難な古典を具えていたいという熱望はきわめて自然であったから、第七回大会（昭和二八年五月、一橋大学）の直前に開かれた幹事会ではじめてこれが審議せられ、堀幹事を中心として委員会が作られたが、委員会はテキストを決定するために全会員にアンケート調査をし、その結果について審議の末、第十回大会（昭和二九年一一月、関西大学）において、最初にハル（Hull）版のW・ペティ著作集 *The Economic Writings of Sir William Petty*, 2 vols. を復刻することに決した。ただし本学会の刊行物とはせず、印刷所と堀幹事との契約にもとづいて成った書物を、関西学院大学研究室の斡旋によって会員が入手するという形をとった。このように、学会は研究上必須の図書をつくって会員の便宜に供することをも行ったのである。

最後に会則第三条第三項に明示されている、外国と本学会との連絡――今後これを国際交流と呼ぶことにしよう――について記しておきたい。研究者が外国から来て学会と交渉をもった最初は、昭和二八（一九五三）年二月、同志社大学においてであった。それは関西部会の例会の時で、アメリカのアーモスト・カレッジの長、チャールズ・W・コールが「フランス重商主義」と題する講演を行った。また日本から外国の学会に出かけた最初は、同じ年にローマで開かれた「国際学会連合

会議」に久保田会員が出席した事実であり、そののち二つの流れは増加しつづけるのであって、詳しくは資料のⅧとⅩⅣとを見ていただきたい。そして内容が複雑な国際交流についての考察は第四期の記述にゆずりたいと思う。

このようにして、経済学史学会は生まれ、会則にかかげた事業の大半に手を染め、かくしてわが国の経済学界における特異な学会として成長し、この時期の終りまでに大会を催すこと一三回、将来の発展の足場をきづいたのであった。

第三章　整備の時

（昭和三一年より三九年まで）

昭和三一（一九五六）年の『経済白書』には「もはや戦後ではない」と書かれていたが、それが良かれ悪しかれ新しい時代の到来を告げるスローガンとして迎えられたことは、人の知るところである。日本の国民経済が「高度成長」の時代に入ったことを、それは意味していた。そしてそれと偶然に一致した仕方で経済学史学会は第二の時期に入ると考えられる。

我国の大学教育は昭和二四（一九四九）年から新制大学の制度に入った。したがって新制大学の学部卒業生は昭和二八（一九五三）年にはじめて出、その人たちの中から新制大学院に入って研究生活を始めた人がやがて修士課程を終えて本学会で会員として活動をはじめるのは、大体、昭和三一（一九五六）年ごろと考えてよい。つまり第二期のはじめは新制大学卒業生を会員として迎える年だといってもよいのである。

この時期は整備の時と名づけることができる。整備というのは、学会の活動が軌道に乗って順調に滑り出したこと、しか

しその途上においてある程度の修正を遂げたことを意味する。

わが国の経済学関係の学会のうち、経済理論中心の学会はそれまでは近代経済学系統の「理論経済学会」であって、マルクス経済学の理論を主として研究する、純粋な意味での学会は存在しなかった。ところがこの時期になって、そういう学会創設の気運が熟して来たのである。ここでその経緯を詳しく語ることをしないが、ともかく、昭和三四（一九五九）年五月一〇日に、「経済理論学会」が東京で創られた。本学会の会員の中で、マルクス経済理論を研究することに深い関心を寄せていた人の中には、これを機として本学会を退会して新設学会に移った人たちもあったはずである。

しかしこれを会員数の変化に徴すると、つぎのことがわかる。（資料Ⅲを参照）――昭和三三（一九五八）年一一月に四五六名を数えた会員は、翌年の五月には四四五名に、つまり一一名だけ減少している。創立出来、増勢一途にすすんで来て一年といえども減少をみせなかった本学会にとっては、これは初めての現象であった。しかしながら、減少した時もその半年の後には再び上向き、会員数は四四九名から四八二名になっており、それ以後、昭和三七（一九六二）年になるまで、再び増加の姿勢をくずさずに進むのである。ここから考えると、経済理論学会の成立は、その時の会員のある意味での整理をもたらしたのであって、学会の発展をほとんど全く妨げるものでなかったといえよう。

そのすぐ後で、本学会の性格規定を一層明確にする会則の変更があった。それは、会則第二条と第四条とにおいて、創設の時には、学会の目的として「経済学史、経済思想史」が掲げられていたのが、昭和三五（一九六〇）年に、その語句のうち、「経済思想史」を「社会・経済思想史」と改めるべきことが、第二一回大会(日本大学)において決定されたことである。会員の中には、初めから、経済学史プロパーではなく、また経済思想史という一層ひろい内容を含む語だけによっても収まり切らぬ社会思想史の研究にはげむ人たちが相当いたし、その人たちは会則における研究目的から経済理論の実際的分離が明確になった時を機縁として、自分らの存在を会則の中で一層明瞭にしたいと思ったのが、その理由だと考えられる。

第二に、大会運営における変化が現われた。それは研究報告会での討論を活発にするために、報告者にたいする討論者を

予定し、その名をプログラムに明示しておくことである。この方式は第二二回大会（昭和三五年、名古屋大学）においてはじめて採用された。その時の報告者と予定討論者とを例示すると、「イギリスにおけるマルクス主義」と題する飯田鼎の報告にたいしては杉山忠平が、山崎怜の「ジョン・ミラーのフランス革命観」にたいしては小林昇が予定討論者として立つというが如くである。その後は資料Ⅴが示しているように、この方式がとりわけ共通論題にかんして採用される慣例になった。

わが国民経済は当時いわゆる高度成長の時代を迎えていたが、研究者の生活はむしろそれに反比例するような実情であった。交通費の高騰は所得の微増を上廻り、希望に反して大会に出席のかなわぬことも生じた。また会費の滞納が少し目立ちはじめることにもなった。この事実は昭和三五（一九六〇）年一一月の第二二回大会（名古屋大学）において指摘され、大会開催の度数を検討することが――後述の幹事選出の方法の改正とともに――審議せられはじめたが、その翌々年五月の第二五回大会（東京経済大学）において、実際上年に二回開かれつづけた大会および総会を、昭和三八（一九六三）年度からは年に一回開催することに決定された。また会費の滞納にたいしては、それまでに滞納五ケ年に及ぶ者は自然退会者とみなすという定めがあってそれに従って処理して来たのだが、この時に滞納期間を短くして二ケ年とし、同様の処置をとって会計整理の進捗をはかることになった。

大会開催の度数の減少は学会活動の減退とも取れる容易ならぬ変化ではあった。けれどもそれを埋め合わせるための考慮も加えられ、会員相互の交流をふかめる新しい事業も実施せられたのである。

まず部会活動の充実が図られた。第二六回大会（昭和三七年、香川大学）において、関東、関西および西南部会の三部会の活動を一層強化するために、一年に一度は部会の集会を部会大会と銘打って、集会の内容や時間をふやすべきことが決められた。それ以来三つの部会はそれぞれ固有の仕方でこの方針に従って、研究集会をもつ慣わしとなっている。ことに、関西部会では、主として京・阪・神の三市の大学の会員が委員を交代して年二回の例会と一回の部会大会を開くという慣行が

定着して来たのであった。

第二に、昭和三六（一九六一）年から事務局と会員との連絡を良くするために『経済学史学会ニューズ』が発行されはじめたことが挙げられる（資料XIの後方を参照）。第三に、第一章に語られた本学会の『十年史』が同じ年の五月に出版されて会員の読むところとなったことが、会員の認識の高まりにつながることになったであろう。しかし第四に、会員にとって重要な意味をもつ事件は機関誌の発行であった。それについては少しく詳しく述べなくてはならない。

本学会の機関誌については、すでに創立当時の会則の第三条第四項に明示されている。しかしその制作が審議されたのは第二六回大会（昭和三七年一一月、香川大学）においてであって、次年度から発行されるべきことが決定されたのである。この決定の具体的な内容を述べると、機関誌の名称は『経済学史学会年報』、年一回、大会開催の直前に発行ということであり、そのために毎年編集委員会を組織すること、その委員は大会開催に携わる会員と一致させず、その構成は幅ひろく作られるべきだというのであった。そして第一回の委員会に名を連ねたのは、林治一・河野健二・杉原四郎・重田晃一および田中真晴の五会員であった。

この委員会は翌年の一月に第一回編集会議を開いて編集方針を決定し、五月の幹事会で編集の原案の承認を得て、同じ年の一一月の第七回大会（武蔵大学）に間に合うように創刊号を作り上げた。それはB五版、横組、本文二段組の六二ページの瀟洒な学会機関誌であって、その後紙幅の増加はあったけれど、原型は踏襲されて現在に至っているのである。

創刊号の内容について記しておくべきことは次の通りである。創刊の辞は堀代表幹事の筆になり、本文の項目は学界展望・研究余滴・書評・文献抄録・学界ニューズ・部会通信および会員消息である。これらのうち、学界展望と文献抄録について少し説明をしておきたい。学界展望はある研究領域に限っての、最近の研究業績や事業を、国内を中心に紹介して会員に便宜を供しようとするものであって、その後にもつづいて取上げられた項目である。そして文献抄録は本機関誌の特色ある項目なのである。

もともと、最新の研究文献、ことに雑誌論文の抄録は一部の会員の強い要望であった。そこで編集委員会は外国の数種類の抄録誌を参考として抄録方法を協議したが、創刊号ではとりあえず一般の会員が接しにくい文献の三点についてその内容を抄録することになったのである。この方法は後に変わる。この変化については次の時期に述べるであろう。ところで、機関誌は会員に配布される。配布される以上、学会費の大幅の値上げは避けられなかった。すなわち、はじめ年二〇〇円であった会費は昭和三七（一九六二）年には六〇〇円になっていたが、『年報』が刊行されはじめた昭和三八（一九六三）年からは、一挙に一〇〇〇円に引上げられたのである。

『年報』の発刊は会員の多数が大なり小なりその制作に関与せずには不可能であったから、会員相互の交流のために貢献する事業となったと思われる。

第二期の新事業として機関誌の創刊を語った序でに、第一期からの事業の継続の状況を述べておこう。

まず公開講演会はこの時期には一回催された。それは第二八回大会（昭和三九年、大阪府立大学）に際して、本学会が主催し日本社会学会と土地制度史学会とが協賛して挙行せられ、森東吾氏と出口勇蔵とが講演した。古典調査の方は、前期についで第二期の申請が認められ、関係機関も一部増加して、同じ事務局の下につづけられているのが実情である。一九八〇年現在、調査カード約四三、〇〇〇枚が早稲田大学に保管されている。古典の復刻の方は、昭和三二（一九五七）年一一月にJ・スチュアートの『経済学原理』(Sir James Steuart: *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 2 vols. が、その翌々年の三四（一九五九）年には、アダム・スミスの『道徳感情論』Adam Smith: *The Theory of Moral Sentiments* が行われ、希望の会員に配布されたが、これらの図書の中には、外国の書籍市場でも好評のものがあったそうである。

この期における国際交流の主なものをしめしておくと、第一にミーク教授の来日、講演を挙げなくてはならない。昭和三二（一九五七）年の秋、水田会員と親交のあった Ronald L. Meek 教授は旅行の途次、日本を訪れて、第一六回大会が行

われた関西学院大学で「古典社会学の生起」と題する特別講演を行って、大会出席の会員に深い感銘を与えた。けれども、本学会は教授の滞在の費用を負担せず、それはその時に講演を依頼した、東西の数多くの大学から寄せられた謝礼によって賄われたのであった。

本学会の会員が外国の思想史関係の学会に派遣されたのは、昭和三五（一九六〇）年の「国際思想史学会」（ケンブリッジ）に出席した出口勇蔵が最初であり、その席には滞英中の遊部久蔵と行沢健三も出席した。出口は文部省在外研究員として渡欧するのと学会の日とが偶然重なったのであった。その他、本学会員は一九六一年には水田がシェフィールドへ、その翌年には宮崎義一がウィーンへ、六三年には越村信三郎がボストンへなどと、多くの国際学会に出席することになるが、詳しくは資料XIVを参照されたい。

事業の最後に、本学会がこの期に二度声明を発表したことを書いておく。第一回はいわゆる「警職法案」（昭和三三年）、二度目は「大学管理法案」（昭和三七年）が国会に審議されている時、それらが基本的人権を侵し、学問の自由を侵害する惧れのあることを認めて、学会の名において、反対の声明をしたのであった。

以上はこの期における事業のあらましであるが、本学会の組織面の重要な出来ごとを、最後にはなったが、述べておきたい。

幹事の選出の方法に改良の余地のあることが昭和三五（一九六〇）年に討議され、その翌年の秋の大会（和歌山大学）において、とりあえず次のように改められた。趣意は地方から幹事を迎えることであって、まず六地方区（北海道・東北、関東、東海・北陸、近畿、中国・四国、九州）から一名ずつ幹事をえらび、その後、全国を一選挙区とみて一四人の幹事を出し、会計二〇人にするというのである。しかしこの選挙方法にも不備があることが指摘されたので、次回（昭和三七年）には地方区を廃止したが、地方からの幹事が出ることを考慮して選挙することにした。ところがその結果についても問題があることが判明したので、次の昭和三九（一九六四）年の改選期には、すなわち、第三の時代のはじめには、更に新しい方法によって幹事をえらぶことになるのである。

第四章　充実の時

（昭和三九年から四七年まで）

整備の時と名づけた第二期における本学会の活動が会則の中で規定された諸方向にむかい、本学会が我国経済学関係の多くの学会の中にあって個性をもった存在となった時に、会員の数の上では一時停滞したことは事実である。昭和三五（一九六〇）年の秋に五〇〇人を越えていた会員の数が、『年報』が発行され出してから少しずつ減少の傾向をみせるのである。

さて、この時期に最初に記すべきは、幹事選出の新方式である。

整備の時の終りに、幹事の選出の改良にむかって努力が重ねられていたことが語られた。そしてこの期のはじめ、つまり昭和三九（一九六四）年に、今一度の改良が加えられたのである。それは第二八回大会（大阪府立大学）の席上であって、幹事の数を一挙に三〇人に増員すること、そして選挙方法は会員が幹事候補者を一五名連記投票すること、投票にあたって地方からも幹事が適度に出ることを考慮して行うこと、そして決定は得票数の多い者から順番に三〇名を採って定めることとなった。この新方式はその時以来今日までずっと守られている。

この充実の時に行われた活動の主なものを次に列記する。

まず『年報』についていうと、この機関誌の中で異彩を放っているものが文献抄録であることは先きに述べたが、抄録方法がこの期に定着したと見られる。『年報』第三号（一九六五年）以来の方法、すなわち、諸外国の専門雑誌を博覧して目ぼしい論文をえらび、それらの内容を二〇〇字の短文にまとめることを会員に依頼し、集まった抄録の原稿を適当に排列し

掲載するという方法がこれである。このためには、専門雑誌の閲覧、論文の選定、抄録者の決定と依頼、原稿の整理など、まことに煩わしい仕事が必要となるが、水田会員の努力で、第三号には七〇種の雑誌から関係文献の主なものを抄録することに成功したのであった。

昭和四二（一九六七）年に『年報』の出版費の一部を文部省の研究成果刊行補助金で賄いたいと考えて申請をおこない、それが認められて補助金額一〇万円を得てからは、この項目の掲載が必須のものとなって来、ますます充実することが望まれた。そこで抄録作成者の数を増し、上記の仕事の分担が図られるようになったが、そのための一助となったのが、昭和四五（一九七〇）年に初めて作られた、会員の研究テーマ記載の大型名簿であった。そこでたとえば関係雑誌の数にしても、はじめの七〇種から八七種（一九六九年）、一一五種（一九七一年）、そして一七〇種（一九七二年）というように、充実の実績を挙げたのであった。この仕事は研究サービスであるが、多数の会員の協力によって成るものだから、学会機関誌にふさわしいものと言えるだろう。

学会費は昭和四五（一九七〇）年度から、年一、五〇〇円に上げられることになった。

公開講演会の開催も一度あった。第三一回大会（昭和四二年、早稲田大学）には、「マルクス『資本論』刊行一〇〇年記念」として、佐藤金三郎・田中真晴および内田義彦が日頃の蘊蓄を傾けたのであった。（資料Ⅶを参照されたい）

この公開講演会に並行して、『資本論』刊行一〇〇年を記念する論文集を本学会として出版することも決議され、その同じ年に一七名にのぼる会員の分担執筆の下に『資本論の成立』（岩波書店）が、公刊された。

ここで本学会と日本学術会議との関係について述べておきたい。学術会議が昭和二四年に創られて以来、本学会員でその会員になる者はいた。第一期の高橋誠一郎顧問や久保田明光・岸本誠二郎の如くであるが、その人々は個人として立候補したのであって、学会の推挙を得たのではなかった。けれども第四期（昭和三三～三五年）あたりから学術会議にたいする会

員の認識が高まって来たので、第七期の選挙（昭和四〇年秋）からは、候補者を決めるに当たって、学会の内部事情を反映しうるように取計らい、その候補者を学会として正式に推薦することにした。このようにして、その期は河野健二が当選したのである。学術会議をその初めの時期よりも重要視し出したのは、学会の内外での活動のためには、学術会議やそれと関連のある経済学研究連絡委員会の中で発言権を確保しておくことが有利であることが理解されるようになって来たからである。この種の推薦は、そののち改選の度ごとに行われている。

次にこの期における国際交流について略記する。（詳しくは資料Ⅷおよび XIVを参照）

外国の研究者で本学会の大会なり、本学会の協賛なりで講演をした人たちは、昭和四三（一九六八）年のルフェーヴル（H. Lefebvre）以下三人が数えられ、反対に本学会員で外国の学会に派遣された人たちは、昭和四二（一九六七）年にセント・アンドルーズでの「第二回啓蒙思想国際会議」に出席した、平田清明会員をはじめ、浜林正夫・水田洋・山口和男・津田内匠・飯田鼎・溝川喜一の諸会員であった。また木村正身・杉山忠平・水田洋・松浦保の諸会員は出席した外国の学会において研究報告を行っている。このような状況から国際交流が年とともに密度を加えていることがわかるのである。（資料XIVを参照）

昭和四三（一九六八）年の終りからわが国の諸大学に起きたいわゆる学園紛争は、広範囲の高等教育機関と学界の一部に大なり小なりの波紋を投げた。その波紋の強さと長さは、場所により機関によって千差万別であったといわなくてはならず、そもそも紛争の本質は何であったのかという初歩的な疑問にたいする解答は現在のところまだ出されていないといえよう。しかしともかくも、紛争の現象諸形態から研究者が受け取ったものは、教育の阻害であり研究生活の破壊であった。

本学会は直接紛争に捲きこまれたのではないが、一度余波を被った。昭和四四（一九六九）年の春、国会で大学運営臨時措置法案が上程されようとした時、本学会は同法が大学の自由を侵す惧れがあるとして、反対声明を出していた。ところが、同年の一一月、横浜市磯子会館における第三三回大会の研究発表会の席に数名の青年（その中には本学会員もいた）が、上

の声明だけでは積極性が欠けると主張し、会場を大学法案の討論の場に代えよと要求、一時演壇を占拠した。しかし会場内の学会員の説得によって報告会の予定を狂わせるだけで、大事に至ることなく大会は無事に終了した。そしてそれ以後は学会は紛争から直接の影響を受けるところはなかったのであった。

この期において三度の声明を出した。まず昭和三八（一九六三）年に「アダム・スミス講義ノートについての訴え」であり、第二にはその翌年の「原子力潜水艦についての声明」であり、第三には上記の大学法案に関する声明である。

最後に学会の事務処理の変化について述べる。学会活動が盛んになるにつれ、その事務量もふえ、事務局の会員の身心の負担もまた尋常ではない。一部の学会のように、事務員をおくだけの経済的余裕は全くない。ところが昭和四六（一九七一）年の末に東京に日本学会事務センターというものが設けられたのであって、そこに事務の一部を依頼することになり、翌年から、会費の一部を割くことによって、会費の集納、『年報』その他の通知の発送などの雑務から事務局が解放されることができるようになった。社会科学の多くの学会の中で、この事務センターを利用したのは本学会が最初であった。

第五章　新装の時

（昭和四七年から五五年まで）

代表幹事に小林昇会員を迎えた昭和四七（一九七二）年から、代表幹事は一期で交替すると申し合せることによって、本学会の活動を一層ダイナミックなものにすることが期待された。以後、二年ごとに水田・杉原・杉山会員へと代表幹事はうつってゆく。新装の時と形容する所以である。

この時期の特筆すべき事件の一つは社会思想史学会の成立である。会則第二条に社会思想史を研究目的として明記したことは先きに述べた。その後、大会の研究報告会にしても、社会思想史の研究をまとめて、場合によっては報告会場を分けて、経済学史の研究と並んで発表されることもあった。しかし経済学関係以外の思想史研究者との議が熟して、社会思想史学会が設立されたのは、昭和五一（一九七六）年であった。

新学会の設立は、当然に、本学会の会員の一部を移らせることにはなった。さきに見たように、経済理論学会の設立ののち会員の数は一時わずかに減少したが、そののちは再び増加の一途を辿っていて、昭和四九（一九七四）年には五五三人、社会思想史学会の設立の年には六三二人という有様であった。そしてその翌年に六一四人という微々たる減少があったものの、その後は再び（あるいは三たびというべきか）、増加する。すなわち、新学会の設立は社会科学研究の分化を客観化したものだが、研究主体はその分化の上に自己をも分化させて、しかも人格の統一を計ったのだ、すなわち両方の学会の会員となった人も多かったと見ることができるだろう。本学会は二度の分化の時に出会ったが、しかもそれを契機として自己を純化し発展的に自己同一を保持しているといえる。その結果、本年五月の会員の数は実に六七九名の多きに達しているのである。

会費は新装の時には鰻上りであった。即ち昭和四八（一九七三）年に二、五〇〇円、五〇（一九七五）年に三、〇〇〇円、そして五五（一九八〇）年には五、〇〇〇円になり、学生会員にはそれぞれ、若干の減額が行われたのであった。

本学会に顧問の制度があり、創設の時に高橋誠一郎が推挙されたことを語っただけで、その後の追加を語る機会がなかったけれど、そののち徐々に増加し、現在では、高橋のほか、坂本弥三郎・久留間鮫造・堀経夫・岸本誠二郎・出口勇蔵・高木暢哉の七名になっている。

ここでこの時期における大会運営の変化について一言する。大会の研究報告会の組織は当番校のおよびそれに近い会員が事前に協議して行われ、常任幹事は個人としてはともかく役員としてそれに深く参画する慣わしはなかった。しかし昭和四六（一九七一）年の第三六回（松山商科大学）からは、常任幹事がプログラム編成に積極的に参与することになり、それ以後、

これが本学会の慣行になっている。また幹事会の前後に常任幹事会を開くことも、このあたりから行われている。

部会活動について述べるべきことは、西南部会のそれについてである。西南部会では本学会員のみでなく、他部門の経済学研究者をも交えて研究会が開催されてきたが、この時期には、自らが編者となって、論文集を二種出版するに至っている。独特の活動がこの成果を生んだのである。また以前から討議されていた東北部会も昭和五五（一九八〇）年六月に創設されたことを歓迎の意をこめてここに伝えたい。

この時期に催された公開講演会は二度であった。昭和五一（一九七六）年の『国富論』出版二〇〇年記念のそれが第一、第四〇回大会（九州大学）においてのものである。その二は昭和五四（一九七九）年九月に河上肇生誕一〇〇年を記念して経済理論学会との共催の下に同志社大学で行われたものである。（詳しくは資料のⅦを参照）

国際交流の事実について述べると、昭和四八（一九七三）年の杉原会員のトロント出張をはじめとして、合わせて五人の会員がほとんど毎年、国際学会に参加しているほか、外国の学会で研究発表を行っている者も多くなり――必ずしも本学会からの派遣者ばかりではない――、一九七〇年から数えると合計一二回に及んでいる。（資料XIVに詳しい）

ここで本学会の国際交流といって来たものの実態について少しばかり考察を加えておきたいと思う。

まず、本学会はいくつかの国際学会と関係してきたが、国際会議の運営に参加することはなかった。すなわち、労働運動史家国際会議に対して、本学会は昭和四七（一九七二）年から五四（一九七九年）まで、日本に割り当てられた分担金の半額を支払ったけれども、残りの半額をはらうことを期待された社会政策学会はこれに応じなかった。また国際一八世紀学会には、一九七一年にナンシーにおける第三回大会で、本学会の団体加盟がみとめられ、会費を払うようになったが、日本から国際学会に執行委員を出したのは、加盟団体が経済学史学会から日本一八世紀学会へ、交替したのちであった。

学会として加盟しているわけでなくても、イギリスの経済思想史会議（ＨＥＴ）・経済史学会、アメリカの経済学史学会（ＨＥＳ）とのあいだには、実質的な交流が行われてきたし、国際経済史協会に対しては、学術会議による国費加盟が実現

するまで、経済学史学会も、経済学研連委経済史分科会の一員として、分担金を支払った。この協会が主催（正確にはソヴェート歴史学者国内委員会経済史部会との共催）した第五回国際経済史会議（一九七〇年、レニングラード）には、本学会は杉山忠平会員を報告者として派遣したのである。ただし、当初の学術会議からの派遣が不可能になったので、本学会が旅費のごく一部分を負担したにとどまった。

ところで経済学史学会が対応すべき国際学会は、国際経済学会ではなくて、国際歴史学会なのではないかという、疑問が早くから出されていた。この問題については、やがて国際的に経済学史・社会思想史関係の学会活動がさかんになり、国内的に経済学研究連絡委員会が分科組織となって、本学会が理論分科会ではなく歴史分科会（経済史学研究連絡委員会）に属するようになると、国際歴史学会に対応することになったわけではないが、歴史の優位の方向で解決されて、現在に至っている。

交流のうち、国外からの流入については、文献の流入というきわめて一般的な形態はのぞくとして、研究者の招へいがあるが、それは前述のように、おそらく、昭和三二（一九五七）年秋に来日したミーク夫妻にはじまる。しかし、そのときの受入れ体制は必ずしも十分ではなかったが、滞在中は重労働に不満をいっていたにもかかわらず、ミークはわれわれの歓迎の気持を理解し、帰国後は、日本からの研究者のために、さまざまな便宜をはかってくれた。そして、昭和五二（一九七七）年に、前回の埋合せの意味もふくめて、日本学術振興会の人物交流計画によって招へいした時には、ミークがおどろいたほどの、日本人の語学力の充実によって、十分に交流の成果をあげることができたのである。そのことは、学会が国際交流の面でも二〇年の間に大きく進展したことを示すものであった。

今ひとつ、現在まで四三回にわたって催された大会における研究報告会を通覧しての一考察を加えておこう。いま共通論題を通算してみると、合計二四回組まれたことになり、そのテーマを整理すると、次の通りである。――古典学派が一〇回、マルクス経済学と方法論とがそれぞれ三回、近代経済学が二回、そしてケネー、プルードン、日本の経済学、恐慌論、経済

発展と資本蓄積の理論、人口論がそれぞれ一回、共通論題として取り上げられ、歴史学派は一度も問題とされなかった。更に一〇回の古典学派の内訳をしめすと、古典学派一般が三回、この学派に属する学者個人を中心に取り上げた場合が七度あった。即ちペティが一度、スミスが三度、マルサス・リカードウ関係が三度という有様である。

つぎに『年報』についての省察として、「展望」欄でえらばれたテーマについて注目すると、次の結果が得られる。テーマの総計は三四であって、そのうち、社会主義関係が一〇、古典学派関係が六、近代経済学史関係が四、日本経済思想が二であって、それ以外はそれぞれ一度である。こういう結果もまた、本学会がこれまでにもった関心のありかを知る一助ともなるであろう。

以上、三〇年の学会史をあらまし辿って来て言えること、また言いたいことを書きつける。経済学史学会はこれまで四つの時期を経過し、わずかの屈折を示めしながらも発展をやめず、経済学史の専門学会として個性的な存在であることを、内外に明示して来た。余りにも順調な発展はあるいは内に問題を含むに至ったかも知れないが、将来もますます経済学の歴史に関する研究団体としてその価値を増し、国際的にもその地位を確保することを、切に望みたいのである。

附記　以上の敍述のうち国際交流については、水田洋会員の執筆協力を得た。ただしその組入れは出口の責任において行われた。

第二部　資料

I　会　則

1　学会創立時における会則

経済学史学会会則

（名　称）

第一条　本会は経済学史学会と称する

（目　的）

第二条　本会の目的は左の通りである

一　経済学史、経済思想史の研究

二　内外の学界との交流

（事　業）

第三条　本会は前条の目的を達するために左の事業を行う

一　研究報告会の開催

イ　毎年一回適当の地及び時に全国大会を開く

必要に応じて臨時の大会を開くことがある

ロ　別に定めるところによって地方部会を開くことができる

二　公開講演会の開催

三　内外の経済諸学会との連絡

四　機関誌の発行

五　その他本会の目的を達するために必要な事業

（会　員）

第四条　本会は経済学史、経済思想史の研究者をもって組織する

第五条　本会に入会しようとする者は会員二名の紹介により常任幹事に申込み総会の承認を受けなければならない

第六条　会員は会費として毎年四月（五月以後に入会した者は入会の時）に弐百円を納めなければならない

第七条　会員は機関誌の実費配布をうける

第八条　会員は書面により常任幹事に通告すれば退会することができる

（顧　問）

第九条　会員であって多年経済学史学の発達に貢献のあったものは幹事会の推薦により総会の承認を経て顧問とすることができる

（役　員）

第十条　会務を処理するために幹事若干名を置く

第十一条　幹事は会員総会において会員中より選挙する

第十二条　幹事の任期は二ケ年とする。但重任を妨げない

第十三条　本会の常務を処理するために幹事中より常任幹事若干名を互選する

第十四条　常任幹事の中一名を本会の代表者とし代表幹事と称する

（総　会）

第十五条　本会は毎年一回会員総会を開く。幹事会が必要と認める時又は会員の三分の二以上の請求がある時は臨時総会を開く

第十六条　幹事会は総会の議事、会場及時期を定め予めこれを会

員に通知する

第十七条　常任幹事は総会において会務及び会計の報告をする

第十八条　総会における議長はその都度会員中より選挙する

第十九条　総会における決定は本会則において特に定めてある場合のほか出席会員の過半数による。可否同数の場合は議長がこれを決定する

（会則の変更及び本会の解散）

第二十条　本会則の変更又は本会の解散は幹事の過半数又は会員十五名以上の提案により総会出席会員三分の二以上の賛成を得なければならない

（会計期間）

第二十一条　本会の会計期間は毎年四月一日より翌年三月三十一日までとする

（附　則）

第二十二条　幹事の中二名を日本経済学会連合の評議員とし会員総会においてこれを決定する。但緊急已むを得ない場合はこの限りではない

第二十三条　本会の事務所は当分の間　内に置く

2　現在の会則（昭和五五年三月現在）

経済学史学会会則

名　称

第一条　本会は経済学史学会*と称する。

目　的

第二条　本会の目的は次の通りである。

1　経済学史、社会・経済思想史の研究

2　内外の学界との交流

事　業

第三条　本会は前条の目的を達するために次の事業を行う。

1　研究報告会の開催

イ　毎年一回適当の地および時に全国大会を開く。必要に応じて臨時の大会を開くことができる。

ロ　別に定めるところによって地方部会を開くことができる。

2　公開講演会の開催

3　内外の経済諸学会との連絡

4　機関誌の発行

5　その他本会の目的を達するために必要な事業

会　員

第四条　本会は経済学史、社会・経済思想史の研究者をもって組織する。

第五条　本会に入会しようとする者は会員二名の紹介により代表幹事に申込み、幹事会の承認を受けなければならない。

第六条　会員は年会費五〇〇〇円（院生であって常勤職に就いていない会員は三〇〇〇円）を納めなければならない。

第七条　会員は機関誌の配布をうける。

第八条　会員は書面により代表幹事に通告すれば退会することができる。会費を二年間滞納したものは退会とみなす。ただし滞納分を納入することにより会員資格を回復することができる。

顧　問

第九条　会員であって多年経済学史学の発達に貢献のあったものは、幹事会の推薦により総会の承認を経て顧問とすることができる。

役　員

第一〇条　会務を処理するために幹事若干名を置く。

第一一条　幹事は会員総会において会員中より選挙する。

第一二条　幹事の任期は二カ年とする。ただし重任を妨げない。

第一三条　本会の常務を処理するために幹事中より常任幹事若干名を互選する。

第一四条　常任幹事のうち一名を本会の代表者として代表幹事と称する。

第一五条　本会に監事二名を置く。
監事の選出については第一一条を準用する。
監事の任期については第一二条を準用する。

総　会

第一六条　本会は毎年一回会員総会を開く。幹会事が必要と認める時または会員の三分の二以上の請求がある時は臨時総会を開く。

第一七条　幹事は総会の議事、会場および時期を定め、あらかじめこれを会員に通知する。

第一八条　常任幹事は総会において、会務および会計の報告をする。

第一九条　総会における議長はその都度会員中より選挙する。

第二〇条　総会における決定は本会則において特に定めてある場合のほか出席会員の過半数による。可否同数の場合は議長がこれを決定する。

会則の変更および本会の解散

第二一条　本会則の変更または本会の解散は幹事の過半数または会員一五名以上の提案により、総会出席会員三分の二以上の賛成を得なければならない。

会計期間

第二二条　本会の会計期間は毎年四月一日より翌年三月三一日までとする。

附　則

第二三条　幹事のうち二名を日本経済学会連合の評議員とし会員総会においてこれを決定する。ただし緊急やむを得ない場合はこの限りではない。

第二四条　本会の事務局は一九七九年四月から一九八一年三月まで静岡大学人文学部経済学科（重田研究室）内に置く。

＊　本学会の正式英文名は、昭和五二（一九七七）年一一月以降 The Society for the History of Economic Thought である。

Ⅱ 役員および事務局

1 昭和二五年四月—二七年五月（第一回—第五回大会）

代表幹事 久保田明光（事務局 早稲田大、事務責任者 山川義雄・松田 寛）

幹事・常任幹事（*は常任幹事を示す ABC順、以下同じ）

堀* 経夫 岸本誠二郎 久*保田明光 舞*出長五郎 野村兼太郎 大塚金之助 坂本弥三郎（以上七名）

顧 問 高橋誠一郎（昭和二五年四月、第一回大会）〔顧問については選出の時期のみ記す。〕

日本経済学会連合評議員 堀 経夫 大塚金之助

経済学研究連絡委員会委員 大塚金之助

2 昭和二七年五月—二九年五月（第五回—第九回大会）

代表幹事 久保田明光（事務局、事務責任者は右に同じ）

幹事・常任幹事

堀* 経夫 岸本誠二郎 久*保田明光 舞出長五郎 野村兼太郎 大河内一男、大塚金之助 坂本弥三郎（以上八名）

3 昭和二九年五月—三一年五月（第九回—第一三回大会）

代表幹事 久保田光明（事務局、事務責任者は右に同じ）

幹事・常任幹事

遊*部久蔵 大道安次郎 出口勇蔵 平瀬巳之吉 堀* 経夫 岸*本誠二郎 小林 昇 越*村信三郎 久*保田明光 久留間鮫造 舞出長五郎 水田 洋 野村兼太郎 大河内一男 大*塚金之助 坂本弥三郎 白杉庄一郎 高島善哉 内田義彦 横*山正彦（以上二〇名）

監 事 徳増栄太郎 上田辰之助

〔昭和二九年五月第九回大会より総会での直接選挙となり、幹事二〇名、常任幹事七名、監事二名となる〕

日本経済学会連合評議員 大塚金之助 堀 経夫

経済学研究連絡委員会委員 大塚金之助

4 昭和三一年五月—三三年五月（第一三回—第一七回大会）

代表幹事 久保田明光（事務局、事務責任者は右に同じ）

幹事・常任幹事

遊*部久蔵 大道安次郎 出口勇蔵 平瀬巳之吉 堀* 経夫 石*原忠男（三一年一一月—三三年五月、常任幹事）岸*本誠二郎 小林 昇 越村信三郎 久*保田明光 久留間鮫造 舞出長五郎 水田 洋 野村兼太郎 大*河内一男（三一年五月—同年一一月、常任幹事）大*塚金之助 白杉庄一郎 高島善哉 内田義彦 横*山正彦

監 事 徳増栄太郎 上田辰之助（三一年五月—三一年一一月）関未代策（三一年一一月—三三年五月）

日本経済学会連合評議員　久保田明光　越村信三郎
経済学研究連絡委員会委員　大塚金之助

5　昭和三三年五月―三五年五月（第一七回―第二一回大会）

代表幹事　堀　経夫（事務局　関西学院大、事務責任者　久保芳和）

幹事・常任幹事
日本経済学会連合評議員　久保田明光　越村信三郎
経済学研究連絡委員会委員　大塚金之助
遊*部久蔵　大道安次郎　出口勇蔵　平瀬巳之吉　堀*経夫　石原忠男　岸*本誠二郎　小*林　昇　越*村信三郎　久*保田明光　舞出長五郎　水田　洋　長洲一二　大河内一男　大塚金之助　白杉庄一郎　高木暢哉　高島善哉　内田義彦　横*山正彦

監　事　関未代策　徳増栄太郎

6　昭和三五年五月―三七年五月（第二一回―第二五回大会）

代表幹事　堀　経夫（事務局は右に同じ。事務責任者　久保芳和　田中敏弘）

幹事・常任幹事
遊*部久蔵　大道安次郎　。出*口勇蔵　。狭田善義　平瀬巳之吉　堀*　経夫　岸*本誠二郎　小*林　昇　越*村信三郎　久*保田明光　。水田洋　長洲一二　大塚金之助　白杉庄一郎　。末永茂喜　杉原四郎　。高木暢哉　内田義彦　。山川義雄　横*山正彦

監　事　関未代策　徳増栄太郎

顧　問　坂本弥三郎　舞出長五郎　久留間鮫造（昭和三六年五月、第二三回大会）

〔幹事中の。印は地方区選出六名を示す。地方区は、北海道・東北地区、関東地区、東海・北陸地区、近畿地区、中国・四国地区、九州地区〕

7　昭和三七年五月―三九年一一月（第二五回―第二八回大会）

代表幹事　堀　経夫（事務局は右に同じ。事務責任者　田中敏弘）

幹事・常任幹事
遊*部久蔵　出*口勇蔵　平瀬巳之吉　平田清明　堀*　経夫　河野健二　木村正身　岸*本誠二郎　小*林　昇　越村信三郎　久保芳和　久保田明光　水*田　洋　長洲一二　大塚金之助　末永茂喜　杉原四郎　高木暢哉　内*田義彦　渡辺輝雄　横山正彦（以上二一名）

監　事　関未代策　山川義雄

〔昭和三七年、第二六回大会まで、大会は年二回。昭和三八年、第二七回大会から年一回一一月に開催、昭和三八年五月から同年一一月まで役員任期延長さる。〕

日本経済学会連合評議員、久保田明光　岸本誠二郎
経済学研究連絡委員会委員　岸本誠二郎

8　昭和三九年一一月―四一年一一月（第二八回―第三〇回大会）

代表幹事　堀　経夫（事務局、事務責任者は右に同じ）

幹事・常任幹事

相見志郎　遊部久蔵　出口勇蔵*　浜林正夫　狭田喜義　羽鳥卓也　林　治一　平瀬巳之吉*　平田清明　堀　経夫*　河野健二　木村正身　岸本誠二郎*　小林　昇*　越村信三郎　久保芳和　久保田明光　松川七郎　真実一男　水田*　洋　長洲一二　大野信三　末永茂喜　杉原四郎*　杉山忠平　高木暢哉*　内田義彦*　渡辺輝雄　山川義雄　横山正彦（以上三〇名）

監　事　石原忠男　関未代策

顧　問　大塚金之助（昭和三九年一一月、第二八回大会）

〔昭和三九年一一月、第二八回大会より、幹事三〇名となる。一五名連記投票による。監事は単記投票。〕

日本経済学会連合評議員　久保田明光　岸本誠二郎

経済学研究連絡委員会委員　岸本誠二郎

9　昭和四一年一一月―四三年一一月（第三〇回―第三二回大会）

代表幹事　堀　経夫（事務局、事務責任者は右に同じ）

幹事・常任幹事

相見志郎　遊部久蔵　出口勇蔵*　浜林正夫　狭田喜義　羽鳥卓也　林　治一　平井俊彦　平田清明　堀　経夫*　河野健二　木村正身　岸本誠二郎*　小林　昇*　越村信三郎　久保芳和　久保田明光　松川七郎　真実一男　水田*　洋　長洲一二　末永茂喜　杉原四郎*　杉山忠平　高木暢哉*　田中敏弘　内田義彦*　渡辺輝雄　山川義雄　横山正彦

監　事　石原忠男　関未代策

日本経済学会連合評議員　久保田明光　岸本誠二郎

経済史学研究連絡委員会委員　岸本誠二郎

10　昭和四三年一一月―四五年一一月（第三二回―第三四回大会）

代表幹事　出口勇蔵（事務局　京都大、事務責任者　平井俊彦）

幹事・常任幹事

相見志郎　遊部久蔵　出口勇蔵*　浜林正夫　狭田喜義　羽鳥卓也　林　治一　平井俊彦　平瀬巳之吉　平田清明*　堀　経夫　河野健二*　岸本誠二郎*　小林*　昇　越村信三郎　久保芳和　久保田明光　松川七郎　真実一男　水田*　洋　大野精三郎　末永茂喜　杉原四郎*　杉山忠平　高木暢哉*　田中真晴　田中敏弘　内田義彦*　渡辺輝雄　山川義雄

監　事　石原忠男　関未代策

顧　問　堀　経夫　久保田明光（昭和四四年一一月、第三三回大会）

日本経済学会連合評議員　久保田明光　小林　昇

経済史学研究連絡委員会委員　小林　昇

11　昭和四五年一一月―四七年一一月（第三四回―第三六回大会）

代表幹事　出口勇蔵（事務局は右に同じ。事務責任者　平井俊彦　田中真晴）

幹事・常任幹事

相見志郎　遊部久蔵*　出口勇蔵*　浜林正夫　狭田喜義　羽鳥卓也　林　治一　平井俊彦*　平瀬巳之吉　平田清明　河野健二*　岸本誠二郎　小林*　昇　越村信三郎　久保芳和　松川七郎　真実一男　宮崎犀一　水田*　洋　大野精三郎　佐藤金三郎　末永茂喜　杉原四郎*　杉山忠平　高木幸二郎　高木暢哉*　玉野井芳郎　田中真晴*　内田義彦　渡辺輝雄　山川義雄（以上三一名）

監　事　石原忠男　関未代策

日本経済学会連合評議員　小林　昇　遊部久蔵

経済史学研究連絡委員会委員　小林　昇

12　昭和四七年一一月―四九年一一月（第三六回―第三八回大会）

代表幹事　小林　昇（事務局　立教大、事務責任者　立入広太郎）

幹事・常任幹事

相見志郎　荒牧正憲　遊部久蔵*　出口勇蔵　浜林正夫　狭田喜義　羽鳥卓也　平井俊彦　平瀬巳之吉　平田清明　菱山　泉　入江　奨　河野健二*　小林*　昇　久保芳和　真実一男　水田*　洋　岡田純一　良知　力　佐藤金三郎　杉原四郎*　杉山忠平　高木暢哉*　玉野井芳郎　田中真晴*　田中敏弘　都築忠七　内田義彦*　山崎　怜（以上二九名）

監　事　林　治一　石原　忠男

顧　問　岸本誠二郎（昭和四八年一一月、第三七回大会）

日本経済学会連合評議員　小林　昇　遊部久蔵

経済史学研究連絡委員会委員　浜林正夫

13　昭和四九年一一月―五一年一一月（第三八回―第四〇回大会）

代表幹事　水田　洋（事務局　名古屋大）

幹事・常任幹事

相見志郎　荒牧正憲　遊部久蔵*　出口勇蔵　浜林正夫*　狭田喜義　服部文男　羽鳥卓也　平井俊彦　平瀬巳之吉　平田清明　菱山　泉　入江　奨　河野健二　木村正身　小林*　昇　久保芳和　真実一男　水田*　洋　岡田純一　佐藤金三郎　杉原四郎*　杉山忠平　高木暢哉*　玉野井芳郎　田中真晴*　田中敏弘　内田義彦　山崎　怜　横山正彦

監　事　林　治一　石原忠男

日本経済学会連合評議員　小林　昇　遊部久蔵

経済史学研究連絡委員会委員　浜林正夫

14　昭和五一年一一月―五三年一一月（第四〇回―第四二回大会）

代表幹事　杉原四郎（事務局　甲南大、事務責任者　田中真晴）

幹事・常任幹事
相見志郎　荒*牧正憲　遊部久蔵（―昭和五二年一二月）出口勇蔵　浜*林正夫　狭田喜義　羽*鳥卓也　早坂　忠　平井俊彦　平田清明　菱山　泉　入江　奨　河野健二　小林　昇　真実一男　宮崎犀一　水田　洋　永井義雄　中村広治　岡*田純一　杉*原四郎　杉*山忠平　高木暢哉　玉野井芳郎　田村秀夫　田*中真晴　田中敏弘　内田義彦　和田重司　吉沢芳樹

監　事　林　治一　石原忠男

日本経済学会連合評議員　小林　昇　遊部久蔵（昭和五二年一二月まで）

経済史学研究連絡委員会委員　岡田純一　浜林正夫

15　昭和五三年一一月―五六年三月（第四二回―第四四回大会）

代表幹事　杉山忠平（事務局　静岡大、事務責任者　重田澄男）

幹事・常任幹事
荒牧正憲　浜*林正夫　羽*鳥卓也　早坂　忠　平井俊彦　平田清明　菱山　泉　飯田　鼎　入江　奨　河野健二　小林　昇　久保芳和　松尾　博　真*実一男　宮崎犀一　水田　洋　中村広治　岡田純一　佐藤金三郎　杉原四郎　杉*山忠平　玉野井芳郎　田*村秀夫　田*中真晴　田中敏弘　津*田内匠　内田義彦　山崎　怜　横山正彦　吉*沢芳樹

監　事　溝川喜一　立入広太郎

顧　問　出口勇蔵　高木暢哉（昭和五三年一一月、第四二回大会）

〔昭和五五年三月現在、顧問は、高橋誠一郎　坂本弥三郎　久留間鮫造　堀　経夫　岸本誠二郎　出口勇蔵　高木暢哉の七名である〕

〔役員の任期は会計年度に合せるため、今期に限り、昭和五六年三月まで延期された。〕

日本経済学会連合評議員　岡田純一（昭和五四年一一月まで）
津田内匠（昭和五四年一一月から）田村秀夫

経済史学研究連絡委員会委員　浜林正夫　田村秀夫

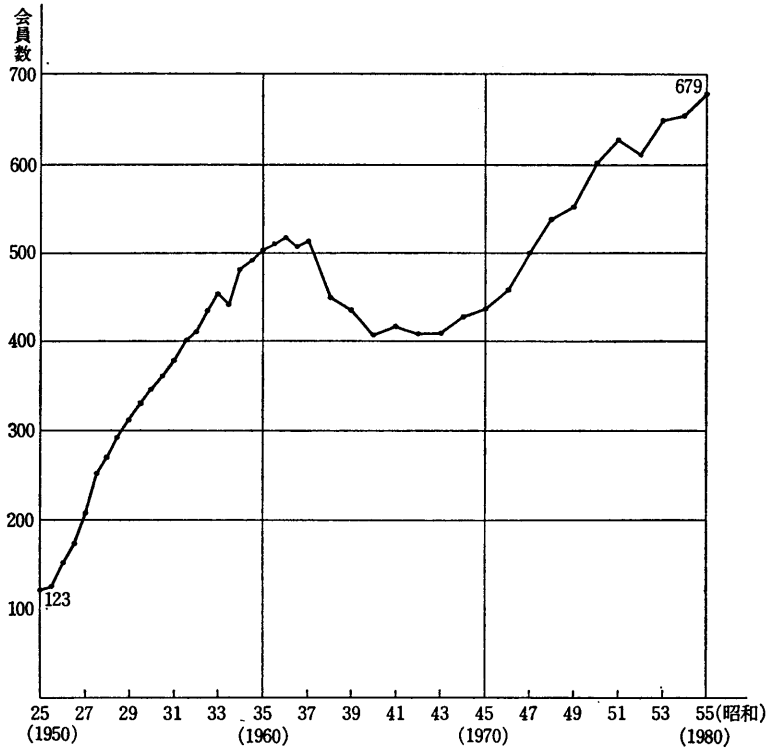
なお、本学会は日本学術会議会員の選出に当って、昭和四〇年以降、学会としての推薦を行なってきた。学史学会推薦会員は左の通りである（全は全国区、地は地方区を示す）。

第七期（昭和四〇―四三年）河野健二（全）
第八期（昭和四三―四六年）河野健二（全）水田　洋（地）
第九期（昭和四六―四九年）水田　洋（全）高木暢哉（全）
第一〇期（昭和四九―五二年）高木暢哉（全）浜林正夫（全）
第一一期（昭和五二―五五年）浜林正夫（全）平井俊彦（全）

Ⅲ 会員数の変動

大会	年月（昭和）	会員数	大会	年月（昭和）	会員数
1	25. 4	123	26	37.11	516
2	25.12	127	27	38.11	450
3	26. 5	142	28	39.11	440
4	26.11	152	29	40. 9	409
5	27. 5	175	30	41.11	423
6	27.11	209	31	42.11	412
7	28. 5	254	32	43.11	(415)
8	28.11	273	33	44.11	(429)
9	29. 5	297	34	45.11	439
10	29.11	314	35	46.11	(461)
11	30. 5	335	36	47.11	(500)
12	30.11	349	37	48.11	(544)
13	31. 5	364	38	49.11	553
14	31.11	384	39	50.11	(604)
15	32. 5	403	40	51.11	632
16	32.11	413	41	52.11	614
17	33. 5	439	42	53.11	651
18	33.11	456	43	54.11	654
19	34. 5	445		55. 5	679
20	34.11	482			
21	35. 5	493			
22	35.11	505			
23	36. 5	513			
24	36.11	519			
25	37. 5	510			

備考　昭和34年5月　経済理論学会創立
昭和37年5月　自然退会規定5ケ年滞納を2ケ年に変更
昭和51年11月　社会思想史学会創立（　）内は推定数


会員数
700
600
500
400
300
200
100
679
123
25
(1950)
27
29
31
33
35
(1960)
37
39
41
43
45
(1970)
47
49
51
53
55(昭和)
(1980)

Ⅳ　学会費と学会会計（一九七九年度会計報告）

学会費の推移

一九五〇年度―五八年度　二〇〇円
一九五九年度―六一年度　三〇〇円
一九六二年度　六〇〇円
一九六三年度―六九年度　一、〇〇〇円
一九七〇年度―七二年度　一、五〇〇円
一九七三年度―七四年度　二、五〇〇円
（院生　二、〇〇〇円）
一九七五年度―七九年度　三、〇〇〇円
（院生　二、五〇〇円）
一九八〇年度　五、〇〇〇円
（院生　三、〇〇〇円）

経済学史学会　1979年度　会計報告

収　支　決　算　書

（自1979.4.1　至1980.3.31）

収入の部		支出の部	
項目	金額 円	項目	金額 円
前期繰越金 (1)	868,539	大会費 (4)	376,340
会費 (2)	1,948,500	部会補助費 (5)	78,669
年報売上 (3)	94,400	会議費 (6)	101,800
文部省助成	390,000	年報発行費 (7)	895,412
利子	4,934	名簿発行費 (8)	200,000
雑収入	0	学会事務センター費 (9)	494,866
【前期繰越金を除く合計】	2,437,834	事務局費 (10)	262,075
		30年史関係費	20,450
		学会分担金 (11)	71,655
		外国人研究者講演謝金	70,000
		【以上の合計】	2,571,267
		次期繰越金 (12)	735,106
合計	3,306,373	合計	3,306,373

(1) 前期繰越金

銀行預金	495,799
センター預け金	376,985
現金	0
前事務局立替金	△ 4,245

(2) 会費収入

正会員	1,750,000
学生会員	177,500
前受会費	21,000

(3) 年報売上

事務局扱い	4,000
大会での扱い	13,500
センター扱い	69,900
名簿売上	7,000

(4) 大会費（第43回大会）

第43回大会南山大立替支出	124,545
同上、センター立替	251,655
通信費	140

(5) 部会補助費

関東部会（1回）	7,400
関西部会（2回）	34,300
西南部会（3回）	36,969

(6) 会議費

幹事会費	28,800
常任幹事会費	73,000
（宿泊通信費）	

(7) 年報発行費（17号）

印刷費	834,800
編集費	7,340
文献抄録費	17,452
執筆料	10,120
送料（運送、発送）	25,700

〔年報には別に年報特別会計あり〕

(8) 名簿発行費

1979年度には名簿は作成しないで200,000円を積立金としておいておく。

(9) 学会事務センター費

業務委託費	436,686
会費請求郵税	48,500
センター関係費	9,680

〔センターからの預り金報告書明細のうち、大会費、年報発送費、事務局費はそれぞれの項目に分類した。〕

(10) 事務局費

事務局移転費	2,480
事務費（用品、アルバイト）	18,440
事務担当費	60,015
通信費	95,380
旅費	53,400
印刷費	22,360
謝金	10,000

(11) 学会分担金

国際学会	51,455
国内学会	20,200

---

(12) 次期繰越金

銀行預金（静岡銀行　静岡曲金支店）	473,333
センター預け金（センター預り金報告書）	317,754
郵便振替口座残高	38,118
現金	105,901
繰越金の年間減少額（赤字額）は	135,598

V　大会研究報告（大会期間中の特別講演・公開講演を含む）

第一回（昭和二五年四月二二―二三日　早稲田大）

1　リカアドオと産業革命　隅谷三喜男（東京大）
2　価値論におけるリカアドオとベーリー　玉野井芳郎（東北大）
3　リカアドオの分配論について　堀　経夫（関西学院大）
4　マルクスの抽象的労働の概念　杉山　清（早稲田大）
5　「経済表」の現代的意義　越村信三郎（横浜国立大）
6　重商主義と近世国家の成立――歴史派的重商主義観の批判――　白杉庄一郎（滋賀大）

第二回（昭和二五年一二月九日　京都大）

1　アダム・スミス以前の自由貿易論について　相見志郎（同志社大）
2　チュルゴー及びコンジヤックの主観価値論　山川義雄（早稲田大）
3　イギリス重商主義の解体とスミス経済学の成立　田添京二（東京大）
4　フィジオクラァトとルソオ　河野健二（京都大）

第三回（昭和二六年五月五日　東京大）

1　リカアドオの不変の価値尺度論　遊部久蔵（慶応義塾大）
2　マルクスの価値形態論について　鈴木鴻一郎（東京大）
3　ケネー学説における政策的背景　菱山　泉（京都大）
4　リカアドオの論理構造　行沢健三（関西学院大）
5　重商主義の批判的体系としてのスミス国富論　内田義彦（専修大）

第四回（昭和二六年一一月八―九日　関西学院大）

共通論題　古典学派と重商主義

1　ベンジャミン・フランクリンと重商主義　久保芳和（関西学院大）
2　アダム・スミスと貨幣数量説の論理　堀家文吉郎（早稲田大）
3　イギリス・マアカンティリズムと国家論――トマス・ホップスを中心として――　水田　洋（名古屋大）
4　スミスとマアカンティリズム　小林　昇（福島大）

自由論題

5　アーノルド・トインビィの賃銀論　西村孝夫（広島大）
6　自由貿易運動の発端としてのミル対スペンス市場論争　岡茂男（九州大）
7　マルクス剰余価値論の基本性格　杉原四郎（関西大）
8　スミスの地代論について　溝川喜一（京都大）
9　ジョン・ラスキン経済思想の一検討　木村正身（香川大）

第五回（昭和二七年五月三―四日　慶応義塾大）

共通論題　人口論

1　フランクリンの人口に関する見解　渡辺国広（慶応義塾大）
2　日本の人口及び人口研究の現状　寺尾琢磨（慶応義塾大）
3　アメリカにおける人口理論の特質　大道安次郎（関西学院大）

自由論題

4 マルサスの価値尺度論　入江　奨（松山商科大）
5 社会思想家としてのマブリ　縫田清二（横浜国立大）
6 フランクリンの価値論　三辺清一郎（尾道短期大）
7 リチャード・ジョーンズの経済学　大野精三郎（一橋大）
8 日本経済学史における歴史学派　住谷悦治（同志社大）
9 重農主義学説の基本的性格　横山正彦（東京大）

第六回（昭和二七年一一月八―九日　神戸大）

1 重農学派の価値論　平田清明（横浜国立大）
2 クニースにおける民族の問題　出口勇蔵（京都大）
3 社会科学史としてみた経済学史　榊原　巌（青山学院大）
4 初期マルクスの経済学研究　長洲一二（横浜国立大）
5 マルクス恐慌論の若干問題　石原忠男（中央大）
6 「資本論」における「価値法則」の展開　楠井隆三（関西学院大）
7 リカアドオ蓄積論の構成――古典学派の完成――　吉沢芳樹（東京大）
8 ヒルファディングの信用理論について　古沢友吉（横浜市立大）

第七回（昭和二八年五月二―三日　一橋大）

共通論題　経済学における『古典』理論と『近代』理論

1 アメリカ経済学の場合　大道安次郎（関西学院大）
2 経済学の五つの基本命題を中心として――生理学的解剖――　平瀬巳之吉（専修大）

自由論題

3 梅巌から堵庵へ――石門心学の経済思想史的一考察――　多田　顕（千葉大）
4 蘇格人（スコット）アダム・スミス――スミス思想のよりよき理解のために――　上田辰之助（一橋大）
5 フランクリンの奢侈論　三辺清一郎（尾道短期大）
6 マルクスの恐慌論について　末永茂喜（東北大）
7 ジョン・ロック経済理論の構成　羽鳥卓也（福島大）
8 資本主義の限界状況におけるマルクスとウェーバー　武藤光朗（中央大）
9 「経済学批判」のプランについて　宮崎犀一（一橋大）

第八回（昭和二八年一一月七―八日　福島大）

共通論題　リカアドウとマルサス

1 国際価値論としての比較生産費説　川尻　武（中央大）
2 マルサスとリカアドウ――思想史上の前後について　榊原巌（青山学院大）
3 リカアドウ「機械論」の成立と発展　真実一男（長崎大）
4 穀法論争期におけるマルサスとリカアドウとの書簡上の利潤をめぐる論争　堀　経夫（関西学院大）

自由論題

5 アダム・スミスと「アメリカ体制」　大道安次郎（関西学院大）
6 室鳩巣の社会経済思想について――享保期社会経済思想の一考察――　多田　顕（千葉大）

7 デュプュイの相対的効用理論について　柏崎利之輔（早稲田大）
8 生産力説の歴史的意味――フランス「百科全書」派の立場――　河野健二（京都大）
9 十七世紀英国における価値及び価格理論　飯塚一郎（山梨大）
10 貨幣数量説の本質　加藤一夫（秋田大）
11 トーマス・ウィルソンの経済論――利子・為替論を中心にして――　渡辺源次郎（福島大）

第九回（昭和二九年五月八―九日　横浜国立大）（開催校は横浜国立大、横浜市立大、関東学院大、神奈川大）

共通論題　マルサスとリカアドウ

1 マルサス・リカアドウ研究の意義と問題　岸本誠二郎（京都大）
2 リカアドウとマルサスの論理構造　平瀬巳之吉（専修大）
3 マルサスの価値論と再生産論　遊部久蔵（慶応義塾大）
4 リカアドウの経済学説　玉野井芳郎（東京大）
5 リカアドウにおける資本蓄積と恐慌　富塚良三（福島大）
6 マルサスの社会動態論　中野　正（法政大）

自由論題

7 リチャード・ジョーンズにおける生産的労働の概念　平野絢子（慶応義塾大）
8 ジョサイア・タッカーと産業革命　小林　昇（福島大）
9 江戸時代の正価思想　東　晋太郎（関西学院大）
10 価値形態論と交換過程論　久留間鮫造（法政大）
11 資本論の体系について　梯　明秀（立命館大）

共同報告「トマス・モア研究」

12 イギリス商業資本と「ユートピア」　田村秀夫（中央大）
13 モアの農本的思想について　松田　寛（早稲田大）

第一〇回（昭和二九年一一月六―七日　関西大）

共通論題　経済学史の方法論（シンポジウム）司会　出口勇蔵（京都大）

1 相沢秀一（大阪市立大）
2 林　治一（神戸大）
3 渡辺輝雄（東京経済大）
4 横山正彦（東京大）
5 島津亮二（京都大）

自由論題

6 古典派の価値論について――特にリカアドウを中心として――　入江　契（松山商大）
7 西鶴の『日本永代蔵』とディフォウの『イギリス商人大鑑』――東西経済思想の二つの典型――　上田辰之助（一橋大）
8 思想史上における司馬江漢　多田　顕（千葉大）
9 レーニンの『市場理論』について　田中真晴（京都大）
10 マルクスとスターリン　気賀健三（慶応義塾大）
11 フランクリンと奴隷制度　三辺清一郎（尾道短期大）

第一一回（昭和三〇年五月七―八日　中央大）

1 ミルトンの社会思想について　豆本　薫（滋賀大）
2 マンデヴィルとアダム・スミス――経済学史におけるマンデヴィルの地位――　田中敏弘（関西学院大）
3 イギリスのスミス　大河内一男（東京大）
4 ラヂーシチェフの農奴制批判――その主著『ペテルブルグからモスクワへの旅』を中心として――　渋谷一郎（一橋大）
5 ベンサム経済理論の構造と発展　石本美代子（高崎短期大）

共通論題　アダム・スミス

6 スミスとベンサム――両体系の構造対比――　山下　博（京都大）
7 スミスにおける自然的なるものの経済学的意味　大門一樹（関東学院大）
8 アダム・スミスにおける国富について　森　茂也（南山大）
9 スミス蓄積論の基本構成――リカードウとの対比　富塚良三（福島大）

第一二回（昭和三〇年一一月五―六日　大阪市立大）

1 シスモンディからみたイギリス古典経済学　中野　正（法政大）
2 学史研究と近代経済学　山田雄三（一橋大）
3 マルクスの「剰余価値学説史」について　末永茂喜（東北大）
4 社会思想史における藤樹　多田　顕（千葉大）
5 経済学におけるイデアル・ティプス概念について　安藤英治（成蹊大）
6 経済学教科書の意義について　岡本博之（大阪市立大）
7 フランクリンの製造業論　三辺清一郎（尾道短期大）
8 トーリー・フリー・トレードの解体　小林　昇（立教大）

第一三回（昭和三一年五月五―六日　法政大）

共通論題　古典学派一般

1 ルソーの経済思想　羽鳥卓也（福島大）
2 リカードウの議会改革論と経済理論　吉沢芳樹
3 シスモンディ経済学の古典的性格について　平田清明（横浜国立大）

自由論題

4 「アメリカ経済学会」の成立をめぐって――アメリカ経済学史の一節――　大道安次郎（関西学院大）
5 マルクス信用論の展開――「経済学批判綱要」をめぐって――　石垣博美（北海道大）
6 「経済学批判」体系における「賃労働」問題――『資本論』と「賃労働」の関係を中心として――　井村喜代子（慶応義塾大）
7 イギリス資本主義発展途上における清教主義経済倫理の変質　松浦高嶺（高崎短期大）
8 独逸官房学派に関する一考察　武藤正平（横浜国立大）
9 朱子学正学化の過程――寛政異学の禁研究序説――　多田顕（千葉大）

第一四回（昭和三一年一一月二―三日　同志社大）

1 ジョン・ステュアート・ミルと社会主義思想　福原行三（大阪府立大）
2 ヴェブレンにおける消費の思想について　渋谷行雄（早稲田大）
3 リカアドオ“Essay on Profits”の一考察　中村広治（九州大）
4 松平定信の経済論　多田　顕（千葉大）

共通論題　恐慌論

5 『恐慌論』を進めるについての前書き　石原忠男（中央大）
6 近代景気循環理論の一つの型とそのシュムペーター理論　伊達邦春（早稲田大）
7 シュピートホフの景気理論について　城座和夫（東京都立大）
8 経済発展の一般理論——資本蓄積論の課題と方法——吉田義三（大阪市立大）
9 恐慌論の基本問題　山本二三丸（立教大）
10 恐慌論研究の方法について　石原忠男（中央大）

第一五回（昭和三二年五月一一—一二日　明治大）

1 フリードリッヒ・リストの「経済発展段階」の概念に関する問題　酒枝義旗（早稲田大）
2 ルイス・ロバーツの外国貿易論とその経済史的意義　西村孝夫（大阪府立大）
3 ジェームズ・ハリントンの経済思想　浜林正夫（小樽商大）
4 ルカーチのイデオロギー論　平井俊彦（京都大）

共通論題　経済発展と資本蓄積の理論

オーガナイザーの言葉　越村信三郎（横浜国立大）
スミス蓄積論と利潤率低下法則の問題　藤塚知義（武蔵大）
5 フランス古典派経済学の資本蓄積論——シスモンディを中心として——　大島雄一（名古屋大）
6 経済発展にかんする最近の近代理論について　宮崎義一（横浜国立大）
7 マルクス体系における資本の流通過程と変動　高木暢哉（九州大）
8 ソヴィエト連邦における経済発展と蓄積の理論　野々村一雄（一橋大）
9 総括——資本蓄積論の問題点とその意義　越村信三郎（横浜国立大）
10

第一六回（昭和三二年一一月一六—一七日　関西学院大）

1 鎌田鵬（石門心学者）の思想について——徳川後期思想史研究——　多田　顕（千葉大）
2 経済学移植の社会的地盤——明治経済学の場合——　大道安次郎（関西学院大）
3 特別講演　The Rise of Classical Sociology　Ronald L. Meek
4 イギリス経済学と海運　伊坂市助（関東学院大）

5 W・ゴドウィンとW・タムソン——資本主義批判史の展開に寄せて——　白井　厚（慶応義塾大）
6 ベンジャミン・フランクリンの自由主義の性格　三辺清一郎（尾道短期大）

第一七回（昭和三三年五月一〇—一一日　立教大）

公開講演
1 重農主義学説の階級的基盤　横山正彦（東京大）
2 ケネー経済表の諸表式　坂田太郎（一橋大）

自由論題
3 生産的労働と所得　金子ハルオ（東京大）
4 戦後における理論模型の一つの発展方向——消費函数論争に寄せて——　清水川繁雄（明治大）
5 マルクス恐慌論の一考察——景気循環と固定資本投資——林　直道（大阪市立大）
6 ディドロと保護主義　吉田静一（関西大）
7 イギリスにおける初期急進主義思想——ロバート・ウォーレスについて——　永井義雄（名古屋大）
8 最近のフランスにおけるマルクス研究について　岡田純一（聖心女子大）
9 明治前期移入社会科学とアメリカ「社会科学運動」との系譜関係　早瀬利雄（横浜市立大）

第一八回（昭和三三年一一月二—三日　立命館大）

共通論題　ケネー研究
1 経済表（原表）の構想　渡辺輝雄（東京経済大）
2 ケネー経済表の現代的意義　越村信三郎（横浜国立大）
3 重農主義とフランス革命　河野健二（京都大）
4 ケネーの賃金論　狭田喜義（広島大）
5 ケネー学説における一問題　菱山　泉（京都大）
6 経済表と範式との相互補足の解釈　橋本純二（徳島大）

自由論題
7 「特殊」な不況とニュー・ディール財政政策　金田重喜（京都大）
8 ホッブス自然法思想の近代性解釈をめぐって——とくにウォリンダー氏の所論を中心として——　田中正司（横浜市立大）
9 経済学史研究の立場について　石川興二（京都大）
10 労働価値説と現代資本主義——とくにマルクス地代論の誤りについて——　堀江忠男（早稲田大）
11 石門心学と武士階級　多田　顕（千葉大）
12 古典派の根本的盲点の一つとしての開放、封鎖両経済体系概念の区別　有田　稔（関西大）

第一九回（昭和三四年五月九—一〇日　専修大）
1 マルクス生産価格論の意義と限界——恐慌論の視角からする一考察——　松岡寛爾（名城大）
2 利子率法定論争と賃金——十七世紀イギリスにおける——渡辺源次郎（福島大）
3 スチュアート『原理』の歴史的背景　小林　昇（立教大）
4 チャーチズムにおける労働者の性格とその思想　野地洋行

（慶応義塾大）

5 オーウェン主義の成立――恐慌観と労働価値＝貨幣論を中心として――　松田弘三（立命館大）

6 サン・シモンの産業主義思想　坂本慶一（京都大）

7 J・S・ミルの利潤論に関する一考察　杉原四郎（関西大）

8 マックス・ウェーバーの農政論　山口和男（甲南大）

9 寛政期社会思潮管見――松平定信を中心として――　多田顕（千葉大）

第二〇回（昭和三四年一一月七―八日九州大）（開催校は九州大、西南学院大、福岡商科大）

1 国民所得分析と投入産出分析――乗数理論、成長理論を中心に――　村田安雄（神戸商大）

2 古典的派恐慌論の発展形態　末永茂喜（東北大）

3 フリードリッヒ・フォン・ゴットル教授の生活と業績について　酒枝義旗（早稲田大）

4 マルクス体系における価値の概念　城座和夫（東京都立大）

5 アダム・スミスの重商主義論　相見志郎（同志社大）

6 現代資本主義論の方法について　馬場元二（久留米大）

7 開かれた体系としての「資本論」　梯　明秀（立命館大）

8 人口論者としての Giovanni Botero について　南亮三郎（中央大）

第二一回（昭和三五年五月一四―一五日　日本大）

1 経済学の冷戦的現状と学史的研究の世界性　石川興二（京都大）

2 現代資本主義分析の一視角　加藤泰男（明治大）

3 第一部門優先的発展の法則――とくにマルクスの拡張再生産表式を中心に――　林　直道（大阪市立大）

4 ハロッドの経済成長理論の一考察――いわゆる貨幣的経済理論との関連にて――　三上正之（中京大）

5 厚生経済における効用理論　有田一郎（熊本大）

6 チューネンについての若干の考察　岡村邦輔（日本大）

7 明治末期の河上　肇　内田義彦（専修大）

8 国学者の経済論について　多田　顕（千葉大）

第二二回（昭和三五年一一月四―五日　名古屋大）

1 イギリスにおけるマルクス主義――十九世紀イギリス社会主義運動に関連して――　飯田　鼎（慶応義塾大）

予定討論　杉山忠平（静岡大）

2 ジョン・ミラーのフランス革命観――とくに対仏干渉戦争批判の根拠について――　山崎　怜（香川大）

予定討論　小林　昇（立教大）

3 ヘスとマルクス　山中隆次（和歌山大）

予定討論　平井俊彦（京都大）

4 ウイルヘルム・ワイトリングの革命思想　森田　勉（三重大）

予定討論　高橋正立（京都大）

5 「経済表」の論理と構造　吉原泰助（東京大）

予定討論　平田清明（名古屋大）

6 十九世紀アメリカ経済学史における道徳哲学の性格　早瀬

利雄（横浜市立大）
7 予定討論　久保芳和（関西学院大）
商品の価値の「実体」とその「形態」――労働価値説の根本問題――　渡辺　昭（東京大）
予定討論　岡崎栄松（立命館大）
8 拡大再生産表式における固定資本の補塡と蓄積基金の積立てについて　二瓶　敏（東京大）
予定討論　宮崎犀一（国学院大）
9 ヒルファーディング『金融資本論』の現代的評価――刊行五十周年を記念して――　古沢友吉（横浜市立大）
予定討論　熊谷一男（一橋大）

第二三回（昭和三六年五月一三―一四日　東北大）（開催校は東北大、東北学院大）

1 寡占価格の性質について――現代資本主義と管理価格――　池田一新（明治大）
2 ジョン・ケアリーの経済体制の構想　渡辺源次郎（福島大）
3 拡大再生産表式に関する一試論　高木幸二郎（九州大）
4 ウィリアム・モリスにおけるユートピア思想の性格　木村正身（香川大）
5 熊沢蕃山の社会経済思想とその潮流　多田　顕（千葉大）
6 土地生産物における一般的生産価格の形成――差額地代第一形態の理解のために――　日高　普（法政大）
7 アダム・ファーガスンと古典的政治経済学　大野精三郎（一橋大）
8 成長循環の概念図試作と近代理論の発展推移　伊坂市助（関東学院大）
9 経済学の発展について――マルクスとケインズ――　玉野井芳郎（東京大）

第二四回（昭和三六年一一月四―五日　和歌山大）

1 白杉博士の資本主義精神起源論――遺稿『近世西洋経済思想史』中の一篇紹介――　松尾　博（滋賀大）
2 G・ミュルダールの価値判断論　浜崎正規（立命館大）
3 独乙古経済学の特質　武藤正平（横浜国立大）
4 ウィリアム・ウッドのアメリカ植民地にかんする見解について　宇治田富造（立教大）
5 ジョージ・ラムズィにおける資本蓄積と労働者階級の生活について　蛯原良一（新潟大）
6 イギリス労働運動の一側面――メカニックス・インスティテュートとその思想的背景――　安藤悦子（名古屋大）
7 Workable Competition と反トラスト法について　中山大（甲南大）
8 ケネーの「経済表範式」の生成　渡辺輝雄（東京経済大）
9 生産資本循環と市場・恐慌分析視角　平田清明（名古屋大）

第二五回（昭和三七年五月一二―一三日　東京経済大）

1 プレハーノフのロシア資本主義論――『われわれの相違』を中心として――　田中真晴（京都大）
2 ジェイムズ・ミルの『商業擁護論』をめぐる諸問題　林

登良雄（下関市立大）

3 新らしい経済学と河上　肇先生　石川興二（京都大）

4 J・S・ミルの労働把握　高島光郎（横浜国立大）

5 フランス経済思想研究の意義について（総括報告）　河野健二（京都大）

6 農業革命と経済表　平田清明（名古屋大）

7 一九世紀初頭のフランス重商主義　吉田静一（関西大）

8 サン・シモン派の思想と運動　坂本慶一（京都大）

9 販路説の原型について――セイを中心にして――　溝川喜一（甲南大）

10 シスモンディ「経済学研究」における価値論と恐慌論について　岡田純一（聖心女子大）

第二六回（昭和三七年一一月一〇―一一日　香川大）

共通論題　労働価値論の端緒――W・ペティ『租税貢納論』公刊三百年記念――

1 前言――初期労働価値論史上の問題点――　小林　昇（立教大）

2 『租税貢納論』の構造　高野利治（関東学院大）

予定討論　田添京二（福島大）

3 ペティ労働価値説の起源について　松川七郎（一橋大）

予定討論　渡辺輝雄（東京経済大）

4 チャイルドとロック　平井俊彦（京都大）

予定討論　渡辺源次郎（福島大）

自由論題

5 ジョン・ローの金融論の基本的性格――重商主義論の一変型――　赤羽　裕（東京大）

予定討論　吉田静一（関西大）

6 徳川時代における頼母子講思想の研究――田中丘隅・海保青陵を中心に――　森　静朗（日本大）

予定討論　多田　顕（千葉大）

7 モーゼス・ヘスの「人間疎外」の思想――とくにマルクスとの関係について――　畑　孝一（一橋大）

予定討論　重田晃一（関西大）

8 トマス・ホジスキンの資本主義批判について　鎌田武治（横浜国立大）

予定討論　堀　経夫（関西学院大）

9 ロバート・オーエンの空想的社会主義――その基本的性格――　永井義雄（名古屋市立女子短大）

予定討論　松田弘三（立命館大）

第二七回（昭和三八年一一月九―一〇日　武蔵大）

1 トマス・マン「財宝論」の理論的構造　遠山　馨（西南学院大）

2 エコノミストとしてのデイヴィッド・ヒューム　田中敏弘（関西学院大）

3 スミス「国富論」における国家財政把握について　和田重司（一橋大）

4 A・E・シエルビュリエ著「富か貧困か」（一八四〇年刊、一八三頁）における労働者階級の窮乏化論について　蛯

原良一（新潟大）

5 アンダアスンの地代論について　西山久徳（明治大）

6 マルサスの価値および分配論　橋本比登志（関西学院大）

7 イギリス経験論の歴史的性格――一七世紀を中心として――　浜林正夫（小樽商大）

8 M・ウェーバーにおける労働問題把握の構造と特質　中村貞二（山口大）

第二八回（昭和三九年一一月七―八日　大阪府立大）

1 M・ウェーバーと東洋における資本主義の精神　大野信三（明治大）

予定討論　東　晋太郎（関西学院大）

2 林　子平の社会経済論――寛政期思潮との連関に於て　多田　顕（千葉大）

予定討論　藤井定義（大阪府立大）

3 イギリス公債思想の一典型――ジェームズ・ステュアートの場合　戒田郁夫（関西大）

予定討論　川島信義（西南学院大）

4 ジョン・ロックのプロパティ論　田中正司（横浜市立大）

予定討論　平井俊彦（京都大）

5 イギリス産業革命における労働者――メカニックス・マガジンの分析――　安川悦子（名古屋大）

予定討論　木村正身（香川大）

6 A・マーシャル『経済学原理』における準地代学説の発展　柏崎利之輔（早稲田大）

予定討論　南方寛一（神戸大）

7 『国富論』における概念編成の問題――とくに第三編以降――　宮崎犀一（国学院大）

予定討論　和田重司（大阪経済大）

8 資本論体系と古典派競争論について　逢坂　充（九州大）

予定討論　金子　甫（桃山学院大）

第二九回（昭和四〇年九月二五―二六日　小樽商大）

1 ベイコンとペティ――教育思想を中心として――　芳賀守（福島二高）

2 ジェイムズ・ステュアートの信用理論――その「土地銀行論」的性格――　川島信義（西南学院大）

3 初期リカードウの分配論　羽鳥卓也（福島大）

4 第一インターナショナルとドイツ労働運動――ドイツ労働運動における民主主義と社会主義――　飯田　鼎（慶応義塾大）

5 ヘスとマルクス――疎外理論と経済学理論との交流の視点から――　中野徹三（札幌短期大）

6 古典派蓄積論の展開についての一考察　荒牧正憲（九州大）

共通論題　経済学と歴史意識

7 チュルゴの歴史思想と政治経済学の形成　津田内匠（一橋大）

8 スミス経済学における歴史主義　宮崎犀一（国学院大）

9 フリードリッヒ・リストと経済学における歴史主義　小林昇（立教大）

10 マルクスにおける歴史意識と経済学　平田清明（名古屋大）
11 経済学と歴史意識――ケインズを中心として――　伊東光晴（東京外国語大）

総括　出口勇蔵（京都大）

第三〇回（昭和四一年一一月一二―一三日　京都大）

1 ジョン・レイの思想と資本理論　林　治一（神戸大）
予定討論　久保芳和（関西学院大）
2 独逸旧歴史派経済学の有機体理論　赤羽豊治郎（松商学園）
予定討論　出口勇蔵（京都大）
3 ケインズ・学説史的接近の一方法　有田一郎（熊本大）
予定討論　菱山　泉（京都大）
4 J・F・ブレイの社会革命の思想　上野　格（成城大）
予定討論　遊部久蔵（慶応義塾大）
5 価値と価格　中村賢一郎（明治大）
予定討論　山下　博（同志社大）

共通論題　カール・マルクス

6 マルクスとヘーゲル　細見　英（立命館大）
予定討論　良知　力（法政大）
7 プルードンとマルクス　森川喜美雄（専修大）
予定討論　坂本慶一（竜谷大）
8 マルクス経済学と俗流経済学　玉野井芳郎（東京大）
予定討論　大熊信行（神奈川大）
9 「労働賃金」について　大内秀明（東北大）
予定討論　岡崎栄松（立命館大）

総括討論司会　水田　洋（名古屋大）
杉原四郎（関西大）

第三一回（昭和四二年一一月一一―一二日　早稲田大）

1 マルクスの生産的労働論の生成について――その学説史的あとづけ――　阿部照男（中央大）
2 マルクスの教育思想と児童労働論との関係について　中野徹三（札幌短期大）
3 『資本論』における弁証法　堀江忠男（早稲田大）
4 『国富論』の編別構成についての一論　和田重司（大阪経済大）
5 『第三の経済学』の学史的基礎　石川興二（京都大）
6 渋沢栄一・論語・定信　多田　顕（千葉大）
7 ステュアートにおける流通必要量概念の形成について――ヒューム数量説批判をめぐる問題――　川島信義（西南学院大）
8 ワルラスとマーシャル――方法論的比較――　馬場啓之助（一橋大）
9 ヒューム『イギリス史』の一考察　田中敏弘（関西学院大）
10 ケネーにおける利潤範疇　横山正彦（東京大）

第三二回（昭和四三年一一月九―一〇日　広島大）

1 ルネサンス社会思想の機能と構造　品川清治（竜谷大）
2 Montchrétien: "Traicté de l'oeconomie politique" 1615における対外商業政策論に関する一考察　岩根典夫（関西学院大）

3 アダム・スミスの同感の概念をめぐって　水田　洋（名古屋大）
4 マルサスの利潤論　羽鳥卓也（岡山大）
5 賃銀生存費説の解体　城座和夫（東京都立大）
6 リカードウ＝マルサス間の資本蓄積論争――穀物法論争下における――　中村広治（大分大）
7 マーシャルの労働市場分析について――主として労働供給を中心に――　井出口一夫（福岡大）
8 ケインズ経済学と自由放任思想　有田一郎（熊本大）
9 現代経済成長理論の一考察――ケインジアン・アプローチの意義と限界――　中村至朗（名古屋学院大）
10 市民社会と資本主義――貨幣の資本への転化をめぐって――　平田清明（名古屋大）

第三三回（昭和四四年一一月八―九日　横浜市立磯子会館　開催校横浜市立大）

1 ファーガスンにおける二つの道徳――ファーガスンの市民社会像――　天羽康夫（名古屋大）
2 D・ヒュームの道徳哲学と政治理論　舟橋喜恵（同朋大）
3 古典派の利潤率低下問題　大内秀明（東北大）
4 J・S・ミルの資本蓄積論をめぐって　荒牧正憲（九州大）
5 日本における近代的職業倫理の生成について――鈴木正三、心学を中心として――　多田　顕（千葉大）
6 一七世紀フランスの対外膨張思想――デュ・ノワイエ・ド・サンマルタンの王立社会構想――　西川　潤（早稲田大）
7 マルクスの〝世界認識〟の方法的基礎　赤羽　裕（東京大）
8 ブレイとマルクス　上野　格（成城大）
9 商品物神性論の意義について――歴史理論としての商品論の総括――　平田清明（名古屋大）

第三四回（昭和四五年一一月七―八日　熊本商大）

1 再生産表式の形成過程について　高木　彰（岡山大）
2 有効需要の学史的研究　有田一郎（熊本大）
3 シュルツ・インフレ論の検討　中村賢一郎（明治大）
4 シュンペーターの学説の現代的意義　玉野井芳郎（東京大）
5 サン-シモンとフランス革命　広田　明（名古屋大）
6 ブルードンの経済学体系の方法について　佐藤茂行（北海道大）
7 ヘスとマルクス　畑　孝一（福島大）
8 資本回転論の成立と意義――市民社会の再生産論的研究のために――　山田鋭夫（名古屋大）
9 リカードウの発展的社会像　吉沢芳樹（専修大）
10 信用組合設立前後の論争　森　静朗（日本大）
11 明治時代の経済雑誌　杉原四郎（甲南大）
12 「近代経済学生誕」の経済学史的意義　林　治一（神戸大）

第三五回（昭和四六年一一月一三―一四日　明治学院大）

共通論題　近代経済学百年の意義

1 マーシャルと経済学の歩み　保坂直達（神戸商大）

2 ワルラス一般均衡理論における資本蓄積の問題　山下　博（同志社大）
3 ワルラス・マーシャル・ケインズと日本　早坂　忠（東京大）

自由論題

4 経済学における人間喪失　大能信行（創価大）
5 チェインバレンとファーミン――その社会・経済思想について――　芳賀　守（徳山大）
6 アダム・スミス『道徳感情の理論』における「共感」の構造　野沢敏治（名古屋大）
7 J・S・ミルと新古典派理論――ミルの国際価値論を中心として――　四野宮三郎（高崎経済大）
8 福沢諭吉の儒教批判論について　多田　顕（千葉大）
9 賀川豊彦の信用組合観　森　静朗（日本大）

第三六回（昭和四七年一一月一一―一二日　松山商大）

1 『資本論』の原稿について　佐藤金三郎（大阪市立大）
2 プルードン相互主義の形成と展開　岩根典夫（関西学院大）
3 シュムペーターと近代経済学　大野忠男（大阪大）
4 ロバート・オウエンとロシアの思想家たち　今井義夫（工学院大）
5 パレート『社会均衡概念』の再評価　松浦　保（慶応義塾大）
6 一九〇五年のロシア革命と日本の社会主義――ヨーロッパ労働運動の日本の社会主義への影響――　飯田　鼎（慶応義塾大）
7 ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』と帝国主義認識　松岡利道（大阪市立大）
8 ヒルファディング『金融資本論』成立史に関する一考察　倉田　稔（日本社会事業大）
9 ウィリアム・ペティの経済理論　稲村　勲（立命館大）
10 ステュアート政策論とスミス基礎理論　和田重司（中央大）

共通論題　リカードウ・シンポジウム

11 リカアドウ体系における価値論の意味　中村広治（大分大）
12 リカードウ資本蓄積論の再検討　千賀重義（香川大）
13 リカードウ価値論と「社会の初期段階」　羽鳥卓也（岡山大）

「シンポジウム」司会　玉野井芳郎（東京大）討論者　真実一男（大阪市立大）時永　淑（法政大）森　茂也（南山大）坂本弥三郎（神戸学院大）溝川喜一（京都大）豊倉三子雄（関西学院大）

第三七回（昭和四八年一一月八―九日　福島大）

1 マルクスにおける本源的所有と〈ロシア・ミール〉論――ゴェールケの学説的整理について　桂木健次（九州大）
2 『ドイツ・イデオロギー』における市民社会論――持分問題にふれて――　望月清司（専修大）
3 マルクスとワルラスにおける『社会的富』概念の相違について　安藤金男（名古屋市立大）
4 V・パレートにおける経済学と社会学　松嶋敦茂（滋賀大）

5 ヒルデブラントにおける「歴史的方法」　橋本昭一（関西大）
6 現代フランスに於ける自主管理思想の本質――その形態と特徴――　津島陽子（立命館大）

共通論題　帝国主義論

7 マルクス主義の修正と帝国主義論――エンゲルスとベルンシュタイン――　淡路憲治（岡山大）
8 カウツキー帝国主義論の展開過程――植民政策論を中心にして――　相田慎一（大阪市立大）
9 ヒルファディング帝国主義論における信用論の意義について　飯田裕康（慶応義塾大）

第三八回（昭和四九年一一月八―九日　名古屋大）

1 山鹿素行の社会経済論　多田　顕（千葉大）
2 ハロッドの経済動学の発展に関する一考察――基本方程式の発展について――　篠崎敏雄（愛媛大）
3 スミス『国富論』における海運　伊坂市助（関東学院大）
4 資源配分の学説史的考察における方法の問題――城座和夫教授の場合――　大熊信行（創価大）
5 ネオ・オーストリア学派の資本理論　中村至朗（名古屋学院大）
6 アダム・スミスにおける地代と土地所有　鈴木　亮（佐賀大）
7 ミル経済学における社会の進歩――Stationary State と Association の問題――　四野宮三郎（高崎経済大）

予定討論　永井義雄（金沢大）

8 『社会契約論』の世界と近代市民社会　渡辺茂樹（一橋大）

予定討論　浅野　清（名古屋大）

9 市民社会理論の原型――フィルマー批判としての『政府論』の論理と構造――　田中正司（横浜市立大）

予定討論　星野彰男（関東学院大）

共通論題　レーニン・シンポジウム

司会　水田　洋（名古屋大）
10 問題提起　田中真晴（甲南大）
11 〃　服部文男（東北大）
12 〃　松岡　保（関西大）

共通論題　限界革命一〇〇年をめぐって

司会　岡田純一（早稲田大）
菱山　泉（京都大）
13 ワルラスの資本理論について　柏崎利之輔（早稲田大）
14 W・S・ジェヴォンズの科学方法論　井上琢智（関西学院大）
15 マーシャル『経済学原理』における理論と現実　藤田暁男（長崎大）

コメント　早坂　忠（東京大）

特別講演

16 スコットランド啓蒙とロシア　フランコ・ヴェントゥーリ（Franco Venturi）

第三九回（昭和五〇年一一月八―九日　慶応義塾大）

1 アダム・スミスの「有効需要」概念とジェイムズ・ステュア

ート　大森郁夫（早稲田大）
2　イギリス革命期のユートピア像　田村秀夫（中央大）
3　『時事新報』社説を通して見た福沢諭吉の経済思想　多田顕（千葉大）
4　産業循環論の形成過程について　高木　彰（岡山大）
5　アリストテレスにおける経済学の公準――アリストテレスの経済学史上の地位――　玉野井芳郎（東京大）
6　ウェイクフィールド植民地論の基本性格　斉藤義介（成蹊高校）
7　ケネー『経済表』の一解釈　安藤金男（名古屋市立大）
8　明治初期信用組合思想導入過程の一考察　森　静朗（日本大）
9　国際価値論の系譜　木原行雄（東京経済大）
10　ウェーバーにおける個性と現実　藤岡孝四郎（大阪府立大）
11　河上　肇のJ・S・ミル論　杉原四郎（甲南大）

第四〇回（昭和五一年一一月六―七日　九州大）

1　西垣恒矩の信用組合思想　森　静朗（日本大）
2　拂波士著『主権論』をめぐって――明治初期における西欧思想受容の一局面――　高橋真司（長崎造船大）

共通論題　アダム・スミス

3　『国富論』における富裕と安全　小柳公洋（北九州大）
予定討論　飯塚正朝（大阪市立大）
4　アダム・スミスにおける衡平の原理　星野彰男（関東学院大）
予定討論　田中正司（横浜市立大）
5　日本における市民社会論史をめぐって　和田重司（中央大）
予定討論　浜林正夫（東京教育大）

自由論題

6　マルクスの Gattungswesen 概念について　田口卓郎左衛門（青雲学園）
7　トマス・ジェファスンの経済思想とアダム・スミス　白井厚（慶応義塾大）

シンポジウム　アダム・スミスとわれわれ

司会　河野健二（京都大）
小林　昇（立教大）
8　問題提起1　市民社会と小集団――民主主義の問題――　水田　洋（名古屋大）
9　問題提起2　アダム・スミス体系における country と market　玉野井芳郎（東京大）

特別講演

10　*The Wealth of Nations* and the Origins of Ricardo's New Theory of Profits　Samuel Hollander

第四一回（昭和五二年一一月五―六日　東京大）

1　疎外論における類と個の論点について――フォイエルバッハ＝マルクス関係の一考察――　山之内　靖（東京外国語大）

2 剰余価値の生産と資本の生産――『資本論』成立史上の一齣（一八六一～六七年）――　佐藤金三郎（横浜国立大）

3 A Long Debate on Capital Theory――資本理論に関する論争――　中村至朗（名古屋学院大）

4 「転化問題」とスラッファ　松本有一（大阪市立大）

5 スラッファ理論と労働価値説　岸本重陳（横浜国立大）

6 サミュエル・ベイリーの価値概念について　吉田憲夫（早稲田大）

7 W・トンプソンの経済学と「相互協働社会について」　蛯原良一（新潟大）

8 ボリングブルックと一八世紀イギリス・ラディカリズム　浜林正夫（東京教育大）

9 アダム・スミスの「交換価値」とマルクスの「価値」　大渕素行（新潟大）

10 「恐慌の必然性」はいかに「論定」すべきか――富塚良三『恐慌論研究』の一批判――　松田弘三（東洋大）

共通論題　エコノミックスとポリティカル・エコノミー

司会　宮崎犀一（東京女子大）
　　菱山　泉（京都大）

開題　玉野井芳郎（東京大）

11 Political Economy の射程　小林　昇（立教大）
　予定討論　羽鳥卓也（岡山大）

12 一八世紀フランスにおける《économie politique》について　木崎喜代治（京都大）
　予定討論　津田内匠（一橋大）

13 古典経済学時代の Political Economy における二要因の伏在について　藤塚知義（武蔵大）
　予定討論　吉沢芳樹（専修大）

14 エコノミクスとポリティカル・エコノミー――名称の変化と実質の変化――　早坂　忠（東京大）
　予定討論　緒方俊雄（中央大）

第四二回（昭和五三年一一月一一―一二日　千葉大）

1 スミスの〈ドグマ〉について――「分解」手法の意義とその批判――　宮川　彰（東京大）

2 価値形態、物神性、交換過程を巡る諸問題――久留間氏の所説に寄せて――　福原好喜（駒沢大）

3 一九世紀通貨論争と古典派経済学――国富増進の二つの道――　渋川則雄（東京大）

4 サミュエル・ハートリブの思想像について――特に宗教・社会・政治思想を中心に――　芳賀　守（千葉商大）

5 リカードウ穀物モデル分配理論の変貌　羽鳥卓也（岡山大）

6 宇野派恐慌論の一検討　清水正昭（慶応義塾大）

7 ダルジャンソンとグルネ――「自由放任」論の二つの原型――　津田内匠（一橋大）

8 『経済学・哲学草稿』における国民経済学批判の構成と論理について　三野村暢禧（拓殖大）

9 スミス分業論と交換性向の意味　中村賢一郎（明治大）

10 日本資本主義の経済倫理　佐藤武男（東京学芸大）
11 「マーシャルの問題」の再検討　緒方俊雄（中央大）
12 本多利明の重商主義思想――トーマス・マンとの対比において――矢嶋道文（関東学院大）
13 アダム・スミスの資本蓄積論に関する一考察　関　源太郎（九州大）
14 横井小楠の経済思想――近代日本の原点としての経済思想――山崎益吉（高崎経済大）

共通論題　近代日本の経済思想

司会　河野健二（京都大）
多田　顕（千葉大）
羽鳥卓也（岡山大）
開題　河野健二（京都大）
15 福沢諸吉における経済的自由――とくにその初期について――　杉山忠平（静岡大）
予定討論　長　幸男（東京外国語大）
16 柴　四朗の保護貿易論とナショナリズム　上野　格（成城大）
予定討論　杉原四郎（甲南大）
17 戦前日本社会政策学会の成立と衰亡　飯田　鼎（慶応義塾大）
予定討論　真実一男（大阪市立大）

第四三回（昭和五四年一一月一〇―一一日　南山大）

1 アダム・スミスにおける同感概念の構造　新村　聡（東京大）
2 アダム・スミスの「天文学史」について　只腰親和（東京大）
3 剰余価値実体論と剰余価値形態論　佐武弘章（大阪府立社会事業短期大）
4 マルクス「パリ草稿」とスミス　秋田　清（九州大）
5 マルサスの価値尺度論　中矢俊博（南山大）
6 カール・メンガーによる「人間の経済（メンシュリッヒェヴィルトシャフト）」の探究――自著『経済学原理』改訂にむけられた未完の作業――　玉野井芳郎（沖縄国際大）・八木紀一郎（岡山大）
7 コブデンの自由貿易論　熊谷次郎（桃山学院大）
8 アダム・スミスの重商主義批判――その階級的性格をめぐって――　川島信義（西南学院大）
9 レオン・ワルラスの「所有の理論」における経済学的側面　安藤金男（名古屋市立大）
10 シスモンディの信用論　中宮光隆（慶応義塾大）
11 経済学における四つのパラダイム　木下富夫（武蔵大）
12 戦後の制度学派について　久保芳和（関西学院大）

共通論題　プルードンとその周辺

司会　水田　洋（名古屋大）
野地洋行（慶応義塾大）
開題　水田　洋（名古屋大）
13 プルードンのアソシアシオン論　阪上　孝（京都大）

予定討論　坂本慶一（京都大）

14 プルードンの金融制度改革論とその系譜　佐藤茂行（北海道大）

予定討論　斉藤悦則（一橋大）

15 マルクスのプルードン批判について――集合力理論を中心に

――　津島陽子（阪南大）

予定討論　山辺知紀（金沢大）

16 特別講演　Steuart and Keynes　Paul E. Chamley

Ⅵ 大会共通論題リスト

（論題下の数字は報告者数を示す。ただし、三回のシンポジウムを含む。）

1 古典学派と重商主義　(4)　（昭和二五年、第四回）

2 人口論　(3)　（昭和二六年、第五回）

3 経済学における「古典」理論と「近代」理論　(2)　（昭和二八年、第七回）

4 リカアドウとマルサス　(4)　（昭和二八年、第八回）

5 マルサスとリカアーウ　(6)　（昭和二九年、第九回）

6 経済学史の方法論　(5)　（昭和二九年、第一〇回）

7 アダム・スミス研究　(4)　（昭和三〇年、第一一回）

8 古典学派一般　(3)　（昭和三一年、第一三回）

9 恐慌論　(6)　（昭和三一年、第一四回）

10 経済発展と資本蓄積の理論　(6)　（昭和三二年、第一五回）

11 ケネー研究　(6)　（昭和三三年、第一八回）

12 労働価値論の端緒――ウィリアム・ペティ『租税貢納論』公刊三〇〇年記念――　(4)　（昭和三七年、第二六回）

13 経済学と歴史意識　(5)　（昭和四〇年、第二九回）

14 カール・マルクス　(4)　（昭和四一年、第三〇回）

15 近代経済学百年の意義　(3)　（昭和四六年、第三五回）

16 リカードウ・シンポジウム　(3)　（昭和四七年、第三六回）

17 帝国主義論　(4)　（昭和四八年、第三七回）

18 限界革命百年をめぐって　(3)　（昭和四九年、第三八回）

19 レーニン・シンポジウム　(3)　（右に同じ）

20 アダム・スミス　(3)　（昭和五一年、第四〇回）

21 アダム・スミスとわれわれ（シンポジウム）(2)　（右に同じ）

22 エコノミックスとポリティカルエコノミー　(4)　（昭和五二年、第四一回）

23 近代日本の経済思想　(3)　（昭和五三年、第四二回）

24 プルードンとその周辺　(3)　（昭和五四年、第四三回）

Ⅶ 公開講演会

1 マルクス生誕一三五年、死後七〇年記念学術講演会（昭和二八年一〇月一〇日　東京大）

マルクス再生産論の展開　越村信三郎

マルクスにおける人間の問題　大河内一男

マルクスと現代の経済学　岸本誠二郎

2 ジョン・ステュアート・ミル 生誕一五〇年記念公開講演会
（昭和三一年一一月一日 同志社大）
J・S・ミルの生涯と業績　杉原 四郎
明治初期に及ぼしたミルの影響　堀 経夫
社会思想史上のミル　出口 勇蔵
ミルにおける経済学と社会学　大道安次郎

3 ケネー経済表二〇〇年記念公開講演会 （昭和三三年五月一〇日 立教大）
挨 拶　久保田明光
重農主義学説の階級的基盤　横山 正彦
ケネー経済表の諸表式　坂田 太郎

4 ケネー経済表二〇〇年記念公開講演会 （昭和三三年一一月一日 同志社大、理論経済学会と共催）
挨 拶　久保田明光
ケネー経済表初版の推定　渡辺 建
経済表の謎と経済学の使命　柴田 敬

5 マックス・ウェーバー生誕百年記念公開講演会 （昭和三九年一一月六日 大阪府立大、日本社会学会、土地制度史学会協賛）
開会の辞　堀 経夫
ウェーバーの方法論について　出口 勇蔵
ウェーバーにおける宗教社会学の問題　森 東吾

6 マルクス『資本論』刊行百年記念講演会 （昭和四二年一一月一〇日 早稲田大）
開会の辞　大塚金之助
『資本論』の生誕　佐藤金三郎
『資本論』とロシア　田中 真晴
『資本論』百年随想　内田 義彦

7 『国富論』二〇〇年記念公開講演会 （昭和五一年一一月五日 九州大）
アダム・スミスにおける人と物　出口 勇蔵
アダム・スミス——人文学と経済学　内田 義彦

8 河上 肇生誕百周年記念公開講演会 （昭和五四年九月二三日 同志社大、経済理論学会と共催）
開会の辞　杉山 忠平
日本経済学史における河上 肇　杉原 四郎

Ⅷ 外国人による特別講演

1 昭和二八年二月七日（同志社大） 第二回関西部会例会
Charles Woolsey Cole, French Mercantilism

2 昭和三二年一一月一六日 （関西学院大）第一六回大会
Ronald L. Meek, The Rise of Classical Sociology

3 昭和三八年五月二六日（神戸大） 関西部会大会
Hans H. Gerth, Max Weber Research in America

4 昭和四三年二月八日 （東京朝日新聞社講堂）
ルフェーヴル（H. Lefebvre）、マルクスの思想における「構造」の概念

5 昭和四四年五月二四日（甲南大）　関西部会と甲南大学経済学会との共催
クチンスキー（Jürgen Kuczynski）　マルクスと文学

6 昭和四九年一一月（名古屋大）　第三八回大会
ヴェントゥーリ（Franco Venturi）　スコットランド啓蒙とロシア

7 昭和五一年一一月七日（九州大）　第四〇回大会
Samuel Hollander, The *Wealth of Nations* and the Origins of Ricardo's New Theory of Profits

8 昭和五二年三月二二日（成城大）　関東部会例会
Ronald L. Meek, Adam Smith and Karl Marx

9 昭和五二年四月四日（京都大）　関西部会大会
Ronald L. Meek, Karl Marx and Piero Sraffa

10 昭和五三年四月三日（関西学院大）　関西部会大会
Andrew S. Skinner, Adam Smith: The Functions of Government

11 昭和五四年一一月一〇日（南山大）　第四三回大会
Paul E. Chamley, Steuart and Keynes

Ⅸ　経済学古典書展示会

1 第二回大会（昭和二五年一二月九日　京都大）
京都大学図書館所蔵貴重書一一二点の展示、展示目録は『経済学史学会十年史』に収録）

2 第三回大会（昭和二六年五月五日　東京大）
東京大学経済学部所蔵スミス蔵書のうち約二〇点の展示

3 第四回大会（昭和二六年一一月八―九日　関西学院大）
関西学院大学図書館および堀　経夫氏所蔵ロバート・オウエンおよびリカードウ派社会主義文献六二点の展示（展示目録は前掲『十年史』に収録）

4 第五回大会（昭和二七年五月三―四日　慶応義塾大）
慶応義塾大学所蔵（ほかに高橋誠一郎、寺尾琢磨、久保田明光氏所蔵を含む）人口学説関係五六点、東印度会社関係四五点の展示（展示目録は『十年史』に収録）

5 第六回大会（昭和二七年一一月八―九日　神戸大）
神戸大学所蔵経済学古典一一〇点余の展示（展示目録は『十年史』に収録）

6 第七回大会（昭和二八年五月二―三日　一橋大）
一橋大学所蔵カール・メンガーの著書・論文一一点、メンガー文庫から六六点、その他三点の展示（展示目録は『十年史』に収録）

7 第一七回大会（昭和三三年五月一〇―一一日　立教大）
重農学派古版本（ケネー、デュポン、ミラボー関係）二四点の展示（早稲田大、大原社研、横浜国立大、慶応義塾大、東京大、一橋大所蔵本、展示目録は『十年史』に収録）

8 第二九回大会（昭和四〇年九月二五―二六日　小樽商大）
シェル文庫・手塚文庫の一部展示（展示目録配布）

9 第三〇回大会（昭和四一年一一月一二―一三日　京都大）

京都大学図書館所蔵『資本論』を中心とするマルクス関係一三点の展示（展示目録配布）

10　第三一回大会（昭和四二年一一月一一―一二日　早稲田大）
マルクス関係二二点の展示（一橋大、慶応義塾大、東京大、早稲田大、関西大所蔵本、展示目録配布）

11　第三五回大会（昭和四六年一一月一三―一四日　明治学院大）
ロバート・オウエン生誕二〇〇年記念、三七点の展示（オウエン協会による展示、展示目録配布）

12　第三八回大会（昭和四九年一一月八―九日　名古屋大）
スコットランド啓蒙関係八一点の展示（展示目録配布）

X　経済学古典調査

経済学古典調査（「本邦における経済学の古典の調査および研究」）は、本学会を母体とする事業の一つとして、文部省科学研究費の交付を受けて実施された。代表者は久保田明光、事務局は早稲田大学に置かれた。これは国内に散在する経済学の西欧古典文献の所在を調査し、研究者の便宜を計ることを目的としたものである。第一期（昭和二七―二九年度）および第二期（昭和三九―四一年度）にわたって行なわれた。両期間を通じて、調査に参加したのは次の二五大学である。（数字は参加の期次を示す）

小樽商大（1・2）、東北大（1）、福島大（2）、東京大（1・2）、一橋大（1・2）、慶応義塾大（1・2）、早稲田大（1・2）、法政大〔含大原社研〕（1）、中央大（2）、明治大（2）、日本大（2）、立教大（2）、東京経済大（1）、横浜国立大（1）、名古屋大（1）、京都大（1・2）、関西大（2）、大阪市立大（1・2）、関西学院大（1）、神戸大（1・2）、広島大（2）、山口大（2）松山商大（2）、九州大（1）、長崎大（2）

現在、完成調査カード約四三、〇〇〇枚は早稲田大学に保管されている（照会先は早稲田大学教育学部研究室内　松田　寛）。なお、詳しくは、『経済学史学会十年史』（昭和三六年）、および『経済学史学会年報』第五号掲載の「『経済学古典調査』の現状とその利用について」（松田　寛）を参照。

XI　学会刊行物

一　論文集

『資本論』の成立（岩波書店、昭和四二年一一月、v、四二八、xiv頁）

序　文　　代表幹事　堀　経夫

第1部　『資本論』の思想史的背景

1　イギリス

リカード派社会主義者とマルクス　　遊部　久蔵

J・S・ミルとアイルランド問題　　高島　光郎

2　フランス

経済学批判体系の形成とシモンドゥ・ドゥ・シスモン

ディ　吉原　泰助
プルードンとマルクス　森川喜美雄
3　ドイツ
マルクスとヘーゲル　細見　英
ヘスとマルクス　山中　隆次
第2部　『資本論』形成の諸問題
1　一八四〇年代
『聖家族』の経済学的意義　服部　文男
労働疎外論と唯物史観　重田　晃一
2　一八五〇年代
『経済学批判要綱』における「資本と労働の交換」について　高木幸二郎
五〇年代マルクスの市民社会論　平田　清明
3　一八六〇年代
「経済学批判」体系と『資本論』　佐藤金三郎
一八六六年一月―一八六七年九月　杉原　四郎
第3部　『資本論』第一巻の反響　大塚金之助・杉山忠平
はじめに　良知　力
ドイツ　石川　郁男
ロシア　都築　忠七
イギリス　津田　内匠
フランス
あとがき　編集委員
遊部久蔵・杉原四郎・平田清明

英文レジュメ

『国富論』の成立（岩波書店、昭和五一年八月、xi、四二一、xx頁）

代表幹事　水田　洋

序
第Ⅰ部　思想史的序説
1　イギリス道徳哲学の系譜　水田　洋
2　スミスにおける有徳の人について　木崎喜代治
3　「スコットランド啓蒙」における「文明社会史」の成立　佐々木　武
4　『道徳感情論』と『国富論』　田中　正司
第Ⅱ部　経済学史的序説
1　『国富論』と重商主義　浜林　正夫
2　ジェームズ・ステュアート　和田　重司
3　チュルゴ　津田　内匠
第Ⅲ部　『国富論』の分析
1　『国富論』における労働価値論の成立　藤塚　知義
2　アダム・スミスの土地所有論　鈴木　亮
3　『国富論』における生産的労働と蓄積ファンド　羽鳥　卓也
4　アダム・スミスの信用論の展開とスコティッシュ・ナショナリズム　川島　信義
5　『国富論』における原始蓄積の把握について　小林　昇
6　『国富論』体系と国家認識　山崎　怜

第Ⅳ部　『国富論』以後

1　初期マルクスとスミス　遊部　久蔵

2　近代経済学とスミス　岡田　純一

3　近代日本黎明期のスミス　杉原　四郎

資　料

同時代の書評について　杉山　忠平

英文レジュメ

二　学会史

『日本における経済学史研究十年の歩み——経済学史学会十年史——』（日本学術会議第三部監修、経済学史学会十年史刊行会、昭和三六年五月、一三一頁）

三　経済学古典の飜刻

1　*The Economic Writings of Sir William Petty*, edited by C. H. Hull, 1899, 2 vols.,（昭和三〇年五月刊）

2　James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, 1767, 1st edition, 2 vols.（昭和三二年一一月刊）

3　Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, 1822 edition,（Works), with Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL.D. by Dugald Stewart.（昭和三四年一一月刊）

四　定期刊行物

『経済学史学会ニューズ』（第一号〔昭和三六年三月〕——第八号〔昭和四三年四月〕）（廃刊）

『経済学史学会年報』（第一号〔昭和三八年〕—第一七号〔昭和五四年一一月〕）

五　その他

「経済学史学会会員名簿」（昭和二九年以降）

六　部会関係

『経済学史学会関西部会通信』（関西部会事務局、第一号〔昭和三四年九月〕——第一二号〔昭和三八年七月〕）（廃刊）

『経済学史学会西南部会報』（西南部会事務局、第一号〔昭和三八年八月〕——第一〇号〔昭和四七年八月〕）（廃刊）

『経済学史学会西南部会通信』（西南部会事務局、第一号〔昭和五二年一一月〕）

XII　『年報』における学界展望（論文）リスト

第一号　（一九六三年）

重農学派　（渡辺輝雄　吉原泰助）

古典学派　（平瀬巳之吉　中村賢一郎）

初期社会主義　（水田　洋）

第二号（一九六四年）

重商主義　（杉山忠平）

マルクス経済学の形成（山中隆次　佐藤金三郎）

第三号（一九六五年）

Marx の思想史的研究　（服部文男）

近代経済学史研究——とくにマーシャル研究を中心に——（宮崎

義一）

第四号（一九六六年）

マックス・ウェーバー研究　（出口勇蔵）

古典派蓄積論の形成と発展　（羽鳥卓也）

貨幣・信用学説史の研究　（高木暢哉　中村広治）

第五号（一九六七年）

歴史学派　（小林　昇）

制度学派――ヴェブレン研究の動向――　（中山　大）

イギリス社会主義思想　（木村正身）

フランス社会主義思想　（野地洋行）

第六号（一九六八年）

マルクス経済学――とくに競争論研究について――　（遊部久蔵）

マルクス主義思想の継承と発展　（山口和男）

日本経済思想史――古典派経済学のわが国への導入と展開――　（真実一男　溝川喜一）

第七号（一九六九年）

ローザンヌ学派経済学　（松浦　保）

『資本論』一〇〇年とマルクス経済学　（種瀬　茂　松石勝彦）

第八号（一九七〇年）

レーニン研究の動向――その一局面について――　（松岡　保）

ケインズ経済学の学史的研究――その課題および方法を中心として――　（有田一郎）

第九号（一九七一年）

イギリス労働運動史上のロバート・オーエン――生誕二〇〇年を記念して――　（飯田　鼎）

新版「ヘーゲル復興」の動向――生誕二〇〇年をふりかえって――　（細見　英）

第一〇号（一九七二年）

Ricardo 研究　（中村広治）

近代経済学史研究――近代経済学一〇〇年――　（早坂　忠）

第一一号（一九七三年）

J・ミルおよびJ・S・ミル　（杉原四郎　福原行三）

リカードゥ研究における西欧と日本――リカードゥ・シンポジウム――

第一二号（一九七四年）

ユートピア思想　（縫田清二）

啓蒙期の社会思想　（浜林正夫）

第一三号（一九七五年）

帝国主義論の学説史的研究――ドイツ社会民主党を中心に――　（松岡利道）

第一四号（一九七六年）

アイアランド問題　（上野　格）

第一五号（一九七七年）

アダム・スミス研究の現状　（鈴木　亮　天羽康夫）

第一六号（一九七八年）

マルクス研究の新動向――経済学　（山田鋭夫）

マルクス研究の新動向――思想　（今村仁司）

第一七号（一九七九年）

XIII　声明書・訴え・要望書

1　警職法問題についての声明

（第一八回大会、昭和三三年一一月二日）

現在国会において審議中の警察官職務執行法改正案は基本的人権を侵害し学問・思想の自由および言論・出版の自由を圧迫するおそれがあるものとみとめられる。よってわれわれは同法案に反対の意を表明する。

2　大学管理法案反対声明

（第二六回大会、昭和三七年一一月一〇日）

学問研究の自由が、いかなる政治権力の介入にたいしても守られなければならぬことは、すべての研究者がゆずりえぬ大前提としているところであって、われわれもまた現在の時点において、あらためてこれを確認したいとおもう。したがってわれわれは、最近の中教審答申にもとづく大学管理の法制化にたいして、深い憂慮の念を表明し、大学の自治と学問の自由が、これによっていささかなりともおかされることがないように、当時者ならびに世論につよくうったえるものである。

3　アダム・スミス講義ノートについての訴え

（昭和三八年三月一九日）

ご存じのように、グラスゴウ大学では国富論刊行二百年を記念して決定版スミス全集の編集を企画しており、経済学史学会でもこれに協力することを申しあわせました。ところが、この全集にふくまれるはずのグラスゴウ大学講義ノート（新発見）の取得にあたって、重大な困難が生じ、このままでは全集の企画に致命的な影響をあたえることも、予想されるにいたりました。というのは、ノートの発見者ロージアン氏が、グラスゴウ大学への売却価格をせりあげついに大学としては購入を断念せざるをえぬところまで、きてしまったからです。

この場合、ロージアン氏は、値上げの理由として、日本のある大学をふくむいくつかの買手があらわれたことを、あげているそうです。スミス全集に協力を要請され、それを承諾した学史学会としては、この待望の全集が、こういう事情によって不完全なものとなるのを、黙視するわけにはいかないとおもいますし、まして、万一じっさいに日本の大学が、無意識にであれ、その原因となっているとすれば、われわれの努力によってこの不幸な事態を究明し解消させるべきではないかと思われます。われわれが、日本の文化財の国外流出を阻止したいと考えるように、グラスゴウ大学が、その誇りとする教授の講義ノートの国外流出を憂慮するのは、とうぜんであります。

しかもこの場合、ノートがグラスゴウ大学の手にはいれば、死蔵されることなく、全集のなかに公表されますが、国外に出れば、全集の完成が一頓挫するばかりでなく、文字どおり死蔵のおそれもなしとしません。

買手のなかのいわゆる日本の大学の、名称はあきらかになってい

ません。会員各位がご関係の諸大学について、この点をおしらべ下さり、万一、そのような事実がありましたら、学会事務局にご報告下さるとともに、全力をあげて阻止していただくよう、とくにおねがい申しあげるしだいです。

4　原子力潜水艦入港・核兵器開発反対声明

（第二八回大会、昭和三九年一一月七日）

原子力潜水艦入港問題および核兵器開発の最近の状況については、われわれ社会科学者も深刻な関心をよせているものであって、経済学史学会第二十八回総会は、この点にかんする日本学術会議および原子物理学者の声明をつよく支持し、政府の反省を要望する。

5　大学立法に対する反対声明

（昭和四四年六月一八日）

今日の大学紛争は、現代社会の在り方にふかくかかわっており、当面の事態を処理するだけで、解決される性質のものではない。

しかるに、政府は当面の事態の鎮静を求めて、臨時措置法の名のもとに、大学法を成立させようとしている。このような方策は、大学紛争の根本的解決にならないだけでなく、問題の根源をおおい隠し、わが国の学問・思想の自由に重大な危険をもたらすものと、いわざるをえない。

経済学史および社会思想史の研究に従事するわれわれは、なによりもまず、学問・思想の自由に関心をよせるものであり、会員の意志を結集して、大学立法への反対運動に参加したいと思う。

右、声明する。

6　社会資料センターおよび大学共同利用図書館の設立についての要望

（第三六回大会、昭和四七年一一月一一日、日本学術会議にたいして）

経済学史・社会思想史の研究にとって、原資料の確保は、もっとも基本的な前提でありますが、日本における文書館・図書館の現状は、つぎのような事情により、この前提条件をみたしているとはとうていいいがたいものであります。

1　日本における社会運動・経済思想関係の手稿・新聞・記録文書（非合法文書をふくむ）等の保存状態がきわめてわるく、この状態を改善するために、一昨年「社会資料センター」設立の勧告がなされたにもかかわらず、まだ実現の気運が見られない。

2　外国の研究のための古典的な諸資料（出版物をふくむ）については、第二次大戦末までの政治事情のために、収集におおきな欠陥があり（たとえば社会主義関係）、しかも図書館相互協力体制の不備のために、その不十分な資料でさえ、所在が不明で利用できない。

3　戦後の複写技術の発展により、おおくの複製版がでているが、いずれもきわめて高価であり、これをすべての個別大学図書館で購入することは、不可能である。しかも現在早急に購入しておかなければ、出版物の性格上、ほぼ永久に入手不能になるであろう。

以上のような障害を克服して、経済学史・社会思想史、さらに一般に社会科学における歴史的諸研究を促進するために、われわれは、日本学術会議が、社会資料センターについての勧告の実現に一

層の努力を払われること、およびそれと結合して大学共同利用図書館の設立について積極的に検討されることを、要望します。なお後者については、あらためて学会としての原案を提出する予定です。

XIV 国際学会派遣

1 国際経済学会連合会議（一九五三年九月、ローマ） 久保田明光㊥（㊥は日本学術会議による国費派遣を示す）

2 第二五回国際東洋学者会議（一九六〇年八月一〇日―一七日、モスクワ） 守屋典郎㊥

3 第一回国際思想史会議（International Society for the History of Ideas）（一九六〇年八月三一日―九月三日、ケンブリッジ大） 出口勇蔵、遊部久蔵

4 経済史学会（Economic History Society）大会（一九六一年三月三〇日―四月二日、シェフィールド大） 水田 洋㊥

5 第二回国際経済学会連合（IEA）会議（一九六二年八月三〇日―九月六日、ウィーン） 宮崎義一㊥

6 アメリカ計量経済学会議・アメリカ経済学会大会（一九六三年一二月二七日―二九日、ボストン） 越村信二郎㊥

7 第二回啓蒙思想国際会議（一九六七年八月二二日―三一日、セントアンドルーズ） 平田清明㊥

8 経済史学会大会（一九六九年四月一一日―一三日、ダラム） 浜林正夫㊥

9 第三回経済思想史会議（History of Economic Thought Conference）（一九七〇年一月三―五日、シェフィールド大） 水田 洋㊥

10 第五回国際経済史会議（一九七〇年八月一〇日―一四日、レニングラード） 杉山忠平 報告論題「日本近代化期における経済思想」

11 第六回労働運動史家国際会議（（Internationale Tagung der Historiker der Arbeiterbewegung）（一九七〇年九月一五日―一九日、リンツ） 山口和男㊥

12 第三回啓蒙思想国際会議（一九七一年七月一五日―二四日、ナンシー大） 津田内匠㊥

13 第七回労働運動史家国際会議（一九七一年九月一四日―一八日、リンツ） 飯田 鼎㊥

14 第五回経済思想史会議（一九七二年九月四日―七日、バーミンガム大） 溝川喜一㊥

15 ミル父子記念学会（一九七三年五月三日―五日、トロント大） 杉原四郎㊥

16 第四回啓蒙思想国際会議（一九七四年七月一三日―一九日、エール大） 水田 洋 報告論題「スコットランド啓蒙の定義のために」

17 第七回経済思想史会議（一九七四年九月一六日―一八日、L.S.E.） 杉山忠平

18 『国富論』二〇〇年記念シンポジウム（一九七六年四月二日―五日、グラスゴウ大） 水田 洋㊥

19　第五回経済学史学会（History of Economics Society）
年次会議（一九七八年五月二四日―二七日、トロント大）
岡田純一（学）

20　第一二回経済思想史会議（一九七九年九月一二日―一四日、バース大）　真実一男（学）

なおこのほか、たとえば、次のような会員による報告がある。

木村正身「日本におけるラスキン研究」（ラスキン記念会議　コニストン　イギリス、一九六九年三月）、松浦　保「日本における限界主義」（限界革命国際会議、ベラジオ、一九七一年八月）、水田　洋「アダム・スミスとカラス事件」（第三回啓蒙思想国際会議、ナンシー大、一九七一年七月）、同「日本における経済思想史の教育」（第六回経済思想史会議、ブリストル、一九七三年九月）、同「スコットランド啓蒙におけるふたりのアダム」（第五回啓蒙思想国際会議、ピザ大、一九七九年八月）

XV　部会活動

1　関東部会

関東部会の経験

関東部会は昭和二六年一〇月に発足して現在に及ぶ。発足にあたっては当時の新世代の提唱にもとづいて議論をつくし、また準備として三回の研究会を持った。以後、当部会の歴史はほぼ部会研究会の歴史に尽きるが、その詳細については後続の記事のほかに多くをしるしがたい。『十年の歩み』、『ニューズ』、『年報』に記載するところ以外にも、学会事務局（部会事務局は存在しない）で保管してきた年々の研究会記録は不揃いながら残されているとはいえ、行事そのものが概して簡素であった。もともと、当部会に属する地域は広大で、北は北海道から西は石川・長野・静岡およびときとして愛知の諸県に及ぶにいたり、事実上東日本部会ともいうべきものとなったので、部会としての意味があいまい化し、専門的で密度の濃い個別研究を中心とする集まりを反覆的かつ規則的に持ちうる条件を欠いていた。しかも、当部会が発足以来現実にカヴァーしてきた地域の拡大（ないしときとしては縮小）の事情と過程とを正確に跡づけることが、現時点では不可能である。当初は研究会の案内状を原則としては関東の一都六県にしか送っていなかったようであり、のちにはこれを、関東以外の諸大学中の特定の部会会員にのみ――その大学での連絡者と見立てて――拡げて送っていた時期もある。本年東北部会が新設されたが、地域の限定の問題は今後もなお残存するであろう。

当部会は年々幹事校をさまざまなかたちで依嘱し、実際には京浜（葉）地区の各大学で研究会を開いて、これを部会、例会、部会大会、研究大会等々とも称した。それらの業績が蓄積されたことはたしかであるが、部会として欠陥とすべき点もまた多い。研究会出席者数が学会幹事らを加えてなお寥々だった期間があるし、昭和四〇・四四の両年には研究会が開かれなかったし、四一年九月と四二年四月との研究会の記事は『年報』に掲載されなかった。また、案内状に対する出席予定の回答が低率にすぎるため、経費節約の目的から往復ハガキでの案内をやめるようになったが、現在ではこの措置に伴う

不便を感じている。

当部会のように広大な地域と多数の（研究対象をことにする）会員とをカヴァーする部会は、もともと上述のように大会に準ずる組織や経費やポピュラーな共通論題などを用意しなければ、つまり半日単位の小研究会としては、有効に成立しがたいものであった。昭和三八年六月の研究会が、マックス・ウェーバーを論題とし、一日の時間をとり、非会員にも報告を依頼して、参加者八〇名をこえた例がある（もっとも、昭和四三年五月の通常の部会に九〇名の出席を得たという例外もある）。しかし部会には財政・組織・運営上の限界があるので、それが当部会にとっては制約となった。昭和三七年六月に参加者九名、同九月に一四名、四三年一月に一五名、四六年一二月に一八名という記録があり、四八年以降、研究会はおのずから年一回の開催となった。一般に当部会の運営には困難な時期が多く、それらの時期は、経済学史学会自体の存在意義への信頼にもとづく少数の会員の継続的努力によって凌がれたものといえよう。

最近、若い世代の会員の増加に伴い、研究会は活発になっている。五三年の出席者三四名、五四年六七名、五五年五〇名である。将来への見通しは好望であり、当部会の運営者はとくに積極的な対応を迫られている。

なお、『年報』創刊号の「部会通信」欄に故遊部久蔵会員の書いた「関東部会の回顧と展望」は、当部会の歴史の中間記録として、はじめに掲げた諸文献とともに重要な文章である。

関東部会研究報告

昭和二七年六月一四日　東京大

経済学における古典と近代　杉本栄一（一橋大）

昭和二七年九月二七日　法政大

マックス・ウェーバー――方法論争について――　安藤英治（城西大）

昭和二七年一〇月二五日　中央大

二つの経済学――その概念構成――　平瀬巳之吉（専修大）

昭和二七年一二月二〇日　早稲田大

1　トマス・モアー「ユートピア」における経済思想　松田寛（早稲田大）

2　ケネー「経済表」の均衡体系の撹乱について　久保田明光（早稲田大）

昭和二八年二月七日　立教大

経済学方法論について　宮川　実（立教大）

昭和二八年四月一日　慶応義塾大

西欧経済思想受容の在り方――わが国における合理思想の渕源――　野村兼太郎（慶応義塾大）

昭和二八年六月二〇日　専修大

リカァドウ経済学の問題点　玉野井芳郎（東京大）

昭和二八年九月一二日　中央大

価値形態と交換過程　中野　正（法政大）

昭和二八年一二月五日　専修大

内田義彦著『経済学の生誕』合評（民主主義科学者協会と共催）

宮崎犀一（国学院大）　吉沢芳樹（東京大）

昭和二九年二月一三日　中央大

マルサスとリカァドオ　玉野井芳郎（東京大）
昭和二九年七月九日　中央大
高島善哉著『社会科学入門』をめぐって　高島善哉氏（一橋大）を囲む座談会
昭和二九年九月二五日　中央大
再生産表式と恐慌　高木幸二郎（中央大）
昭和二九年一〇月二三日　東京大
リカァドオ経済学の社会性　戸田武雄（静岡大）
昭和二九年一二月二三日　早稲田大
スミス研究の問題点について　高島善哉（一橋大）
昭和三〇年六月四日　法政大
リカァドオ経済学の生成と労働価値説との関連　時永　淑（法政大）
昭和三〇年七月二日　慶応義塾大
リカァドオの議会改革論と経済学の分析視角　吉沢芳樹（東京大）
昭和三〇年九月一七日　法政大
シュンペーター『経済分析の歴史』の方法論について　山田雄三（一橋大）
昭和三〇年一〇月二二日　専修大
経済学におけるイデアル・ティプス概念について　安藤英治（成蹊大）
昭和三一年六月三〇日　専修大
1　景気変動理論の理論構造と十九世紀後半の西欧経済　城座和夫（都立大）
2　マルクス恐慌論の再検討　堀江忠男（早稲田大）
昭和三一年九月二九日　専修大
シュンペーターの景気変動論について――特に恐慌現象に関連して――　伊達邦春（早稲田大）
昭和三一年一一月二〇日　専修大
恐慌論研究の方法について　石原忠男（中央大）
昭和三二年六月二二日　慶応義塾大
R・ミークの古典学派研究について　吉田洋一（専修大）
昭和三二年一〇月二六日　法政大
ミーク著『労働価値説の研究』について　尾形　憲（法政大）
昭和三三年四月五日　一橋如水会館
国富把握の体系としてのケネーの経済表　渡辺輝雄（東京経済大）
昭和三四年九月二六日　東京大
労働価値学説における「生産」概念の二重性と微視的方法の併用の問題　大熊信行（神奈川大）
昭和三五年三月二六日　東京大
欧州から帰って　水田　洋（名古屋大）
昭和三五年一〇月一五日　立教大
アベ・ニコラ・ボードー「経済表の説明」の考究　吉原泰助（東京大）
昭和三五年一二月三日　立教大
ヨーロッパから帰りて　渡辺輝雄（東京経済大）

昭和三六年二月一八日　立教大
恐慌論史の再検討――ヒルファディングをめぐって――　高山満（東京経済大）
昭和三六年七月八日　一橋如水会館
ベルンシュタインと帝国主義論史――方法論的一考察――　熊谷一男（一橋大）
昭和三六年九月二八日　一橋如水会館
フンボルト大学一五〇年祭　大塚金之助（一橋大）
昭和三七年一月二〇日　一橋如水会館
最近のポーランド経済学界について　石原忠男（中央大）
昭和三七年六月二五日　明治大
「国際経済史学会」に出席して　水田　洋（名古屋大）
昭和三七年九月二八日　明治大
ウィリアム・ペティをめぐって　松川七郎（一橋大）　高野利治（関東学院大）
昭和三八年六月二日　第一回研究大会　慶応義塾大
1　マックス・ウェーバーの人間と学問――マリアンネ夫人による伝記をめぐって　安藤英治（成蹊大）
2　マックス・ウェーバーの宗教社会学の方法について　内田芳明（神奈川大）
3　G・D・Sの編纂者としてのマックス・ウェーバー　住谷一彦（立教大）
昭和三九年六月六日　第二回研究大会　早稲田大
1　イギリス革命とジョン・ロック　浜林正夫（小樽商科大）
2　ロックにおける政治と経済　平井俊彦（京都大）
昭和四一年三月二六日　国学院大
アダム・スミスにおける道徳と経済　星野彰男（関東学院大）
昭和四一年五月二一日　研究大会　国学院大
1　イギリス留学雑感　上野　格（成城大）
2　ホブソンの独占論　磯部浩一（明治学院大）
3　『経済学批判要綱』と『資本論』との論理的連繋　平田清明（名古屋大）
昭和四一年九月二四日　部会大会　関東学院大
1　ウィリアム・タムスンの女性解放思想　鎌田武治（横浜国立大）
2　ロバート・オーウェンとウィリアム・ゴドウィン　白井厚（慶応義塾大）
3　フリードリッヒ・リストにおける「土地整理」の観念について　小林　昇（立教大）
昭和四二年四月二二日　関東学院大
1　ロック自然法思想の再検討――アブラムズの試論に関連させて――　田中正司（横浜市立大）
2　ルソーの『社会契約論』の理論構造と資本主義　野地洋行（慶応義塾大）
昭和四二年六月二四日　東京経済大
1　マックス・ウェーバーの「プラーグマ」思想とその周辺　内田芳明（神奈川大）
2　ミルとマルクス――アイルランド問題をめぐって――　高

島光郎（横浜国立大）

昭和四二年九月三〇日　東京経済大

1　ジョン・ロックの初期思想――“Two Tracts”を中心に――　中村恒矩（東京経済大）

2　カンティロンの経済表の基本的性格　中村賢一郎（明治大）

昭和四三年一月二七日　東京経済大

シスモンディについて　吉田静一（神奈川大）

昭和四三年五月一八日　上智大

1　歴史理論としての市民社会論　平田清明（名古屋大）

予定討論者　大野精三郎（一橋大）

2　イタリアにおけるローザンヌ学派経済学　松浦　保（慶応義塾大）

予定討論者　上原一男（早稲田大）

昭和四三年一〇月一九日　上智大

宗教戦争期における市民社会のイデオロギー――絶対主義成立期における政策主体――　西川　潤（早稲田大）

昭和四五年五月二三日　専修大

共通論題　ジョン・ロック研究

1　ロックの「市民社会」論――ロックにおける政治と経済――　田中正司（横浜市立大）

2　ロックの経済思想とその周辺　浜林正夫（東京教育大）

昭和四五年一〇月一七日　国学院大

共通論題　近代経済学一〇〇年の意義

1　マーシャルと新古典派　柏崎利之輔（早稲田大）

2　効用分析の学史的意義　中村賢一郎（明治大）

昭和四六年五月二二日　国学院大

共通論題　近代経済学一〇〇年の意義

1　近代経済学におけるワルラスとマーシャル　柏崎利之輔（早稲田大）

2　完全競争に対するシュムペーターの評価の変遷について　玉野井芳郎（東京大）

3　日本における「近代経済学」　早坂　忠（東京大）

昭和四六年一二月一八日　文京女子短期大

1　J・S・ミルとベンサム――ベンサム功利の概念とその方法をめぐって――　四野宮三郎（高崎経済大）

2　経済学クラブとイギリス古典経済学の展開　藤塚知義（武蔵大）

昭和四七年五月二七日　文京女子短期大

経済学史研究の新動向――限界革命百年記念国際会議に出席して――　松浦　保（慶応義塾大）

昭和四七年一二月二日　明治大

1　マックス・ウェーバーと近代　安藤英治（成蹊大）

2　初期マルクスをめぐって　良知　力（一橋大）

昭和四八年一〇月一三日　一橋大

1　マカロックとJ・S・ミル――土地所有論をめぐって――　高島光郎（横浜国立大）

2　日本における近代経済学導入史について　早坂　忠（東京大）

昭和四九年六月一日　専修大

1　古典派と新古典派――地代論の観点から――　美濃口武雄（一橋大）

2　限界主義・古典学派・マルクス――ウィンチの報告にふれて――　宮崎犀一（中央大）

昭和五〇年六月一四日　東京都立大

1　スミス価値論の謎と市民社会の思想体質　和田重司（中央大）

2　『金融資本論』体系における恐慌＝景気循環論――その位置と構造――　高山　満（東京経済大）

昭和五一年五月二二日　部会大会　成城大

1　アダム・スミスの傲慢論と力の観点　星野彰男（関東学院大）

2　スミス経済学にたいする最近の研究動向――S・ホランダーの新著を中心に――　岡田純一（早稲田大）

昭和五二年三月二二日　成城大

Adam Smith and Karl Marx　Ronald L. Meek

昭和五二年六月一八日　中央大

共通論題　思想形成における国際的契機

1　オウエンの思想形成とアメリカ　土方直史（中央大）　コメント　飯田　鼎（慶応義塾大）

2　トマス・ジェファスンとフランス重農主義　白井　厚（慶応義塾大）　コメント　津田内匠（一橋大）

昭和五三年六月一〇日　横浜市立大

1　ローダーデールの経済政策論　服部正治（立教大）

2　ケネーとルソー――その統治論の比較検討――　高橋　誠（中央大）

3　エドワード・カーペンター、人と思想　都築忠七（一橋大）

昭和五四年六月二日　法政大

1　コンディヤック経済理論の基本構成　太田一広（早稲田大）

代表討論　津田内匠（一橋大）

2　リカードゥ研究の一焦点――『原理』生成過程の解釈をめぐって――　千賀重義（横浜市立大）

2　関西部会

関西部会の回顧と展望

経済学史学会関西部会は一九五二（昭二七）年秋の経済学史学会第六回大会において関東部会と並んでその設立を承認され、同年十二月十三日関西学院大学ベーツ館において第一回の例会を開いた。この時いらい例会は一度の中止もなく春秋冬と年三回ずつ開かれ、この九月で第八四回目を迎えた。学会十周年の前年（一九五九）「学会の充実策が真剣に考えられる必要」から「身近かな情報交換を基本とし」、「本格的な学会の機関誌刊行を促進するために」、『関西部会通信』（『部会通信』創刊号参照）が年三回発行されることになった。学会会則第三条第四項（機関誌の発行）が実現される運びとなった一九六三（昭和三八）年は部会にとって転機を画する年であった。一つには、学会の公式の機関誌（『年報』）が創刊され、これを機に『部会通信』が第十二号（同年七月刊）をもって『年報』へ発展的に解消し廃刊となったことである。今この『通信』

を読み返すとき、これの編集・刊行に結集した部会会員の努力には並々ならぬものがあったことが分り、また同時にこの『通信』に『年報』の原型を見出す思いがする。二つには、同年から大会は年一回のみ秋に開催されることになり、関西部会としてはこれに対応するため従来六月に開いていた例会を五月に繰り上げ、「準大会」ないしは「部会研究大会」として学会規模の拡大に伴う粗さを部会で補なおうとする努力がなされたことである。現在の部会大会はここにその起源をもつ。従来部会例会は京阪神三地区を単純に巡回して開催されていたが、この時いらい開催地区の単純なローテーションはその適用を部会大会にのみ限定し、他の例会は続けて同一地区では開かないという方式が採られている。一九六三年・六四年・六五年の例会は表1のようなローテーションで開かれた。したがって、八〇年・八一年・八二年については表2のようになる。

表 1

	(1月)	(5月)	(9月)
'63	京都	**神戸**	大阪
'64	神戸	**大阪**	京都
'65	大阪	**京都**	神戸

(太字は部会大会開催地区)

表 2

'80	大阪	**京都**	神戸
'81	京都	**神戸**	大阪
'82	神戸	**大阪**	京都

一九五八(昭和三三)年六月の第一七回例会で、創立いらい部会発展に鋭意力を注いできた出口勇蔵(京都地区)、小谷義次(大阪地区)、久保芳和(神戸地区)幹事が、林治一(神戸地区)、相見志郎(京都地区)、杉原四郎(大阪地区)幹事に交替し、同時に事務局も関西学院大学から関西大学に移され、以後幹事および事務局担当の任期は二年ということに決められている。

一九七四(昭四九)年、前年十月の第六三回の部会報告要旨が『年報』に掲載されることになった。これ以来、前年九月例会の要旨、その年の一月および五月例会の要旨がその年度の『年報』に掲載されている。

さて、現在、関西部会は近畿二府五県のほかに愛知、岡山、徳島、愛媛、石川、富山、鳥取の各大学・研究機関所属の会員(約二三〇名、一九六三年には一三一名であった)より成り立っている。そして毎年三回(一月、五月、九月)京阪神地区に開催地を前表のようにもち回っている。通常一月と九月の例会は土曜日の午後に開かれ、ほぼ二つの研究報告が行われ、五月の例会は部会大会として土曜日一日を充て、自由論題のほかに時にはシンポジューム、時には海外研究者による講演などが行われている。

部会創立いらいの研究報告を中心とした行事などの題目については後出の「関西部会研究報告」を参照して頂くこととして、この二八年間を顧みるとき、部会記録から読み取れることはほぼ次のようであろう。一九五九(昭三四)年ないし一九六三(昭三八)年までの七〜十一年間は部会の成立と成長への努力がなされた時期であって、研究報告ののち毎回必ずと言ってよい程に、学会および部会運営などについての討議が出席者によって行われた。これに続く一九七三(昭和四八)年までの約十年間は実質的充実への努力の期間であって、例会は部会大会を中心に動いていた。この時期の特徴は部

会大会には常に共通論題が設定されていたことに見られる。ではそれ以降現在に至るまでについてはどうか。敢えて言えば多様化の時期である。部会大会では必ずしも共通論題が設定されることは無くなった。自由論題だけで終始したり、既述のように海外研究者の講演が催されたりした。しかし共通論題が皆無になったわけではなく、例えば第七一回の例会では『国富論』出版二百年を記念して、シンポジュームが催された。

創立いらいの部会についてなお付言すべきことは、真摯な研究報告が常に「アト・ホーム」な雰囲気の中で行われてきたということ、および「誰が部会幹事をつとめても、またどの大学が当番校をひき受けてもそのために特別の労力や経済的負担のかからないような配慮」（『通信』一二号）がなされてきたということであろう。しかし部会も三十年近く経過するとその変容を免かれないのではなかろうか。現在の幹事（神戸地区＝上宮正一郎・大阪地区＝竹本洋・京都地区・葛西孝平）で開かれた二回の部会幹事会でしばしば話題となったことは、一つには最近、実のある討論が不足がちになってきたこと、二つには報告者の選定が限られた情報に頼らざるを得なくなってきたこと（それゆえに近畿・中京以外からの積極的な報告の申し出を期待したい）、三つには部会を盛り上げようとするならば当番校および幹事の経済的負担が必ずしも軽くはなくなってきたこと、そして最後には、幹事交替の承認は部会大会でなさるべきではないかということである。いずれにしろ、部会三十周年頃を機に一度部会のあり方について、反省と積極的提言のための会員による討議が必要ではなかろうか。

関西部会研究報告

第一回（昭和二七年一二月一三日　関西学院大）
J. S. Mill の経済政策について　福原行三（浪速大）

第二回（昭和二八年二月七日　同志社大）
French Mercantilism　Charles Woolsey Cole

第三回（昭和二八年六月二〇日　大阪市立大）
1　墺太利学派生成期における若干の方法的問題　林　治一（神戸大）
2　マブリ研究　田中真晴（京都大）

第四回（昭和二八年九月二六日　立命館大）
1　フォイエルバッハと市民革命　平井俊彦（京都大）
2　商品の端緒的二重性　梯　明秀（立命館大）

第五回（昭和二九年二月二〇日　神戸大）
1　『資本論』における利潤率についての一考察　和田貞夫（浪速大）
2　トーマス社会論の存在論的基礎　野尻武敏（神戸大）

第六回（昭和二九年六月二六日　大阪女子大）
1　経済学史の対象と課題　白杉庄一郎（滋賀大）
2　経済学史の方法　出口勇蔵（京都大）

第七回（昭和二九年九月二五日　京都大）
共通論題　経済学史の研究方法（シンポジウム）
1　島津亮二（京都大）
2　林　治一（神戸大）
3　相沢秀一（大阪市立大）

第八回（昭和三〇年二月二六日　関西学院大）
1　ミルトンの社会思想　豆本　薫（滋賀大）
2　マンデヴィルとスミス　田中敏弘（関西学院大）
第九回（昭和三〇年六月一八日　関西大）
リカァドウ理論の性格　松尾　博（滋賀大）
第一〇回（昭和三〇年一〇月一日　同志社大）
初期重商主義についての一考察　白杉庄一郎（滋賀大）
第一一回（昭和三一年一月二八日　甲南大）
スミスの富裕進歩論について　宮内　博（関西学院大）
第一二回（昭和三一年六月三〇日　大阪市立大）
リカアドウの再生産論　入江　奨（松山商科大）
第一三回（昭和三一年九月二九日　京都大）
資本蓄積及び恐慌にかんするリカアドウの理論について　松田弘三（立命館大）
第一四回（昭和三二年二月一六日　神戸大）
堀　経夫博士還暦記念論文集『古典派経済学の研究』について（書評）　行沢健三（関西学院大）
第一五回（昭和三二年九月二八日　大阪女子大）
ミーク『労働価値説研究』について
1　アダム・スミス（第二章）を中心として　田中真晴（京都大）
2　第三章以降　宮本義男（和歌山大）
第一六回（昭和三三年三月二二日　立命館大）
クリフ・レスリーの経済学方法論――イギリス歴史学派の一研究――　岸田　理（愛知学院大）
第一七回（昭和三三年六月二八日　甲南大）
リカアドウの価値論と分配論との関係についての一考察　中村一雄（神戸大）
第一八回（昭和三三年九月二七日　関西大）
初期マルクスの一考察――経済学批判への端緒としての「ジェームズ・ミル評注」を中心として――　重田晃一（関西大）
第一九回（昭和三四年一月三一日　同志社大）
重商主義についての一つの問題――ジョン・ウイラーを中心として――　相見志郎（同志社大）
第二〇回（昭和三四年六月二七日　神戸商科大）
経済学史の方法について　高木正雄（神戸商科大）
第二一回（昭和三四年九月二六日　大阪府立大）
1　真実一男著『機械と失業』を読んで　豊倉三子雄（関西学院大）
2　豊倉三子雄著『古典派恐慌論』を読んで　溝川喜一（甲南大）
第二二回（昭和三五年一月三〇日　滋賀大）
1　特別剰余価値と虚偽の社会的価値　白杉庄一郎（滋賀大）
2　最近のヨーロッパ経済学界事情　水田　洋（名古屋大）
第二三回（昭和三五年六月二五日　神戸大）
トレンズの価値論について　南方寛一（神戸大）
第二四回（昭和三五年一〇月一日　桃山学院大）
明治末期の米穀関税論争　梅津和郎（大阪外国語大）

第二五回（昭和三六年一月二八日　立命館大）

1　商品論の展開方法について――宇野教授の所説によせて――
　岡崎栄松（立命館大）

2　ヒストリ・オヴ・アイディアの第一回国際学会に出席して
　出口勇蔵（京都大）

第二六回（昭和三六年六月二四日　甲南大）

A・H・ラヂーシチェフ「ペテルブルグよりモスクワへの旅」
　松田　勇（大阪市青少年問題協議会）

第二七回（昭和三六年九月三〇日　大阪市立大）

1　ジェームズ・ミルの初期の経済学について――『商業擁護論』における社会繁栄論と清貧論を中心に――　林　登良雄（竜谷大）

2　フランスの印象（スライド上映）　河野健二（京都大）

第二八回（昭和三七年一月二七日　京都大）

1　ケネー経済表の分析　平田清明（名古屋大）

2　『ミル評註』と『経哲手稿』細見　英（立命館大）

第二九回（昭和三七年六月三〇日　関西学院大）

1　古典派賃金論　藤岡孝四郎（大阪府立大）

2　Economic History Society 大会に出席して（国際学会出席報告）　水田　洋（名古屋大）

第三〇回（昭和三七年九月二二日　桃山学院大）

マルサスの資本蓄積と恐慌　橋本比登志（関西学院大）

第三一回（昭和三八年一月二六日　同志社大）

使用価値の捨象について――岡崎栄松氏による白杉教授批判の検討――　吉田茂芳（竜谷大）

第三二回（昭和三八年五月二六日　神戸大）

1　E. G. Wakefield の資本蓄積論――かれの古典学派への寄与についての一論――　保坂直達（神戸大）

2　ゴッドウィンの古代ローマ的観念　大久保嘉三（大阪学院大）

3　アメリカにおけるマックス・ウェーバー研究（Max Weber Research in America）（講演）
　Hans H. Gerth（ウィスコンシン大）

第三三回（昭和三八年九月二八日　大阪外国語大）

1　J・S・ミルの財産論についての一考察　松山昌司（南山大）

2　わが国の古典派経済学研究史について　杉原四郎（関西大）

第三四回（昭和三九年一月二五日　神戸商科大）

1　ナロードニキのロシア資本主義没落論――ヴォロンツオフのばあい――　松岡　保（京都大）

2　マーシャルにおける生物学的概念　南方寛一（神戸大）

第三五回（昭和三九年五月三一日　関西大）

共通論題　一九世紀末のイギリス経済思想をめぐって

1　経済学『革新』期における連続的要因と非連続的要因――W・S・ジェヴォンズについて――　入江　奨（松山商科大）

2　マーシャルにおける経済成長観　菱山　泉（京都大）

3　ウイリアム・モリスの社会主義論　木村正身（香川大）

第三六回（昭和三九年九月二六日　滋賀大）

1 『国富論』における政策分析ノート　和田重司（大阪経済大）
2 景気分析の基本問題――一つの学史的・比較論的考察――　永友育雄（桃山学院大）

第三七回（昭和四〇年一月二三日　桃山学院大）
1 マーシャル外部経済論について　斧田好雄（関西学院大）
2 ヴェブレン経済学の思想的背景　中山　大（甲南大）

第三八回（昭和四〇年六月一三日　京都大）
共通論題　各国におけるイギリス古典学派の導入と展開
1 日本におけるスミス　山崎　怜（香川大）
2 日本におけるリカード　真実一男（大阪市立大）
3 ドイツにおけるイギリス古典学派の導入と展開　山口和男（甲南大）・細見　英（立命館大）
4 アメリカにおけるイギリス古典学派の導入と展開　三辺清一郎（桃山学院大）
5 フランスにおけるイギリス古典学派の導入と展開　溝川喜一（京都大）
討論　司会者　岸本誠二郎・杉原四郎・出口勇蔵・水田　洋

第三九回（昭和四〇年一一月二七日　甲南大）
1 一九世紀アメリカ経済学における保守と革新　久保芳和（関西学院大）
2 学史研究の一動向――原蓄と重商主義論　河野健二（京都大）

第四〇回（昭和四一年一月二九日　立命館大）
1 プレハーノフの著作刊行史と研究史について　田中真晴（京都大）
2 宇野弘蔵教授の『原理論』とくに『流通論』の方法について　佐藤金三郎（大阪市立大）

第四一回（昭和四一年五月二八日　関西学院大）
共通論題　マルクスと諸思想の交錯
1 プルードンとマルクス　坂本慶一（竜谷大）
2 ボェーム・バヴェルクとマルクス　林　治一（神戸大）
3 ヴェブレンとマルクス　松尾　博（滋賀大）
総括　出口勇蔵（京都大）

第四二回（昭和四一年九月一七日　大阪経済大）
1 労働力範疇の吟味――形成史的に　高橋正立（竜谷大）
2 マルサス『人口論』における労働ファンド論　羽鳥卓也（岡山大）

第四三回（昭和四二年一月二八日　神戸商科大）
1 マックス・ウェーバーにおける合理性の問題　大林信治（神戸商科大）
2 トマス・アクィナスによる私有制基礎づけの論拠について　野尻武敏（神戸大）

第四四回（昭和四二年五月二七日　桃山学院大）
共通論題　現代マルクス主義の思想史的背景
1 後期マルクス研究の現状と問題点　杉原四郎（関西大）
2 ドイツ・マルクス主義　ベルンシュタイン　久松俊一（京都大）

ローザ・ルクセンブルク　竹本信弘（京都大）

3　ロシア・マルクス主義　田中真晴（京都大）

総合討論　司会者　河野健二（京都大）・羽鳥卓也（岡山大）

第四五回（昭和四二年九月二三日　竜谷大）

1　マルクスの資本蓄積論の形成について　大津定美（竜谷大）

2　貨幣本質論の一考察――ベンディクセンの名目主義的貨幣理論を中心に――　三上正之（大阪産業大）

第四六回（昭和四三年一月二七日　関西大）

1　経済思想家としてのバークリー――「バークリー論争」をめぐって――　戒田郁夫（関西大）

2　合評　経済学史学会編『資本論の成立』

問題提起者　平井俊彦（京都大）・宮本義男（和歌山大）

第四七回（昭和四三年五月二五日　同志社大）

1　スミス研究の一視点――社会主義の立場より――　見野貞夫（近畿大）

2　マルクスにおける資本回転論の生成――『要綱』の流動資本・固定資本をめぐって――　山田鋭夫（名古屋大）

共通論題　明治期の社会経済思想

司会　河野健二（京都大）

3　田中卯吉の資本主義論　溝川喜一（京都大）

4　社会政策学会の成立についての一考察――金井・桑田・高野を中心に――　坂本武人（同志社女子大）

5　明治期の人口思想　市原亮平（関西大）

第四八回（昭和四三年九月二八日　神戸大）

1　ヘンリー・ジョージの地代論　山嵜義三郎（神戸大）

2　リカードの資本理論　森　茂也（南山大）

第四九回（昭和四四年二月一日　立命館大）

シュンペーター体系の再検討　浜崎正規（立命館大）

（なお、次に予定されていた　田川恒夫会員（京都大）の報告「オーストリア・マルクス主義の民族理論――オットー・バウアーを中心として」は行なわれず、同会員が「大学問題」について問題提起を行ない、討論会に切りかえられた。）

第五〇回（昭和四四年五月三一日　甲南大）

共通論題　経済学史・社会思想史における一九三〇年代

1　問題提起　水田　洋（名古屋大）

2　マルクス経済学における一九三〇年代　細見　英（立命館大）

3　近代経済学における一九三〇年代　永友育雄（桃山学院大）

討論・総括　司会者　岸本誠二郎（国学院大）・田中真晴（京都大）

第五一回（昭和四四年一〇月二五日　大阪府立大）

1　レオン・ワルラスの土地国有論　立平雄彦（大阪府立大）

2　資本論における賃労働分析と国家　和田重司（大阪経済大）

第五二回（昭和四五年二月二一日　神戸大）

1　ヒルデブラントの価値論　橋本昭一（関西大）

2　リカードの価値論と分配論　南方寛一（神戸大）

第五三回（昭和四五年五月三〇日　大阪府立大）

1　価値論の再検討――リカード的価値理論とワルラス的価値理

論――　服部容教（大阪府立大）

共通論題　海外における経済学史研究

2　ボルドー大学――J・B・セー紀行など――　橋本比登志（四国学院大）

3　ケンブリッジ大学――最近の動向など　菱山　泉（京都大）

4　モスクワML研究所――ME遺稿の出版など――　佐藤金三郎（大阪市立大）

共同討論

第五四回（昭和四五年九月二六日　京都大）

1　市民革命の経済理論――ロック経済理論の意義――　稲村勲（立命館大）

2　三月前＝革命期におけるフォイエルバッハの問題　寺田光雄（名古屋大）

第五五回（昭和四六年一月三〇日　大阪産業大）

1　ヒルファーディングの帝国主義論――『金融資本論』の成立過程、特徴、位置について　保住敏彦（大阪商業大）

2　アムステルダム社会史国際研究所の成立について　山口和男（甲南大）

第五六回（昭和四六年五月二九日　竜谷大）

1　リカードウにおける資本蓄積論と貨幣信用論　千賀重義（名古屋大）

共通論題　近代経済学生成期の諸問題

2　ローザンヌ学派の現代的反省――ワルラスの一般均衡理論を中心として――　山下　博（同志社大）

3　新古典学派の意義と特徴――古典学派との対比を中心として――　南方寛一（神戸大）

4　オーストリア学派成立の歴史的背景とその理論的特徴――主としてC・メンガーを中心とする周辺的考察――　末永隆甫（大阪市立大）

討論

司会者　菱山　泉（京都大）・杉原四郎（関西大）・林治一（神戸大）

第五七回（昭和四六年一〇月九日　神戸大）

1　マーシャルと経済学の歩み――近代経済学一〇〇年の意義――　保坂直達（神戸商科大）

2　新厚生経済学の成立　植松忠博（京都大）

第五八回（昭和四七年一月二九日　京都社会福祉会館　当番校　同志社大）

1　平和的帝国主義論と帝国主義的経済主義――SPDの帝国主義認識――　大野節夫（同志社大）

2　ロシア論におけるマルクスとエンゲルス　淡路憲治（岡山大）

第五九回（昭和四七年六月一〇日　神戸商科大）

1　近代経済学からみたリカードウについて　服部容教（大阪府立大）

2　わが国における最近のリカードウ研究　中村広治（大分大）

3　リカードウ研究五〇年を顧みて（講演）　堀　経夫（芦屋大）

第六〇回（昭和四七年九月三〇日　関西大）

1　『ドイツ・イデオロギー』再論――「哲学意識」批判としての『ドイツ・イデオロギー』――　重田晃一（関西大）

2　V・パレートにおける経済学と社会学――社会的効用理論を中心として――　松嶋敦茂（滋賀大）

第六一回（昭和四八年一月二〇日　関西学院大）

1　労働者による産業管理思想について――G・D・H・コールのギルド社会主義を中心に――　三浦愛三（名古屋大）

2　アダム・スミスにおける「同感」と「観察者」　篠原　久（関西学院大）

第六二回（昭和四八年五月二六日　大阪府立大）

1　ジョナサン・スウイフトとアイルランド通貨問題　守矢　洋（大阪市立大）

2　ヒルデブラントの経済発展段階論　橋本昭一（関西大）

3　現代ヨーロッパにおけるルカーチとフランクフルト学派研究　平井俊彦（京都大）

4　トロント大学におけるミル父子記念学会について　杉原四郎（甲南大）

第六三回（昭和四八年一〇月六日　滋賀大）

1　J・S・ミルと現代――没後一〇〇年に寄せて――（公開講演）杉原四郎（甲南大）

2　J・S・ミル経済学試論集第五論文について　長谷川隆彦（関西外国語大）

3　ミルとオーエン　永井義雄（金沢大）

第六四回（昭和四九年一月二六日　大阪大）

1　価値の生産価格への「転化問題」をめぐって　津戸正広（大阪府立大）

2　一八八〇年代から一八九〇年代のイギリス社会主義――ハインドマンと社会民主連盟の評価をめぐって――　安川悦子（名古屋市立女子短期大）

第六五回（昭和四九年五月二五日　立命館大）

1　マルクス思想の出発点――『学位論文』と『準備ノート』を中心として――　正木八郎（大阪市立大）

2　W・S・ジェボンズの科学方法論――J・S・ミル批判の一側面――　井上琢智（関西学院大）

3　W・バジョットの古典派経済学把握　岸田　理（竜谷大）

第六六回（昭和四九年九月二八日　甲南大）

1　ジョン・ロックの財産論の歴史的意義――かれの労働観に関連して――　生越利昭（神戸商科大）

2　リカードウ「比較生産費説」の原型理解と変型理解　行沢健三（京都大）

第六七回（昭和五〇年一月二五日　京都大）

1　マルクスの労働価値説　梅沢直樹（京都大）

2　「ナポレオン的観念」について　河野健二（京都大）

第六八回（昭和五〇年五月二四日　神戸大）

1　スラッファ評価をめぐる若干の論争について　松本有一（大阪市立大）

2　メンガーと「限界革命」　上宮正一郎（神戸大）

3　J・B・クラークと限界主義　田中敏弘（関西学院大）

第六九回（昭和五〇年一〇月四日　関西大）

1　リカードウとマルサスとの利潤論争――両者の『諸原理』を中心として――　岡本祐次（三重短期大）

2　スラッファとマルクス――価値と価格を中心として――　岡本義行（京都大）

第七〇回（昭和五一年一月二四日　神戸商科大）

1　ホッブズ社会哲学の成立過程　田中秀夫（京都大）

2　マーシャルの派生需要論――『経済学原理』の改訂との関連で――　礒川　曠（近畿大）

第七一回（昭和五一年五月二九日　大阪市立大）

1　J・ステュアート『経済学原理』における市民社会成立史論――A・スミスとの関連において――　飯塚正朝（大阪市立大）

2　『道徳感情論』についての一考察　天羽康夫（高知大）

3　スミスの「富裕の自然的コース」についての一試論　関劭（神戸学院大）

シンポジウム　司会者　羽鳥卓也（岡山大）・田中敏弘（関西学院大）

第七二回（昭和五一年一〇月二日　竜谷大）

1　日本における近代経済学――その方法論的一断面――　葛西孝平（京都教育大）

2　フェッラーラの経済学説について　橋本比登志（京都産業大）

第七三回（昭和五二年一月二二日　近畿大）

1　マルクス利潤率低下論　若森章孝（関西大）

2　ミル「生産分配二分論」と『原理』の構成について　熊谷次郎（桃山学院大）

第七四回（昭和五二年四月四日　京都大）

1　マルクスの「価値の生産価格への転化」について――特に『資本論』第三部の論理次元と競争との関連から――　伊藤正純（名古屋大）

2　一八一四年のリカードウの利潤率低下論　羽鳥卓也（岡山大）

3　Karl Marx and Piero Sraffa（講演）　R. L. Meek

第七五回（昭和五二年九月二四日　神戸大）

1　S・ベイリーの価値論と六〇年代初頭のマルクス　竹永進（大阪市立大）

2　A・ワルラスの稀少性について　中久保邦夫（神戸大）

第七六回（昭和五三年一月二八日　京都産業大）

1　リカードウ＝マルサスの恐慌論争　佐久間英明（京都大）

2　地代論と生産価格・市場価値論――『資本論』成立史の側面から――　松尾　博（滋賀大）

第七七回（昭和五三年四月三日　関西学院大）

1　リカードウの賃金論――労働の自然価格と市場価格を中心として――　丸山武志（大阪市立大）

2　アルフレッド・マーシャルの限界生産力説について　坂口正志（富山大）

3 ウェーバーの貨幣論　田中真晴（甲南大）
4 Adam Smith: The Functions of Government（講演）
Andrew S. Skinner（Univ. of Glasgow）

第七八回（昭和五三年九月一六日　大阪経済大）
1 『諸国民の富』第三編の政治史的接近　久保田克美（大阪経済大）
2 ノミナリズムの貨幣認識と労働貨幣論批判――マルクス価値形態論の生成――　斉藤日出治（名古屋大）

第七九回（昭和五四年一月二七日　神戸学院大）
1 J・F・ブレイの社会的権力論　岸　徹（京都大）
2 スラッファの標準商品の実証　宮本順介（神戸商科大）

第八〇回（昭和五四年五月二六日　関西大）
1 相対的剰余価値の諸生産方法について――相対的剰余価値論の成立と発展にそって――　佐武弘章（大阪社会事業短期大）
2 領有法則の転回と再生産表式　安孫子誠男（京都大）
3 『国富論』第三・四編の関連についての一考察――現状批判としての「哲学的歴史」の方法――　渡辺恵一（大阪市立大）

第八一回（昭和五四年九月二九日　京都教育大）
1 パレートにおける『合理性』の意義について　松嶋敦茂（滋賀大）
2 限界費用論とケインズの価格論　菅野英機（天理大）

第八二回（昭和五五年一月一九日　阪南大）
1 ヒュームのアメリカ論――ヒューム『書簡集』より――　田中秀夫（京都大）
2 価値形態論の形成　尼寺義弘（阪南大）

3 西南部会

西南部会のあゆみ

発足の経緯と組織

西南部会は昭和三一年一月二一日に発足した。昭和三〇年度の秋季大会（大阪市立大）に出席した会員を中心に、昭和三〇年一一月五日同会で九州地方部会設立準備会を開き、設立の趣旨や時期、世話役校（九州大）などにつき協議した。世話役校は、準備会に出席されなかった会員の意向も打診し、昭和三一年一月二一日に九州大学で経済学史学会九州地方部会（仮称）の第一回研究会を開くことを決定した。この研究会で以下のような取り決めをおこなった。(1)名称を経済学史学会西南部会とし広く中国、四国の一部の会員をふくめる、(2)年二、三回程度の例会をもつ、(3)年会費を二百円にする、(4)部会幹事や幹事校はおかず、関係書類の整理や会の運営は主催校の持ち回りでおこない、自由で独立な研究者の協力組織とする、(5)研究分野や会員を狭く限定しない。

第一〇回例会（昭和三六年二月一一日）で、連絡事務の便宜上から、事務局を九州大学経済学部高木研究室に置くことを決定。合わせて幹事校（九州大、福岡大、西南学院大）と各大学より二名程度の代表者ないし委員を出して事務局を構成し、連合組織としての会の運営を貫くことを申し合わせた。本部大会の年一回が決定し、部会

活動の強化に歩調を合わせるため、第一四回例会（昭和三八年一月二七日）で、夏の例会を二日間とし第二日目に有志による研究会をもつことにした。この研究会は第二〇回例会（昭和四一年一月二九日）より例会ごとに行なうこととなり、また第二五回例会（昭和四三年七月六日）より例会を二日間とし、二日目を研究討議の場にすることを決定した。

発足当初の会員数は六八名（本部会員三七名）であったが、会の組織は地方会員を包含し、また専門分野も多岐にわたり、いわば学史を中心とした総合学会の観があった。また、当時としては、数少ない研究発表の場でもあった。各種の学会活動が活発となり、部会活動も盛んとなるにつれて学史の専門研究者の入会がふえ、研究の焦点も経済学史や経済思想史などに傾いてきたが、当初の組織の特殊性は現在も継承されてきている。現在の会員数は一三七名（本部会員八五名）である。事務局は昭和三六年より九州大学経済学部高木研究室に置くことになり、大学紛争時に一時（昭和四四年より四五年まで）荒牧正憲の自宅に移したが、昭和四九年いらい九州大学経済学部荒牧研究室に置いている。また、第一七回例会（昭和三九年九月五日）で会計監査（福岡大、井手口一夫）を決め、第三四回例会（昭和四八年一月二七日）で会員増加による研究活動の活発化をはかるため地区毎の運営委員を決めた。四国（入江　奨）、中国（狭田喜義）、九州（武野秀樹、井手口一夫、川島信義、中村広治、有田一郎、藤田暁男）。さらに、諸経費の増加のため、第四四回例会（昭和五三年一月二八日）で部会会費を五四年度より年五百円に引上げることを決めた。

活動と特徴

西日本地区の特殊性に沿う運営方法をもち、部会会員を包含する総合学会ということに特徴をもつが、とくに次のような活動をおこなった。

(イ)研究成果の出版。第一五回例会（昭和三八年九月七日）より重ねられた研究会での討議の中から、会員の研究成果の確認と深化のための一里塚を作ってはとの意見が生まれ、研究と討議の過程から経済学史学会西南部会編に成る著作を刊行した。『近代経済学史研究』（ミネルヴァ書房、昭和四七年四月）と『経済学史研究』（ミネルヴァ書房、昭和四八年一〇月）がそれである。

(ロ)『西南部会報』と『西南部会通信』。

第一四回例会（昭和三八年一月二七日）で『西南部会報』の発刊が決定され、会員間の研究協力のより緊密化のため報告要旨、相互の情報交換などの組織化が計画された。『西南部会報』は年一回発刊され、昭和三八年より昭和四七年まで計一〇号続いたが、本部会員の報告要旨が『経済学史学会年報』に掲載されることになりその意義の一部を失ったので、『西南部会通信』に切りかえることになった。『西南部会通信』は部会会員の報告要旨と会員名簿の変更が主な内容となっていて、昭和五二年一一月に第一号が出たあと、現在、第二号を準備しているところである。

(ハ)国際交流。昭和三二年四月ロンルド・ミーク氏の来日を機会に、九州地区でも西南学院大と久留米大で講演会を開催し、また長崎大と九州大で懇談会をもった。昭和五二年三月三十日ミーク氏の二回目の来日を機会に九州大でシンポジウムをもった。テーマは

「スミスとマルクス」。また、長崎大、熊本商大、大分大でミーク氏との懇談会をもった。昭和五三年三月二八日スキナー氏を囲むシンポジウムを西南学院大で行った。テーマは「アダム・スミスの経済史観」。これらには主に西南部会に所属する会員が出席した。ヴェントゥーリ氏とは九州大学で懇談会をもった。

西南部会研究報告

第一回（昭和三一年一月二一日　九州大）

1　リカアドウ経済学の構造　中村広治（九州大）

2　穀物法論争におけるマルサスとリカアドウ　横溝軌一（西南学院大）

3　ケネーの賃金論　狭田喜義（広島大）

第二回（昭和三一年六月九日　山口大）

1　重商主義解体時における東印度貿易論　藤本保太（山口大）

2　生産関係について　内田一男（山口大）

3　リカアドウの初期の経済理論の楽観的性格について　林登良雄（広島大）

第三回（昭和三二年一月一九日　福岡大）

1　人間関係論に関する一考察――E・メイヨーの思想について　副田満輝（九州大）

2　J・S・ミル社会思想の一考察　池田一浩（長崎大）

3　近代経済学の形成と発展

(イ)　特に限界原理を中心として　高木真助（山口大）

(ロ)　限界生産力説の発展に寄せて　狭田喜義（広島大）

第四回（昭和三二年七月六日　九州大）

1　独占資本主義の諸問題――帝国主義論の方法について――　馬場元二（久留米大）

2　効用理論の発展と社会的効用函数の決定について　有田一郎（熊本大）

3　労資関係論の位置づけ――経営民主主義の問題――　川崎文治（長崎大）

4　働値論争史の一齣　川口武彦（九州大）

第五回（昭和三三年一月二五日　久留米大）

1　近世初頭におけるドイツの商業資本について　松田緝（久留米大）

2　金属流通と紙券流通――リカァドウ貨幣論の一考察――　深町郁弥（九州大）

3　過少消費説の現代的課題　前田豊昭（広島大）

4　石川興二「創造的世界経済学序説」（『経済論叢』第八〇巻第四号）分析　有田一郎（熊本大）

第六回（昭和三三年七月五・六日　広島大）

第一日

1　絶対主義と商業資本　山村延昭（九州大）

2　労働価値説の一問題　長岡豊（福岡大）

3　トーマス・マンの経済理論　遠山馨（西南学院大）

4　ペティとフランクリンの価値論をめぐって　三辺清一郎（尾道短期大）

第二日

再生産論について（自由討議）　建林正喜（広島大）、高

木暢哉（九州大）、高木幸二郎（九州大）

第七回（昭和三四年一月三一日　西南学院大）

1　大塚教授の「信用関係の展開」について　川島信義（九州大）

2　固定資本の回転と恐慌　建林正喜（広島大）

3　信用学説の展開　高木暢哉（九州大）

第八回（昭和三四年七月一一日　長崎大）

1　貨幣取引資本について　菅　知彦（鹿児島県立短期大）

2　マルクス経済学の方法にかんする問題点　馬場元二（久留米大）

3　利子付資本と信用理論――古典学派とマルクス――　竹村脩一（大分大）

4　適正価格論としての厚生経済学　高木真助（山口大）

第九回（昭和三五年九月三日　福岡大）

1　ジェイムズ・ステュアートの銀行理論　川島信義（九州大）

2　マーシャルの価値論について　宮崎喜代司（久留米大）

3　チュルゴーにおける自由交易思想の展開　岩根典夫（西南学院大）

第一〇回（昭和三六年二月一一日　大分大）

1　シュムペーター革新理論の基本性格　岩野茂道（九州大）

2　トーマス・マン「財宝論」の解釈をめぐって　遠山　馨（西南学院大）

3　ヒックスの「賃銀論」について　西　太郎（佐賀大）

4　ケネー賃銀論の性格について　狭田喜義（広島大）

5　最近の欧米経済事情について　高木暢哉（九州大）

第一一回（昭和三六年七月八日　山口大）

1　経済学及び経済思想史観　高木真助（山口大）

2　労働価値説からみたリカァドウの貨幣論について　吹春寛一（九州大）

3　マーシャルの分配論について　宮崎喜代司（久留米大）

4　労働党の声明――進歩のための計画――　本吉敬治（福岡大）

5　産業の交替と技術選択　藤本保太（山口大）

第一二回（昭和三七年一月二〇日　西南学院大）

1　一七九三年恐慌とフランシス・ベアリング　中村広治（大分大）

2　利潤率の傾向的低下の法則について　長岡　豊（福岡大）

3　「グレシャムの法則」の学史的考察　岩松繁俊（長崎大）

4　テュルゴー賃銀論の理論的構造　狭田喜義（広島大）

5　学説の問題意識と体系の構造　長野敏一（熊本商科大）

第一三回（昭和三七年七月七日　熊本商科大）

1　金融資本の概念をめぐって　鈴木芳徳（九州大）

2　貨幣の必然性について　竹村脩一（大分大）

3　ケインジアン均衡組織の展開　武野秀樹（九州大）

4　フランス主観主義価値説の誕生　岩根典夫（西南学院大）

第一四回（昭和三八年一月二七日　九州大）

1　一六二〇年代初期の経済政策　遠山　馨（西南学院大）

2　価値形態の概念をめぐって　宮崎喜代司（広島大）
3　景気分析の学史的考察　高木真助（山口大）
4　ヨーロッパの印象　高木幸二郎（九州大）

第一五回（昭和三八年九月七日　長崎大）
1　分配の経済・経営の理論　川崎文治（長崎大）
2　『資本論』体系と競争の展開について　逢坂　充（九州大）
3　カルドアの成長理論について　河野善隆（長崎県立短期大）
4　近代経済学の学史的考察　高木真助（山口大）
5　経済学史の方法と課題　高木暢哉（九州大）

第一六回（昭和三九年一月二五日　西南学院大）
1　「転形問題」の一考察　阿部真也（福岡大）
2　T・アットウッドの経済理論　荒牧正憲（九州大）
3　労働価値論史からみたジェヴォンズの経済理論　入江　奨（松山商科大）
4　貨幣数量説の跡づけ　中沢慶之助（西南学院大）

第一七回（昭和三九年九月五日　松山商科大）
1　一九世紀後期イギリスの大不況について　藤田暁男（九州大）
2　ジェイムズ・ステュアートの「外国貿易」論　川島信義（西南学院大）
3　貨幣数量説私見　山下宇一（松山商科大）
4　生活賃金説と賃金体系の決定原則　狭田喜義（広島大）
5　マルサスにおけるセエ法則批判の論理　中村広治（大分大）

第一八回（昭和四〇年一月二九日　福岡大）
1　勘定モデル・経済モデル・政策モデルの関係——特に政策分析の観点から——　伊東政則（福岡大）
2　「世界市場」と「世界経済」の概念規定について　有賀定彦（下関市立大）
3　マーシャル理論の特徴について——その法則観を中心に——　藤田暁男（九州大）
4　経済学原理におけるいわゆる宇野理論の根本的問題点　馬場元二（久留米大）

第一九回（昭和四〇年七月一〇日　九州大）
1　貨幣論における国家規定について——『経済学批判要綱』を中心として——　深町郁弥（九州大）
2　マーシャル体系とケインズ経済学　有田一郎（熊本大）
3　イギリス議会の成立とエドワード三世の財政政策　山村延昭（西南学院大）
4　社会変動の型　藤本保太（山口大）
5　トマス・モアの「ユートピア」と社会主義　伊達　功（松山商科大）

第二〇回（昭和四一年一月二九日　八幡大）
1　古典派経済学者の教育論争　池田一浩（佐賀大）
2　ケインズの『貨幣改革論』と『貨幣論』　有田一郎（熊本大）
3　スミスの労働体系論　入江　奨（松山商科大）

第二一回（昭和四一年七月九日　熊本商科大）
1　スミスの財政学についての一考察　広渡貞喜（九州大）

2 リカード・マルサスの「恐慌」論争に関する一匿名の著書について　逢坂　充（熊本商科大）
3 資本蓄積論争の端緒――リカアドウ・マルサス間の地金論争における――　中村広治（大分大）
4 ケインズの人口理論について　有田一郎（熊本大）

第二二回（昭和四二年一月二八日　西南学院大）
1 ヒルファーディングの貨幣論に関する一考察　野田弘英（九州大）
2 シュムペーター経済学の背景　河野善隆（長崎県立大）
3 計量経済学の学史的考察　高木真助（西南学院大）
4 経済学史研究の方法と課題　高木暢哉（九州大）

第二三回（昭和四二年七月八日　広島大）
1 『国富論』における富裕の自然的序次について　小柳公洋（九州大）
2 ソヴィエトの生産力概念と分業論争　中峯照悦（広島大）
3 J・S・ミルの資本蓄積論について　荒牧正憲（九州大）

第二四回（昭和四三年一月二七日　九州産業大）
1 G. v. Mayr の統計調査論について　世利幹雄（九州産業大）
2 "Tenant" 問題について――Land Question――　池田照彦（熊本商科大）
3 社会思想史の学問的性格について　伊達　功（松山商科大）
4 マーシャルの『経済学原理』における経済主体の活動についての考え方について　藤田暁男（九州共立大）

第二五回（昭和四三年七月六・七日　大分大）
第一日
1 ケインズ体系における価格理論の地位と問題点　林田睦次（福岡大）
2 マルクス経済学の方法と体系に関する若干の問題　宮崎喜代司（広島大）
3 ケインズ以後の経済学の展開　藤本保太（山口大）
4 マーシャルとマルクスにかんするノート――「活動」・「労働」両概念の対比を中心に――　井手口一夫（福岡大）
第二日（研究会）
マーシャルとマルクスにかんするノート――「活動」・「労働」両概念の対比を中心に――　井手口一夫（福岡大）

第二六回（昭和四四年一月二五・二六日　九州大）
1 剰余価値生産と労働力の価値変動　川渕スミ（九州大）
2 計画的経済成長モデルについて――制御理解の利用――　時政　勗（九州大）
3 財政学の方法をめぐって――武田隆夫教授の見解を中心に――　古川卓万（九州産業大）
4 ミル経済学における第四篇の意義について　荒牧正憲（九州大）
第二日（研究会）
ミル経済学における第四篇の意義について　荒牧正憲（九州大）

第二七回（昭和四四年七月一二・一三日　長崎大）

第一日

1　バートランド・ラッセルの平和運動とその思想　岩松繁俊（長崎大）

2　アダム・スミスの「生産的労働」論に対する一考察――ジェイムズ・スチュアートの「インダストリ」論の分析視角からの一つの接近――　丸山広一（長崎国際経済大）

3　マーシャルよりケインズへ　有田一郎（熊本大）

第二日（研究会）

マーシャルよりケインズへ　有田一郎（熊本大）

第二八回（昭和四五年一月一七・一八日　福岡大）

第一日

1　ケインズ以後の経済学――一般均衡学派の雇用理論の一考察――　林田睦次（福岡大）

2　アダム・スミスの公債論　古川卓万（大分大）

3　ケインズモデルの図示について　武野秀樹（九州大）

第二日（研究会）

ケインズモデルの図示について　武野秀樹（九州大）

第二九回（昭和四五七月一一・一二日　松山商科大）

第一日

1　「3月前」期におけるフォイエルバッハとマルクス　佐藤誠（九州大）

2　アダム・スミスのブリテン・アイルランド・北アメリカ合邦論について　小柳公洋（北九州大）

3　国家と経済――古典派財政論の評価をめぐって　古川卓万（大分大）

4　限界主義について　藤本保太（山口大）

第二日（研究会）

限界主義について　藤本保太（山口大）

第三〇回（昭和四六年一月二三・二四日　北九州大）

第一日

1　ジェイムズ・ステュアートの市民社会論について　川島信義（西南学院大）

2　ヒルファディングの金融資本規定の再検討　野田弘英（熊本商科大）

3　マーケッティング思想の展開　阿部真也（福岡大）

4　新古典派成長モデルについて　山下正毅（九州大）

第二日（研究会）

新古典派成長モデルについて　山下正毅（九州大）

第三一回（昭和四六年七月一二・一三日　広島大）

第一日

1　市場価値論について　宮田千蔵（広島大）

2　若いレーニンと「ナロードニチェストヴォ」　桂木健次（九州大）

3　イギリス海運諸法の解釈をめぐる若干の問題点　隅田哲司（広島商科大）

4　市民社会派の経済分析について　荒牧正憲（九州大）

第二日（研究会）

市民社会派の経済分析について　荒牧正憲（九州大）

第三二回（昭和四七年一月二九・三〇日　西南学院大）

第一日

1　ケインズ体系における弾力性概念について　林田睦次（徳山大）

2　「疎外された労働」について　越智保則（福岡教育大）

3　イギリスの「大不況」（一八七三―九六）とその対策構想の諸相　藤田暁男（長崎大）

4　価値形態論の批判的再構成　宮崎喜代司（広島大）

第二日（研究会）

近代経済学の影響　高木真助（福岡大）

第三三回（昭和四七年七月一一・一二日佐賀大）

第一日

1　アダム・スミスの農業論　鈴木　亮（佐賀大）

2　ヒルファディングの株式資本論について　野田弘英（熊本商科大）

3　マックス・ヴェーバーの官僚制論批判　久間清俊（九州大）

4　コアと均衡理論　細江守紀（九州大）

第二日（研究会）

『近代経済学史研究』（経済学史学会西南部会編）をめぐって　狭田喜義（広島大）　井手口一夫（福岡大）ほか

第三四回（昭和四八年一月二七・二八日　九州大）

第一日

1　資産選択理論について　江副憲昭（九州大）

2　マルクス主義とエンゲルス――わが国のエンゲルス研究史の回顧を通して――　坂脇昭吉（鹿児島大）

3　統計学史上におけるケトレー　高橋政明（鹿児島大）

4　チャーチストの土地計画について　古賀秀男（山口大）

第二日（研究会）

古典学派におけるマルサスの位置づけ　入江　奨（松山商科大）

第三五回（昭和四八年七月一九・二〇日　山口大）

第一日

1　ブレトンウッズ体制の再検討――その諸説について――　平　勝廣（九州大）

2　最適成長理論について　時政　勗（西南学院大）

3　スミスにおける「アメリカ型」国民経済への再転換について　小柳公洋（北九州大）

4　ステュアートの経済学体系と歴史意識　川島信義（西南学院大）

第二日（研究会）

ステュアートをめぐって　川島信義（西南学院大）

第三六回（昭和四九年一月二五・二六日　福岡大）

第一日

1　初期マルクスにおける市民社会批判体系について　梅井道生（福岡大）

2　市場均衡の安定性について――模索過程と非模索過程――　是枝正啓（九州大）

3　マックス・ヴェーバーの経済政策論の一考察　久間清俊（九州大）

4　『資本論』における価値形態論の方法と思想　下平尾勲（佐賀大）

第二日（研究会）

社会科学、社会思想の方法をめぐって　伊達　功（松山商科大）

第三七回（昭和四九年七月一三・一四日　鹿児島大）

第一日

1　R・G・ホートリーの戦後ポンド論　吉沢法生（九州大）

2　ハロッド経済動学の体系と基本方程式　篠崎敏雄（愛媛大）

3　サミュエル・ハートリブの貧民救済と教育思想について――「ロンドンの慈善」を中心に――　芳賀　守（徳山大）

4　『国富論』後半体系をめぐって　小柳公洋（北九州大）

第二日（研究会）

『国富論』後半体系をめぐって　小柳公洋（北九州大）

第三八回（昭和五〇年一月二五・二六日　北九州大）

第一日

1　経済余剰と便益測定　松沢俊雄（九州大）

2　ヴェブレンにおける「貸付信用」と株式会社　高　哲男（九州大）

3　自然・人間・産業――一つの資源配分論　藤本保太（山口大）

4　古典派経済学の現代的意義　中村広治（大分大）

第二日（研究会）

古典派経済学の現代的意義　中村広治（大分大）

第三九回（昭和五〇年七月一二・一三日　広島大）

第一日

1　顕示選好理論について　田中広滋（九州大）

2　利潤率と資本の有機的構成の高度化――『資本論』第三巻第三篇の検討――　宮田千蔵（福山大）

3　アダム・スミス信用論にみるナショナリズム　川島信義（西南学院大）

4　J・S・ミルの「社会哲学」の内容と意義について　荒牧正憲（九州大）

第二日（研究会）

J・S・ミルの「社会哲学」の内容と意義について　荒牧正憲（九州大）

第四〇回（昭和五一年一月二四日・二五日　大分大）

第一日

1　歴史学派のカルテル論争とM・ウェーバーの位置　小野隆弘（九州大）

2　「プロレタリアート」派のポーランド論と若きローザ　岡村東洋光（九州大）

3　ハロッドの動学的利子論――ケインズ利子論の発展として――　篠崎敏雄（愛媛大）

4　マルクスの「疎外された労働」について　梅井道生（福岡大）

第二日（研究会）
マルクスの「疎外された労働」について　梅井道生（福岡大）

第四一回（昭和五一年七月一二・一三日　西南学院大）
第一日
1 インフレーションと失業——Philips Curve と（Counter）Clockwise Cycle の理論的検討——　寺田宏洲（九州共立大）
2 生産価格論におけるいわゆる「転化問題」についての一考察——剰余価値の分配過程と費用価格の生産価格化——　森岡敬史（広島大）
3 『国富論』における富裕と安全　小柳公洋（北九州大）
第二日（研究会）
『国富論』における富裕と安全　小柳公洋（北九州大）

第四二回（昭和五二年一月二九・三〇日　長崎大）
第一日
1 アダム・スミスの資本蓄積論について　関源太郎（九州大）
2 戦後西ドイツ経済政策思想について　佐藤　誠（九州大）
3 我国に於けるケインズ「一般理論」研究四〇年の歩み　林田睦次（徳山大）
4 『資本論』の基本構造——一つの問題提起——　宮崎喜代司（広島大）
第二日（研究会）
『資本論』の基本構造——一つの問題提起——　宮崎喜代司（広島大）

第四三回（昭和五二年七月一一・一二日　九州大）
第一日
1 F・リスト貿易論の一考察　森戸政信（福岡大）
2 ヒルファディング独占論の研究動向　坂本　正（九州大）
3 フォン・ノイマンモデルの一展開　細江守紀（八幡大）
4 『要綱』における富概念の展開　越智保則（福岡教育大）
第二日（研究会）
『要綱』における富概念と人類史視角　越智保則（福岡教育大）

第四四回（昭和五三年一月二八・二九日　北九州大）
第一日
1 A・マーシャル《複合的準地代》概念の定立と『経済学原理』に於けるその意義　井田高之（福岡大）
2 都市経済学の一視角　慶田　収（九州大）
3 西独財形政策の政策思想をめぐって　佐藤　誠（西南女学院短期大）
4 マルクス資本理論の生成過程について　高倉泰夫（九州大）
第二日（研究会）
マルクス資本理論の生成過程について　高倉泰夫（九州大）

第四五回（昭和五三年七月一四・一五日　鹿児島経済大）
第一日
1 マーシャル「国民所得」概念の形成過程について——賃金および利潤基金を中心に——　井上栄喜（福岡大）

2　一九二〇年代の連銀政策とB・ストロングの見解について　永田裕司（九州大）
3　二次計画法のアルゴリズム　田中謙一郎（長崎大）
4　リカァドゥの資本蓄積論　中村広治（大分大）
第二日（研究会）
リカァドゥの資本蓄積論　中村広治（大分大）

第四六回（昭和五四年一月二七・二八日　松山商科大）
第一日
1　「パリ草稿」に関する一考察――経済学批判と歴史把握の視座の形成――　秋田　清（九州大）
2　一般的利潤率の形成・低下過程について――「恐慌の一層発展した可能性」の確定のために――　渡辺利文（松山商科大）
3　左右田学説とマルクス主義　渡植彦太郎（松山商科大）
4　アダム・スミスの重商主義批判――その階級的性格をめぐって――　川島信義（西南学院大）
第二日（研究会）
アダム・スミスの重商主義批判――その階級的性格をめぐって――　川島信義（西南学院大）

第四七回（昭和五四年七月一二・一三日　西南学院大）
第一日
1　「貨幣資本と現実資本」論の形成過程――J・ウイルソンの貨幣恐慌論――　川波洋一（九州大）
2　F・リストの発展段階説　森戸政信（伊万里商高）
3　寡占経済下の経済変動　藪田雅弘（九州大）
4　一九世紀末アメリカにおける経済学の動向　高　哲男（広島大）
第二日（研究会）
一九世紀末アメリカにおける経済学の動向　高　哲男（広島大）

第四八回（昭和五五年一月二六・二七日　広島大）
第一日
1　スミス経済学における若干の諸問題――第一編を中心に――　中村広治（広島大）
2　いわゆる中央銀行とは何か――イングランド銀行の史的展開との関連で――　藤田幸雄（九州大）
3　リカードウにおける価値と自然価格との乖離――一八二〇年の資料を検討して――　羽鳥卓也（岡山大）
4　イギリス重商主義の形成に関する一考察　隅田哲司（広島修道大）
第二日
1　J・A・ホブソンの「過剰貯蓄論」　姫野順一（長崎大）
2　A・マーシャルの《代表的企業》概念について　井田高之（福岡大）
3　『国富論』の歴史把握と経済理論　飯塚正朝（佐賀大）
4　東北部会

東北部会の発足

東北部会の設立は多年の懸案となっていたが、その間に東北地方（新潟県を含む）の本学会会員数が三十数名にのぼり、幹事会からの度重なる働きかけもあって、発足についての懇談および第一回の部会が一九八〇年六月一四日（土）午後一時から東北大学経済学部会議室で開催された。

田添京二会員（福島大）の経過報告、杉山忠平代表幹事の挨拶のあと、つぎの研究報告が行なわれた。

1　ベンサムの議会改革論と経済学　伊藤宏之（福島大）

2　ジョン・グレイの国民銀行論と労働貨幣について　蛯原良一（新潟大）

当日の出席者は約二〇名。懇談の席上、正式に東北部会が発足し、部会幹事（任期二年）は田添京二会員（福島大）、部会事務局は東北大学（服部文男・馬渡尚憲）となった。

資料篇あとがき

本『三〇年史』は、原則として昭和二五年四月から昭和五五年三月までの期間を対象とするが、東北部会発足の記録はこれを例外として含めた。

資料作成にあたっては、主として、利用しうる大会記録、総会記録、幹事会記録、その他の原資料と、『十年史』、『学史学会ニュース』、『年報』、『会員名簿』、本学会編の二論文集、『関西部会通信』、『西南部会報』、『西南部会通信』等のほか、『日本経済学会連合ブリティン』、『日本経済学会連合ニュース』、『日本学術会議月報』、*Japan Science Review* などを参照した。かなりの不明あるいは疑問箇所については種々問合せ等を行ない、正確を期したが、欠陥は免かれ難い。いずれ補訂が必要かと思われる。

ここに取上げられた資料を有機的に結合する目的から、当初「三〇年史略年譜」を含めることを考えたが、紙数の関係上、経済学古典書展示目録（『十年史』掲載以降について）や現会員の研究テーマ一覧や大会記念写真等と共に、省かざるを得なかった。

部会活動にかんしては、それぞれ関係の次の会員の方々に執筆していただいた。関東部会――小林　昇、関西部会――葛西孝平（竹本　洋、上宮正一郎が協力）、西南部会――荒牧正憲、東北部会――服部文男。

今回の資料整備にあたり、編集委員、とくに杉原四郎委員から多大のご協力を得たことを記しておきたい。今後の学会史編纂に備え、諸記録（とくに大会、総会、幹事会、各部会の記録）を確実にとり、できる限り、『年報』その他にもれなく掲載するという地道な作業の積重ねが必要であることを、あらためて痛感する。学会として特に留意することが必要と思われる。人名索引の作成には井上琢智会員の手をわずらわした。

（田中敏弘）

前田豊昭　82
マカロック　69
正木八郎　78
真実一男　31〜33, 39, 50, 54, 61, 65, 73, 75
マーシャル　47〜51, 54, 60, 69, 74, 75, 77, 79, 83〜86, 89
松石勝彦　61
松浦高嶺　41
松浦保　18, 50, 61, 65, 69
松尾博　33, 45, 73, 75, 79
松岡保　51, 61, 74
松岡利道　50, 61
松岡寛爾　43
松川七郎　31, 32, 46, 68
松沢俊雄　88
松嶋敦茂　50, 78, 80
松田勇　74
松田弘三　44, 46, 53, 73
松田寛　2, 8, 29, 40
松田緝　82
松平定信　42, 44, 48
松本有一　53, 78
松山昌司　74
マブリ　39, 72
マルクス　4, 8, 11, 12, 22, 38〜61, 68〜70, 73, 75〜80, 82〜83, 85〜90
マルサス　23, 39, 40, 47, 49, 54, 55, 67, 74, 75, 79, 82, 84, 85, 87
丸山広一　86
丸山武志　79
馬渡尚憲　91
マン, T.　46, 54, 82, 83
マンデヴィル　41, 73

み

三浦愛三　78
三上正之　44, 76
ミーク　14, 22, 42, 56, 57, 67, 70, 73, 79, 81, 82
水田洋　i, 14, 15, 17〜19, 23, 29, 30〜33, 38, 48, 49, 51, 52, 54, 59, 60, 64, 65, 67, 68, 73〜76
溝川喜一　18, 33, 38, 46, 50, 61, 64, 73, 75, 76
南方寛一　47, 73, 74, 76, 77
南亮三郎　44
三辺清一郎　39, 40, 41, 75, 82
見野貞夫　76
美濃口武雄　70
三野村暢禧　53
宮内博　73
宮川彰　53
宮川実　66
宮崎義一　15, 42, 60, 64
宮崎喜代司　83〜86, 89
宮崎犀一　32, 33, 39, 45, 47, 53, 66, 70
宮田千歳　86, 88
宮本順介　80
宮本義男　73, 76
ミュルダール　45
ミラー, J.　12, 44
ミラボー　57
ミル, J.　38, 45, 61, 64, 73, 74, 78
ミル, J.S.　8, 42, 44, 46, 49〜52, 56, 58, 61, 64, 68, 69, 72, 74, 78, 79, 82, 85, 88
ミルトン　41, 73

む

武藤正平　41, 45
武藤光朗　39
村田安雄　44
室鳩巣　39

め

メイヨー　82
メンガー　54, 57, 77, 78

も

モア　40, 84
望月清司　50
本吉敬治　83
森茂也　41, 50, 76
森静朗　46, 49, 50, 52
森東吾　14, 56
森岡敬史　89
森川喜美雄　48, 59
モリス　45, 74
森田勉　44
森戸政信　89, 90
守屋典郎　64
モンクレティアン　48

や

矢島道文　54
安川(安藤)悦子　45, 47, 78
藪田雅弘　90
山鹿素行　51
山川義雄　2, 29〜32, 38
山口和男　18, 44, 61, 64, 75, 77
山嵜義三郎　76
山崎怜　12, 32, 33, 44, 59, 75
山崎益吉　54
山下宇一　84
山下博　41, 48, 50, 77
山下正毅　86
山田鋭夫　49, 61, 76
山田雄三　41, 67
山中隆次　44, 59, 60
山之内靖　52
山辺知紀　55
山村延昭　82, 84
山本二三丸　42

ゆ

行沢健三　15, 38, 73, 78

よ

横井小楠　54
横溝軌一　82
横山正彦　29〜33, 39, 40, 43, 48, 56
吉沢法生　88
吉沢芳樹　33, 39, 49, 53, 66, 67
吉田茂芳　73
吉田静一　43, 46, 68
吉田憲夫　53
吉田洋一　67
吉田義三　42
吉原泰助　44, 59, 60, 67

ら

ラスキン　38, 65
良知力　32, 48, 59, 69
ラヂーシチェフ　41, 74
ラッセル, B.　86
ラムズィ　45

り

リカードウ　23, 38〜42, 49, 50, 53, 55, 57, 58, 61, 66, 67, 70, 73, 75〜79, 82, 83, 85, 90
リスト　42, 47, 68, 89, 90
立半雄彦　76

る

ルカーチ　42, 78
ルクセンブルク　50, 76, 88
ルソー　38, 41, 68, 70
ルフェーヴル　18, 56

れ

レイ, J.　48
レスリー, C.　73
レーニン　40, 51, 55, 61, 86

ろ

ロー, J.　46
ロージアン　62
ローダーデール　70
ロック　39, 46, 47, 68, 69, 77, 78
ロバーツ, L.　42

わ

ワイトリング　44
和田貞夫　72
和田重司　33, 46, 47, 48, 50, 52, 59, 70, 75, 76
渡辺昭　45
渡辺国広　38
渡辺恵一　80
渡辺建　56
渡辺源次郎　40, 43, 45, 46
渡辺茂樹　51
渡辺輝雄　30〜32, 40, 43, 45, 46, 60, 67
渡辺利文　90
ワルラス, A.　79
ワルラス, L.　48, 50, 51, 54, 69, 76, 77

中宮光隆　54
中村一雄　73
中村賢一郎　48, 49, 53, 60, 69
中村至朗　49, 51, 53
中村貞二　47
中村恒矩　69
中村広治　33, 42, 49, 50, 61, 77, 81～85, 88, 90
中矢俊博　54
中山大　45, 61, 75
ナポレオン　78

に

新村聡　54
西太郎　83
尼寺義弘　80
西垣恒矩　52
西川潤　49, 69
西村孝夫　38, 42
西山久徳　47
二瓶敏　45

ぬ

縫田清二　39, 61

の

ノイマン, v.　89
野沢敏治　50
野地洋行　43, 54, 61, 68
野尻武敏　72, 75
野田弘英　85～87
野々村一雄　42
野村兼太郎　29, 66

は

ハインドマン　78
バウアー, O.　76
芳賀守　47, 50, 53, 88
バークリー　76
狭田喜義　30～33, 43, 81～84, 87
橋本純二　43
橋本昭一　51, 76, 78
橋本比登志　47, 74, 77, 79
バジョット　78
長谷川隆彦　78
畑孝一　46, 49
服部文男　32, 51, 59, 60, 91
服部正治　70
服部容教　77
羽鳥卓也　31～33, 39, 47, 49, 50, 53, 54, 59, 61, 75, 76, 79, 90
ハートリブ　53, 88
馬場啓之助　48
馬場元二　44, 82～84
浜崎正規　45, 76
浜林正夫　18, 31～33, 42, 47, 52, 53, 59, 61, 64, 68, 69
早坂忠　33, 50, 51, 53, 61, 69
林治一　13, 31, 32, 40, 48, 49, 71, 72, 75, 77
林子平　47
林登良雄　45, 74, 82
林直道　43, 44
林田睦次　85～87
早瀬利雄　43, 44
ハリントン　42
ハル, C.H.　9, 60
パレート　50, 78, 80
ハロッド　44, 51, 88

ひ

久松俊一　75
土方直史　70
菱山泉　32, 33, 38, 43, 48, 51, 53, 74, 77
日高普　45
ヒックス　83
姫野順一　90
ヒューム, D.　46, 48, 49, 80
平勝広　87
平井俊彦　31～33, 42, 44, 46, 47, 68, 72, 76, 78
平田清明　18, 30～33, 39, 41, 44～46, 48, 49, 59, 64, 68, 69, 74
平野絢子　40
ヒルデブラント　51, 76, 78
ヒルファディング　39, 45, 50, 51, 68, 77, 85～87, 89
平瀬巳之吉　29～32, 39, 40, 60, 66
広田明　49
広瀬貞喜　84

ふ

ファーガスン　45, 49, 65
ファーミン　50
フィリップス, A.W.　89
フィルマー　51
フェッラーラ　79
フォイエルバッハ　52, 72, 77, 86
深町郁弥　82, 84
吹春寛一　83
福沢諭吉　50, 52, 54
福田徳三　3
福原行三　42, 61, 72
福原好喜　53
藤井定義　47
藤岡孝四郎　52, 74
藤田暁男　51, 81, 84～86
藤田幸雄　90
藤塚知義　42, 53, 59, 69
藤本保太　82～86, 88
舟橋喜恵　49
フランクリン　38～40, 82
古川卓万　85, 86
古沢友吉　39, 45
プルードン　22, 48, 49, 50, 54, 55, 59, 75
ブレイ　48, 49, 80
プレハーノフ　45, 75

へ

ベアリング　83
ベイコン　47
ヘーゲル　48, 59, 61
ヘス　44, 46, 47, 49, 59
ペティ　9, 23, 46, 47, 50, 55, 60, 68, 82
ベーリー　38, 53, 79
ベルンシュタイン　51, 68, 75
ベンサム　41, 69, 91
ベンディクセン　76

ほ

ボェーム・バヴェルク　75
保坂直達　49, 74, 77
ホジスキン　46
星野彰男　51, 52, 68, 70
保住敏彦　77
細江守紀　87, 89
細見英　59, 61, 74～76
ホッブズ　38, 43, 52, 79
ボテロ　44
ボードー　67
ホートリー　88
ホブソン　90
ホランダー, S.　52, 57, 70
堀経夫　i, 2, 4～6, 8, 9, 13, 20, 29～31, 33, 38, 39, 46, 56～58, 73, 77
堀家文吉郎　38
堀江忠男　43, 48, 67
ボリングブルック　53
本多利明　53

ま

舞出長五郎　4, 29, 30
マイヤー, G.v.　85

スキナー, A. 57, 80, 82
杉原四郎 i, 8, 13, 19, 21, 30～33, 38, 44, 48, 49, 52, 54, 56, 59～62, 64, 71, 74, 75, 77, 78, 91
杉本栄一 66
杉山清 6, 38
杉山忠平 ii, 12, 18, 19, 22, 31～33, 44, 54, 56, 59, 60, 64, 91
鈴木鴻一郎 38
鈴木正三 49
鈴木亮 59, 61, 87
鈴木芳徳 83
スターリン 40
ステュアート, J. 14, 43, 47, 48, 50, 51, 55, 57, 59, 60, 79, 83, 84, 86, 87
ステュアート, D. 60
ストロング, B. 90
スペンス 38
スミス, A. 14, 19, 23, 38, 39, 41, 42, 44, 46, 47, 49～57, 59～62, 65, 67, 68, 70, 73, 75, 76～77, 78～80, 84, 86～90
隅田哲司 86, 90
住谷悦治 39
住谷一彦 68
隅谷三喜男 6, 38
豆本薫 41, 73
スラッファ 53, 57, 78～80

せ

セイ 46, 77, 84
関源太郎 54, 89
関劭 79
関未代策 30～32
世利幹雄 85
千賀重義 50, 70, 77

そ

左右田喜一郎 90
副田満輝 82

た

大門一樹 41
大道安次郎 2, 8, 29, 30, 38, 39, 41, 42, 56
高哲男 88, 90
高木彰 49, 52
高木幸二郎 32, 45, 59, 67, 83, 84
高木真助 82～85, 7
高木暢哉 20, 30～33, 42, 61, 80～85
高木正雄 73
高倉泰夫 89
高島善哉 29, 30, 67
高島光郎 46, 58, 68, 69
高野利治 46, 68
高野岩三郎 76
高橋真司 52
高橋誠一郎 3～6, 17, 20, 29, 33, 57
高橋誠 70
高橋政明 87
高橋正立 44, 75
高山満 68, 70
田川恒夫 76
田口卯吉 76
田口卓郎左衛門 52
武田隆夫 85
竹永進 79
武野秀樹 81, 83, 86
竹村脩一 83
竹本信弘 76
竹本（守矢）洋 72, 78, 91
田添京二 38, 46, 91
多田顕 39～52, 54
只腰親和 54
立入広太郎 32, 33
タッカー, J. 40
伊達功 84, 85, 88
伊達邦春 42, 67
建林正喜 82, 83
種瀬茂 61
田中丘隅 46
田中謙一郎 90
田中正司 43, 47, 51, 52, 59, 68, 69
田中敏弘 i, 30～33, 41, 46, 48, 73, 79, 91
田中秀夫 79, 80
田中広滋 88
田中真晴 13, 17, 31～33, 40, 45, 51, 56, 72, 73, 75, 76, 80
玉野井芳郎 6, 32, 33, 38, 40, 45, 48～50, 52～54, 66, 67, 69
田村秀夫 33, 40, 52
ダルジャンソン 53

ち

チェインバレン 50
チャイルド 46
チューネン 44
チュルゴ 38, 47, 59, 83
長幸男 54

つ

津島陽子 51, 55
津田内匠 18, 33, 47, 53, 59, 64, 70
都築忠七 32, 59, 70
津戸正広 78

て

ディドロ 43
ディフォウ 40
出口勇蔵 i, 8, 14, 15, 20, 23, 29～33, 39, 40, 48, 56, 61, 64, 71, 72, 74, 75
手島堵庵 37
デュプュイ 40
デュポン 57
寺尾琢磨 38, 57
寺田宏洲 89
寺田光雄 77

と

トインビー 38
遠山馨 82, 83
時永淑 50, 67
時政勗 85, 87
徳増栄太郎 29, 30
戸田武雄 67
渡植彦太郎 90
トマス・アクィナス 72, 75
富塚良三 40, 41, 53
豊倉三子雄 50, 74
トレンズ 73
トンプソン 43, 53, 68

な

永井義雄 33, 43, 46, 51, 78
中江藤樹 41
長岡豊 82, 83
中久保邦夫 79
中沢慶之助 84
長洲一二 30, 31, 39
永田裕司 90
永友育雄 75, 76
中野正 40, 41, 66
中野徹三 47, 48
長野敏一 83
中峯照悦 85

葛西孝平　72,79,91
柏崎利之輔　40,47,51,69
ガース,H.H.　56,74
桂木健次　50,86
加藤一夫　40
加藤泰男　44
金井延　76
川波洋一　90
金子甫　47
金子ハルオ　43
金田重喜　43
カーペンター,E.　70
鎌田武治　46,68
鎌田鵬　42
河上肇　3,21,44,46,52,56,62
川口武彦　82
川崎文治　82,84
川島信義　47,48,54,59,81,83,84,86～88,90
川尻武　39
河野健二　13,18,30～33,38,40,43,46,52,54,74～76,78
川淵スミ　85
カンティロン　69

き

気賀健三　40
岸徹　80
岸田理　73,78
岸本重陳　53
岸本誠二郎　17,20,29～33,40,55,75,76
木崎喜代治　53,59
木下富夫　54
木原行雄　52
木村正身　18,30～32,38,45,47,61,65,74

く

楠井隆三　39
クチンスキー,J.　57
クニース　39
久保芳和　i,2,30～33,38,45,48,54,71,75
久保田明光　ii,2,4,5,6,8,9,17,29～31,56～58,64,66
久保田克美　80
久間清俊　87,88
熊谷一男　45,68
熊谷次郎　54,79
熊沢蕃山　45
クラーク,J.B.　79
倉田稔　50
グルネ　53
久留間鮫造　20,29,30,33,40,53
グレイ,J.　91
グレシャム　83
桑田熊蔵　76

け

ケアリー,J.　45
慶田収　89
ケインズ,J.M.　45,48～50,55,57,61,80,84～88
ケトレー　87
ケネー　8,22,38,43,45,48,52,55～57,66,67,70,74,82,83

こ

ゴェールケ　50
河野善隆　84,85
古賀秀男　87
越村信三郎　6,15,29～32,38,42,43,55,64
小谷義次　71
ゴットル　44
ゴドウィン　43,68,74
小林昇　i,12,19,29～33,38,40,41,44,46,47,52,53,59,61,68,91
コブデン　54
小柳公洋　52,85～89
コール,C.W.　9,56,72
コール,G.D.H.　78
是枝正啓　87
コンジヤック　38,70

さ

斉藤悦則　55
斉藤日出治　80
斉藤義介　52
酒枝義旗　42,44
阪上孝　54
榊原厳　39
坂口正志　79
坂田太郎　43,56
坂本慶一　44,46,48,55
坂本正　89
坂本武人　62,76
坂本弥三郎　4,20,29,30,33,50
坂脇昭吉　87
佐久間英明　79
佐々木武　59
佐武弘章　54,80
佐藤金三郎　17,32,33,50,53,56,59,60,75,77
佐藤茂行　49,55
佐藤武男　54
佐藤誠　86,89
サン・シモン　44,46,49
サンマルタン　49

し

ジェヴォンズ　51,74,78,84
ジェファスン　52,70
シェル　57
シエルビュリエ　46
重田晃一　13,46,59,73,78
重田澄男　33
シスモンディ　41,42,46,54,58,69
品川清治　48
篠崎敏雄　51,88
篠原久　78
四野宮三郎　50,51,69
司馬江漢　40
柴四朗　54
柴田敬　8,56
渋川則雄　53
渋沢栄一　48
渋谷一郎　41
渋谷行雄　42
島津亮二　40,72
清水正昭　53
清水川繁雄　43
下平尾勲　88
シャムレー　55,57
シュピートホフ　42
シュルツ　49
シュンペーター　42,49,50,67,83,89
城座和夫　42,44,49,51,67
ジョージ,H.　76
ジョーンズ,R.　39,40
白井厚　43,52,68,70
白杉庄一郎　6,29,30,38,45,72～74

す

スウィフト　78
末永茂喜　30～32,39,41,44
末永隆甫　77
菅知彦　83
菅野英機　80

人　名　索　引

あ

相沢秀一　40,72
相田慎一　51
相見志郎　31～33,38,44,71,73
赤羽豊治郎　48
赤羽裕　46,49
秋田清　90
浅野清　51
東晋太郎　40,47
遊部久蔵　15,29～33,38,40,48,58～61,64,66
アットウッド　84
安孫子誠男　80
アブラムズ　68
阿部真也　84,86
阿部照男　48
天羽康夫　49,61,79
荒牧正憲　32,33,47,49,81,84～88,91
アリストテレス　52
有田一郎　44,48,49,61,81,82,84～86
有田稔　43
有賀定彦　84
淡路憲治　51,77
アンダースン　47
安藤英治　41,66～69
安藤金男　50,52,54

い

飯田鼎　12,18,33,44,47,50,54,61,64,70
飯田裕康　51
飯塚一郎　40
飯塚正朝　52,79,90
池田一新　45
池田一浩　82,84
池田照彦　85
伊坂市助　42,45,51
石垣博美　41
石川郁男　59
石川興二　43,44,46,48,82
石田梅巌　39
石原忠男　29～33,39,42,67,68
石本美代子　41
磯川昿　79
磯部浩一　68
井田高之　89,90
市原亮平　76
井出口一夫　49,81,85,87
伊藤宏之　91
伊藤正純　79
伊東政則　84
伊東光晴　48
稲村勲　50,77
井上栄喜　89
井上琢智　51,78,91
井原西鶴　40
今井義夫　50
今村仁司　61
井村喜代子　41
入江奨　32,33,39,40,73,74,81,84,87
岩根典夫　48,50,83
岩野茂道　83
岩松繁俊　83,86

う

ウイラー　73
ウイルソン，J．　90
ウイルソン，T．　40
ウィンチ　70
ウェイクフィールド　52,74
上田辰之助　29,39,40
上野格　48,49,54,61,68
ウェーバー　39,44,47,52,56,61,66,68,69,74,75,80,81,88
ウェーバー（マリアンネ）　68
上原一男　69
ヴェブレン　42,61,75,88
植松忠博　77
上宮正一郎　72,78,91
ヴェントゥーリ　51,57,82
ヴォリンダー　43
ウォーレス　43
ヴォロンツオフ　74
宇治田富造　45
内田一男　82
内田芳明　68
内田義彦　17,29～33,38,44,56,66
ウッド　45
宇野弘蔵　53,74,75
梅井道生　87～89
梅沢直樹　78
梅津和郎　73

え

江副憲昭　87
エドワード3世　84
蛯原良一　46,46,53,91
エンゲルス　51,77,87

お

逢坂充　47,84,85
オウエン　44,46,50,57,58,61,68,70,78
大内秀明　48,49
大久保嘉三　74
大熊信行　48,50,51,67
大河内一男　29,41,55
大島雄一　42
太田一広　70
大津定美　76
大塚金之助　4,29～31,56,59,68
大塚久雄　83
大野信三　31,47
大野精三郎　31,32,39,45,69
大野節夫　77
大野忠男　50
大林信治　75
大淵素行　53
大森郁夫　52
緒方俊雄　53,54
尾形憲　67
岡茂男　38
岡田純一　32,33,43,46,51,60,65,70
岡崎栄松　45,48,74
岡村邦輔　44
岡村東洋光　88
岡本博之　41
岡本祐次　79
岡本義行　79
生越利昭　78
越智保則　87,89
小野隆弘　88
斧田好雄　75

か

戒田郁夫　47,76
海保青陵　46
カウツキー　51
賀川豊彦　50
梯明秀　40,44,72

経済学史学会三〇年史

一九八〇年一〇月二五日印刷
一九八〇年一一月一日発行

編　者　経済学史学会
発行者　経済学史学会
代表幹事　杉山忠平
印刷者　太陽印刷工業株式会社
発行所　〒422　静岡市大谷八三六
静岡大学人文学部経済学科気付
経済学史学会

THIRTY YEARS OF THE SOCIETY FOR THE HISTORY OF ECONOMIC THOUGHT

November 1980

edited by

THE SOCIETY FOR THE HISTORY OF ECONOMIC THOUGHT

Shizuoka University, Shizuoka, Japan

CONTENTS

PREFACE ..... Chuhei Sugiyama, President i

PART I

THIRTY YEARS OF THE SOCIETY FOR THE HISTORY OF ECONOMIC THOUGHT ..... Yuzo Deguchi, Ex-President 1

PART II RECORDS

I Rules and Regulations 26

II Directors and Offices 29

III Changes in the Number of Members 34

IV Subscriptions and Finance, 1979 36

V List of Papers read before the Annual Meetings 38

VI List of Common Themes discussed at the Annual Meetings 55

VII Public Lectures 55

VIII Special Lectures by Foreign Scholars 56

IX Exhibitions of Economic Classics 57

X Research in the Distribution of Economic Classics in the University Libraries 58

XI Publications 58

XII List of Survey Articles in the *Annual Bulletin* 60

XIII Proclamations and Appeals 62

XIV Members sent to the International Conferences 64

XV Branch Activities 65

Postscript to RECORDS 91

Name Index